第八章・本牧地区

第一節●豊かなる海

(1) 漁村と田園

●地区――ここでの本牧地区は、本牧町ほか一五カ町に、港湾産業関連用地としての埋立地、錦町、かもめ町、豊浦町それに本牧ふ頭を加えた地区をいう。面積七七七・三ヘクタールと広大だが、うち埋立地は四七〇・三ヘクタールを占め、既成の土地は三〇七ヘクタールにすぎない。

地区は、根岸や北方の地区と隣接、東は海に面していて本牧緑ケ丘、本牧満坂、本郷町、本牧町、本牧大里町など、一部が丘陵地で、埋立地や本牧町などが平坦地となっている。

この章では、特に本牧町、間門町の各一部、本牧十二天などアメリカ合衆国軍隊(米軍)によって接収された、もとの接収一号地、同二号地などを接収地と述べることが多い。

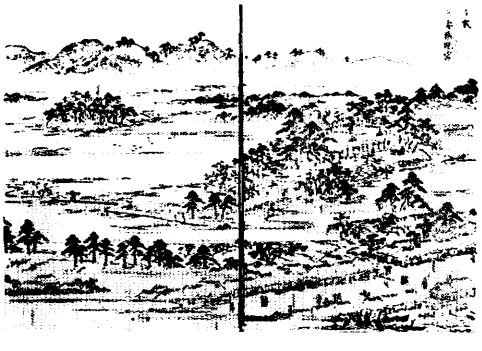
●江戸湾警備――この地区の埋立部分以外は、おおかた旧本牧本郷村の区域であった。その近世については『新編武蔵風土記稿』『江戸名所図会』などには、本牧本郷村は漁村として記され、その大要を知ることができる。しかし、近世において本牧が公的に利用されるのは、横浜開港の直前の嘉永七年一月、黒船到来にたいする江戸湾(東京湾)防備態勢の一環としてであった。

江戸湾の防備は伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総の海岸全体にわたって、旗本、譜代大名、外様大名によって、四三カ所、総勢三三万六、三八〇人に及んだ。(『横浜市史稿・政治編』)そしてこの本牧の海岸には本牧八王子鼻、十二天の台地に見張番所が置かれ、海岸の一部は陣屋となった。

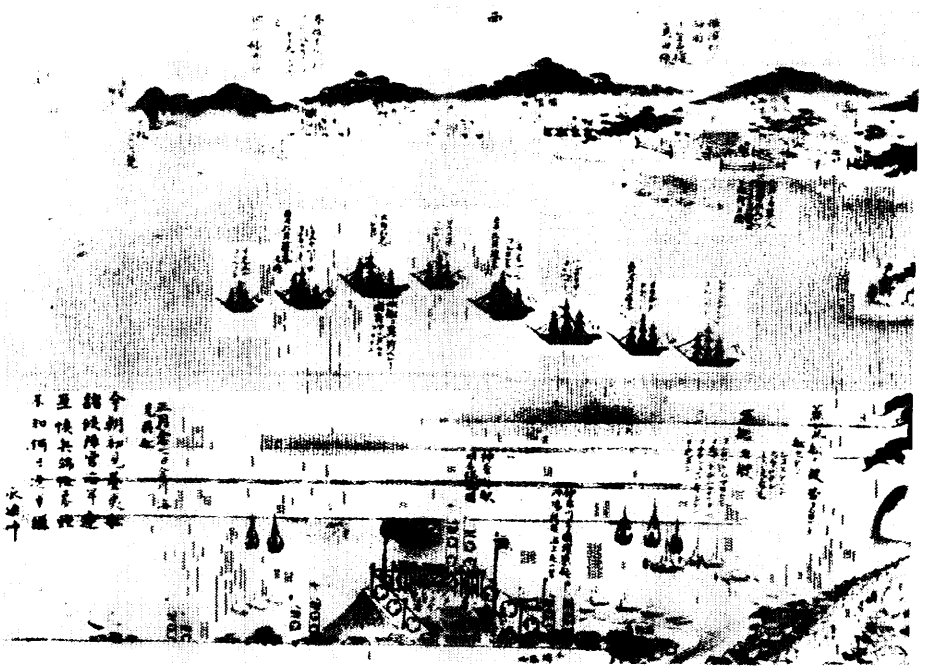
「黒船再渡来の警報に依って、江戸湾沿岸の警備を定めた時、本牧は因州鳥取城主松平相模守慕徳の警備区域となって、其加勢として松平格之進、同淡路守も之に加はり、総勢一万九千人を出張させて、厳重に固めていた。同町一帯には三十余棟の仮家を建て、十二天・八王子鼻等の山上に大筒を仕掛けて、黒船に備えていたものであった」と記している。(『横浜市史稿・地理編』)

八王子と十二天の台場には、大砲(玉筒)、足軽筒大小合せて三五八挺が備えられた。本陣は多聞院におかれ、台場から台場の間、本牧の海岸全部が兵によって埋ったのであった。翌年、再び来航したとき、黒船から一隻のボートが出て、本牧鼻あたりの海底を実測したが、この際本牧鼻の岩壁に文字を彫りつけたという伝承もある。

本牧の海は、彼等の故国のミシシッピー湾に似ていることから、ミシシッピー・ベイ(湾)と呼ばれたという。



本牧吾妻権現宮(〈江戸名所図会〉)



"米艦隊神奈川碇泊並海岸警固図"(安政元年)

黒船来航騒動ののち、横浜は安政六年開港したが、本牧地区は開港場建設のあわただしさに対しても直接的な影響を受けることなく、人々は相変らずの漁撈と農耕にあけ暮れて、明治維新があっても、この地区では、大した変動は見られなかった。

◉本牧十二天――ただ、明治二年(一八六九)十一月に、本牧鼻の先には横浜港へ入る目印として、灯台船が碇置され、翌三年の元旦から点灯されて、船舶の航行に活用されたが、このことは、明治に入ってから、地区においての当座の変化であった。

それに、風光の美しい海岸は外国人にことのほか喜ばれた。海岸はまた、外国人の海水浴の場所でもあった。ジョン・ブラックは本牧十二天について、次のように記している。

「外国人がはじめて日本に居住して以来、この美しい寺は徒歩愛好者たちが一、二時間の遊歩をのぞんでいるとき、歩を向ける最も一般的な目的地のひとつであった。寺は、横浜の買弁中国人たちが船舶の到着をみはる見張り所として用いた美しい丘のふもとのりっぱな老木の森の中に建っていた。見張り所は江戸湾全体を浦賀岬あたりの湾の入口まで見渡せるからである。丘の多くは最近採石のためにけずりとられた。幕府瓦解以来、寺の名前は『十二天』―十二の天帝―から『神社』に変更された。

寺は、大きな漁村の本牧と、そこから少なくとも二マイルはなれている、もうひとつの大きな漁村の根岸の一部の氏寺で、最高の寺であった。寺は海から二、三ヤード以内のところにあるの

本牧十二天の参道(1871年)

本牧十二天

で、海で水浴びしようと思う多くの外国人のためには、かっこうな場所である。また、よい影をつくってくれるかっこうな岩があって、ちょうど水浴者の利用のために、そこにおかれているようであった」(大野利兵衛抄訳『ザ・ファー・イースト』明三・九・一)

●実測図から――この地区の明治十四年頃(一八八一)の状況を『横浜実測図』で現在の地名にあてはめながらみると、本郷町三丁目のガス谷戸の旧東京ガス本牧住宅が住宅地となっているほかは、いまの本牧満坂や本牧緑ケ丘の丘地はすべて畑であった。これにたいして、平地の本郷町一、二丁目は、千代崎川の流れにそった一面の水田であり本牧町一、二丁目(旧、字箕輪下)も同じように水田で、その一部は大鳥小学校あたりの丘の下まで入り込んでいた。

本牧十二天の神社

丘地のすそは本牧神社(旧、十二天社)から薬師堂、そして山手警察署前の旧接収地(二号地)地内のPX(米軍隊内の売店)あたりまで道がつづき、道なりに住宅が少しずつ、つながっていて、そのうしろは畑地の和田山であった。

和田山の先端は本牧町三、四丁目で、このあたりの平地から畑が多く見られる。道は本牧三之谷方面へとつづく。畑地の向うは旧字牛込、宮原など、海に面して一本の道を中心に宅地がつづき、海岸は広く南に向って直線で本牧元町へとつづいていた。このあたりは、根岸にくらべて圧倒的に水田が多かった。

一方、南側の地域は、北部からつづく水田が和田山のすそで一

現在の本牧十二天の丘――雑木におおわれた小さな丘となっている

明治14年横浜実測図（部分・本牧地区）

日切れ、畑地となる。畑地の東側一体は宅地で、村落をなして遠浅の海岸に沿う。本牧元町である。この頃から本牧元町は、本牧地区の中心地と見ることができる。この村落以外、いまの間門町ほか各町の区域は、丘と水田と畑ばかりで、南側はきり立ったがけから海になっている。北側の丘（本牧和田、本牧荒井）に対して南側もまた丘地で、二之谷、三之谷、大谷（おおやと）、本牧大里町へと、それぞれの丘をなす。

丘と丘との間は広い水田、それぞれの谷に入って谷戸田となっている。わずかな宅地と畑とが丘すそにつづく。いまの三渓園も水田で、大谷とともに、三角形の灌漑用の大きな池である。この地図で見るかぎり、地区は変哲のない土地形態を示すが、こうした状況が明治から大正期に入っても、大きくは変らず、かんたんに地区が発展していった。特に明治三十年代に入ってもこの本牧は、いまだに田園地帯であった。

隣の北方の天沼にできたビール会社が、三十年代に入り、その盛りを迎えていたにもかかわらず、そこからの直接的影響はなかった。それに居留地山手とはへだたっていて、根岸地区ほどには外国人からの影響も受けず、せいぜい十二天社の海が海水浴に利用された程度であった。

本牧地区はなんといっても海に面していることで特徴づけられ、明治三十年代にも相変らず漁業が盛んであった。

そして、その北側横浜港内に隣り合せ、十二天の丘は、『海港港則』によって三十一年頃は、「横浜ノ港界ハ十二天（マンダリンブラフ）ヨリ燈船マテ夫（それ）ヨリ正北ニ向ヒ鶴見川口ノ東岸マテ引キタル一線内ニ含マル」というように漁場と港との境であった。いま、その十二天の丘は埋立地のなかにみどりを残して孤立して塚のようになっている。

◉海面埋立――しかし、本牧の海は利用開発に目がつけられた。明治三十一年（一八九八）七月二十三日、東京府北豊島郡奥田直弘ほか三五人によって、神奈川県知事にたいして、三五三万四、〇九九坪（約一、一六八ヘクタール）、工費一、六〇〇万円をもって海面埋立が出願されたことであった。その要旨は、横浜港が欧米の諸港にくらべて、進歩度合に遜色があるのは、土地が狭く、大規模の商工業がないことに原因がある。大工場と貿易に必要な大倉庫を建設しなければならない、そのためには、海面を埋立てる必要がある、ということであった。（『横浜市史稿・政治編』）

この出願は、許可されず、計画はつぶれたが、のち昭和の本牧埋立地構想の前提となったのではないかと、いまいう人もいる。

◉湿田地帯――本牧地区は依然として明治四十年代に入っても海岸からつづく平坦地では農村そのもので、さしたる変化はなかった、特に本牧三之谷方面の山は松と雑木林、それに谷戸には沼あり湿地あり、ほかはほとんど水田で、明治十年代のおもかげを十分残していた。

「沼では食用がえるがゴォーゴォーと、大きな声を張り上げて、

本目（本牧）の道祖神（本牧元町所在）

本牧の谷戸――おい茂った丘と一帯の田である

近くの小川には、メダカやウナギが多く、トンボはうるさいほどに飛び、セミは鳴き、夜ともなると、ホタルも見られました」（本牧三之谷有志座談会）

「三之谷はむかしは田でした。田といえば休耕がよいのですが、沼みたいなものでしてね、杭を打って地所の境をして、稲を刈る時は、畳二畳ぐらいの舟を買ってきて、それに乗ってやるんです。

いまの本牧大里の入口あたりが水源で、小さな川が流れていました。川幅は一間半から二間ぐらい、子どもの時には、川でフナを取ったり、水車を作って遊びましたね。今、川筋は細い道になっています。

古い屋号で矢根屋というのがありますが、あそこは川の始まる所で矢の根っこのような所だったんで、矢根屋といったんだそうです。震災のとき、その家には、何人もの人が屋根を直してくれって、来たりして困ったそうです」

「いまも多聞院の少し行ったところに道祖神の祠がありますが、もともと小さく粗末なものでした。村の人の信仰は篤くって、いつも長くて大きなわらじやぞうりが供えられてありました。

この祠を西に廻って南へ、今の本牧大里町へ行く畑道と、もう一本の本牧三之谷に行く、ダラダラ下りの細道の交わるところに空地があって、そこを天神の森と呼んでいました。昔、天神さまが祀ってあったとかで、畑のまんまんなかなもんですから、正月には近在のおとなまで集って、絵凧、字凧、鳶凧など、競い合ったもんです」（同座談会）

◉**タコ平さん**――「凧といえば、服部平吉さんという人がいましてね。その平吉さんは子沢山でしたが凧が大好きで、年がら年じゅう天神の森で凧あげをたのしんでいました。苗字なんて呼ぶ人もなく、だれからもタコ平さんタコ平さんと呼ばれてました。のどかな田舎本牧の名物男でしたね」（本牧地区有志座談会）

◉**合併**――明治三十四年（一九〇一）四月一日、本牧村大字本牧本郷は同村の大字北方、根岸村とともに、第一次合併によって市域に編入、本牧町と改称された。

村会や村役場についての記録は、いま地元に残っていない。

◉**本牧漁業**――本牧の漁業活動は、本牧十二天、宮原、原（現在の本牧町四丁目あたり）、牛込、八王子（現在の本牧元町あたり）の海岸一帯、いわゆる本牧本郷浦といわれた海で行われていて、江戸時代からの有数な漁村であった。漁業活動は明治、大正を経て、戦後四十年代に入っての産業関連用地造成の海面埋立まで、つづいたのであった。

こうした漁村に明治三十六年三月十一日、本牧漁業組合が結成された。漁場は一応本牧十二天の鼻から間門、根岸の間にあった「二ツ石」のところまでと決められ、魚種によっては獲れないので、その時は毎年根岸や磯子の組合へ頼んで、他の漁場でも漁撈を行った。

横浜市へ編入記念（明治34年3月）――本牧村村会議員と役場の人々，役場前にて〈石田兵一氏提供〉

明治四十年（一九〇七）十一月七日には、本牧町漁業組合区画での漁業海苔養殖場の設立が免許され、その月の十五日には、漁業貝類養殖場の設立が免許になった。こうして、本牧海岸での海苔養殖が本格的に行われた。ここにおいて本牧の漁業は海苔養殖が大きな比重を占めることになった。従って、ただ獲るだけの漁業ではなく、育てる漁業も早くから行われていたということになる。

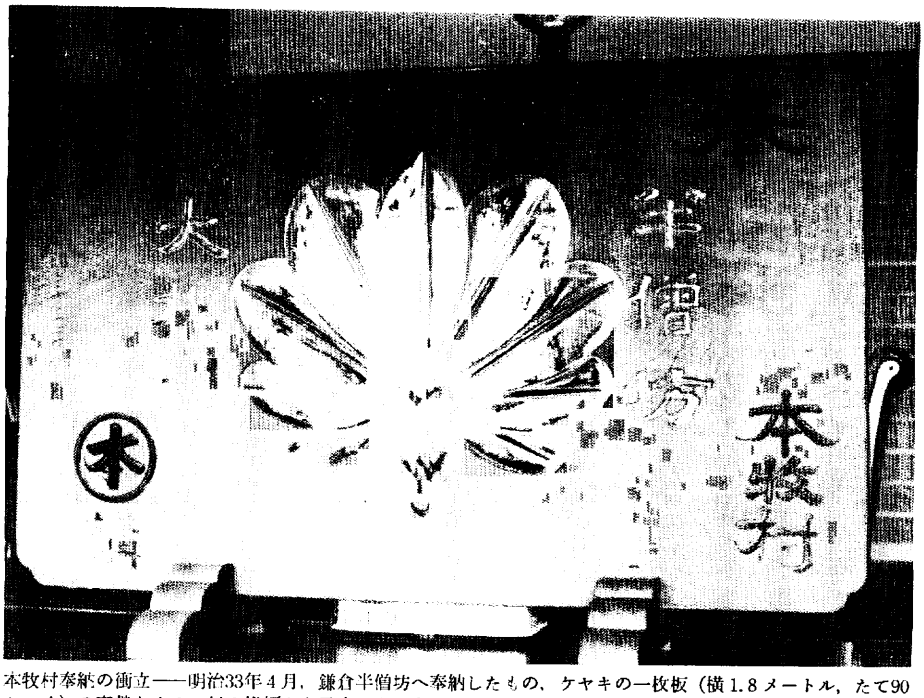
こうした状況は、明治から大正になっても大きな変化はなかった。

「根岸の人がこちらへ来たり、本牧から根岸へ行ったりした。そんな時、争いもあったね」（本牧漁業協同組合有志座談会）

「子安地先が埋立てになった時、子安とのトラブルが多かったね。向うは底引網が主なんですね。子安には底引網の場所がないので、本牧へ来る。それほど本牧はよかったんですね」（同座談会）

「一番トラブルがあったのはケタという漁具を使った時です。ケタにはヨウケタとカイケタがあってね、そのうちのカイケタは貝を獲る漁具で、ちょうど熊手のようなものに二間位網をつけて海底を引くようなもので、普通で三つから五つもつけて引くんだが、大きな船にそれを八つもつけて、引くもんだから漁場の海底が荒れてしまってね」（同座談会）

これは大正末から昭和の初めにかけてのことで、全体には大き



本牧村奉納の御立――明治33年4月，鎌倉半僧坊へ奉納したもの，ケヤキの一枚板（横1.8メートル，たて90センチ）の豪勢なもの，村の裕福さを示すようである

な変りはなかったものの、漁法は、年とともに改良、変化していった。

本牧の漁獲はおおかた次のようなものであった。

一月～三月　カレイ、アナゴ、コハダ、コノシロ、セイゴ、ボラ、車エビ、ギンポ、モクソ、タコ、など

四月～五月　カレイ、コノシロ、クロダイ、イカ、コハダ、手ナガジャコ、など

六月　カレイ、キダイ、カニ、車エビ、小魚、など

九月～十月　イワシ

昭和の初めから最近までの漁法は、巻き網、底引網、延べ網、もだて網、見突、さより網、八朔網、九りさし網、ろくだ、かい巻、一本釣り、などであった。

本牧大網組合奉納の親柱と玉垣――昭和11年1月のもの

本牧の漁業は大網といわれる網元を中心に行われた。

今、本牧町四丁目にある吾妻神社には、石段の親柱や玉垣が奉献されて残っている。

『本牧大網組合一同』として忍足忠蔵、岩崎勘蔵、早川園吉、大川梅吉、茅野次郎吉ほか五人の名が石段の親柱に刻まれ、また、境内をめぐらす玉垣には『本牧魚問屋組合一同』として、助七、米松、本勘、音秀、本勘松、伊勢清、本浜、伊勢又、中松、音吉の名が刻まれている。

玉垣には『昭和十二年一月建之』とあるので、石段もほぼそれと同じ時期と考えられるが、盛んだった漁業をしのばせてくれる。水揚げされた漁獲は大網から問屋へ、問屋は魚市場に卸し、さらに高級魚は、関内の千都世や八百政など、著名な料理屋に卸したという。

◉海苔養殖——海苔養殖は明治三十九年(一九〇六)、村瀬荒吉という人が主になり、ほかには根岸又蔵、大川鶴吉という人たちが、海苔の試作をして前に述べたように四十年の海苔許可を待って正式に養殖をはじめた。

「しかし、本牧の場合、海苔養殖場としては面積が狭いので、組合による割当制で、一軒あたり何さくというように決めた。その中には、オカサクと呼ばれる人たちも加わっていた。オカサクとは、のりだけをやって海に出て漁業をやらない人たちで、普通でいう漁師ではないので、漁業組合に加入する資格は本来ないが、組合に加入してもらい権利を持ってもらったのである。なぜ組合に入れたかというと、他の漁業組合との紛争から裁判になった際、その裁判費用が高いので、そのためということもある。それに問屋とか町の有志の人々に入ってもらった」と、漁業関係者の老人は語っている。

海苔の簀はナラやクヌギのせだを使ったが、二俣川(現、旭区)、戸塚、柏尾(現、戸塚区)杉田(現、磯子区)などから買って来て、馬力で運び、近所の女の人たちに一把いくら、今でいうパート・タイマーで、「ひびこき」という道具を使い、木の葉を取ってもらい、それを海の中に植えこんでいった。

海苔は冬期の仕事で、ちょうど農閑期にあたり、三月頃までに仕事をした。

海の深さによって異なるが、二・五メートルから三メートルぐらいの長さのひびを海中に植えて、自然にのりの種が着くのを待つ。十一月下旬から海苔が伸びてくるので、それを摘まんで漉き、一枚の海苔にしていく、といった作業であったが、これが昭和初期には年額四〜五万円に上り、昭和三十七年、海岸が埋立てられるまで続いた。

◉相変らずの田園——一方内陸部は相変らずの田園地帯であった。間門の場合、旧道沿いに並ぶ家は大部分が農家で、低地の水田や台地上の畑を耕し、さらに根岸の丘の方まで耕作をしていた。

「昔は田んぼで男の人が、夜、カンテラをつけて、赤蛙を釣って

田園の本牧（明治後期）――丘すそに草葺きの人家が並んでいる，夏ともなれば蛙の合唱でやかましかったといわれている，〈高田重次郎氏提供〉

いまして、それがホタルの大きいみたいで、ずい分きれいでしたね。いつでしたか、今の三渓園の付近に化物が出るっていうんで、夜のやぶかげがざわざわ、奇妙なうなり声、っていうんで、こわいもの見たさの人たちがぞろぞろ、大さわぎになったんです。しまいにはこの人たちをあてこんで夜店まででるようになったんです。化物の正体は判らない、半年たって若いもんが、正体をつかまえたんですが、何のこたアない、ショクリョウガエル（食用蛙の訛……編者）だったんです。今こんなことは想像もできませんが、のどかな時代でしたな」（間門町有志座談会）

◉台の音楽隊――このような田園地帯にあっても、本牧町字台あたりでは、少しばかり近代的であった。明治三十年代後半からのことで、楽器を使った音楽隊があった。

「私たちの子どもの頃から『本牧町台青年団音楽隊』というのがありました。出征兵士の送迎のための音楽隊で、子どもたちだけで出来ていました。父親甚蔵が日露戦争から凱旋してきた時、私はその音楽隊で小さな体で大太鼓を叩きました。私は明治三十四年七月生れですから、ざっと七〇年も前のことになりますね。

その音楽隊の前身は『郷友会』といって、大太鼓一、小太鼓一、それに竹笛、シンバルといったもので編成された七、八人から一〇人ぐらいの子ども集団で、『軍艦行進曲』とか『勇敢なる水兵』それに『凱旋』といった軍歌専門でした。別に指導の先生は決ってませんでしたが、地元にお住いの、小学校の音楽の先生

本牧町台の少年団々旗――綿布に筆太に書かれている〈池田六之助氏提供〉

高野巳之助先生が見えていました。練習場所は私の家で、なにしろおやじが『おはやし』好きで喜んで場所を提供してました。この主宰者は金子権兵衛という人でした。いつも三〇人ぐらいの子どもがグループで、外に出るときはつばのある帽子、上着は肋骨模様の軍服に似たもの、ズボンは赤でした。行進する時は、先頭に隊旗を持っていくのです。隊旗といっても子どもたちが持つ小さなもので、白い布に墨で隊名を書いただけでした。

青年団音楽隊になってから少しずつ近代化され、トロンボーン、トランペット、それにクラリネットやコントラバスが加わって充実し、成長した子どもを中心に、当時の青年団の音楽部となりました。メンバーは十四、五人で、この頃になると高野先生や海軍軍楽隊出身の人が指導者になり、私は補助指導員ということで、青年部音楽隊として盛んに活動したものです。

あとのことになりますが、日中戦争の頃は出征兵士の送迎や区民葬やらで家業の農業はそっちのけでした。

昭和八年（一九三三）、皇太子誕生をお祝いして『鯉のぼり行進曲』というのを、東京神宮前から宮城前まで演奏して歩きました。昭和十二年頃には、愛宕山のＪＯＡＫ（現、ＮＨＫ）のラジオ放送に出て七、八人の女子と一緒に『横浜市歌』を演奏しました。横浜市連合青年団音楽隊の名前で出演しましたが、本牧の連中が主体でした。

戦争が激しくなって解散し、楽器類は大鳥小学校に預けましたが、終戦後、学校が進駐軍病院になってしまい、それに戦後の混乱のなかでなにもなくなってしまいました」（本郷町　池田六之輔氏談）

この音楽隊は戦後復活することはなかった。しかしこの地区では江戸後期頃から「おはやし」が盛んであったという。太平洋戦争で中断したまま戦後は途絶えていたものを、昭和五十一年に、わずかに技法として残っていた祭太鼓を聞いた青年が習いはじめ、それがもとで一〇人ほどの同好者が参加して、昭和五十三年一月には、町内を獅子舞で巡るまでに成長したのであった。いわば復古的な音楽グループの誕生であった。

(2)　地域の開発

◉三渓園――明治後期の当地区はすべて水田と丘と畑、それに山林であったといえた。間門の場合、水田のなかに東福院があり、その両側は集落、東側には阿弥陀堂、中央部には神楽殿、水田のなかの十字路には祭礼ののぼりを立てる場所があり海岸には外人住宅があって、西側にはマカドホテルが見られる、といった状景であった。

こうした漁業の町と、のどかな田園本牧にも、三十年代末から四十年代のはじめにかけて画期的な内陸部の開発が始まった。明治三十九年、原富太郎（三渓）による三渓園の造成・開園と、四十二年横浜電気鉄道（後の市電）の開通などであった。

三渓園は貿易商原富太郎が明治三十八年（一九〇五）、三之谷の海に面した海岸五万六、〇〇〇坪（一八・五ヘクタール）の田や湿地帯を埋めたてて、広い庭をもつ別荘を建てたことに始まる。

地元の老人は、

「明治二十年代ですが、地主の須藤さんが仲立ちで、この辺一帯の土地を原善三郎さんが買い上げたんですが、何でも一反三円ぐらいだったとか聞いています。土地の管理はずっと須藤さんがされていたようなものです。めったに三渓さんとお会いすることはありませんでしたが、原さんは、地元には好感を持たれていましたね」（本牧地区有志座談会）

と語っているが、三渓園の造園は三渓自身の創意によるもので、養父善三郎の土地をうけつぎ、近隣の土地を加えたのである。創園当時この辺一帯は海に面し、丘陵あり、沼ありで、自然環境にも恵まれていた。三渓は大里町の一角に広大な邸宅を構えていたが、本牧三之谷に居を移した三渓は、まず三つの丘の中央丘山に山荘を建てた。松風閣である。そののち北東の山際に藁葺の邸宅を構えて本邸とした。明治三十五年、自ら桃山遺構の「旧天瑞院寿塔覆堂」を京都大徳寺から移築した。もとからのアシの池沼を利用して掘りひろげ、大池をつくりハスを植えた。広大な三渓園の外苑も整備できたので、明治三十九年（一九〇六）五月一日、市民に無料開放した。

「三渓園は開放当時、昼夜関係なく、開放されてました。小、中学生が遠足などに来ていましたが、あまり他の客は見えていませんでした。けれど市電が開通されてから見物客がぐっと増えてきましたね。それでいちはやく本牧が有名になりました」（本牧三之谷有志座談会）

ときに三渓三一歳。明治三十二年、富太郎は生糸を業とする個人営業の原商店から、合名会社組織に改編し、輸出部のほか地所部を設け、土地の投資にも着手した。彼は養父亀善原善三郎の名声と地位の単なる後継者ではなかった。同年善三郎の居住していた野毛老松町の大邸宅を離れ、当時横浜からほど遠い辺ぴな本牧三之谷に居を移したのであった。善三郎の没年でもあった。

開放後も整備はつづけられ、四十年「横笛庵」を奈良法華寺から、ついで同年、鎌倉の「東慶寺仏殿」を移築した。梅林もこの年川崎の郊外と杉田梅林からそれぞれ移植をした。さらには、大阪生駒山から岩石を、京都鞍馬山や愛宕山から塔や石灯籠の青苔を運ぶなどして造園が進められ、明治四十一年二月ようやく完成となった。さらに今、三渓園中央の山の上に立つ三重塔「旧燈明寺三重塔」を大正二年十月に移築し、六年には「臨春閣」の移築が完成した。これらは、いずれも震災・戦災をのりこえて優雅なおもむきを示している。

こうして次々と由緒ある古建築物を入手しては、三渓のイメージによる、よりふさわしい場所に移築したのであった。

三渓園は開園以来七十数年間天下の名園の名をほしいままにし

ている。

◉鶏村語る――一方、三渓による芸術家たちへの援助は物心ともに行なわれ、必然的にそれらの芸術家たちが三渓園へ集ってくることになった。

下村観山、横山大観、安田靫彦、今村紫紅、小林古径、前田青邨らであり、日本美術院の若手を中心に、新しい時代の新しい美術の誕生をめざす者たちへの援助であった。このように三渓園内において、若手画家を育成したことは原三渓の功績とされている。

そのうちの一人牛田鶏村は、この頃の画家について次のように語っている。

「下村観山が二十歳頃のとき、天心に紹介されて原さんの家へ来るようになり、国宝級のものがどっさりあるというんで、美術雑誌の『国華』の関係で瀧精一が来る。模写するってんで荒井寛方が来る。美術批評家の中川忠順も来る。原さんも将来ある若い絵かきを世話する気になって、今村紫紅、安田靫彦、小林古径、前田青邨などへ、月百円ずつ出して後援するようになったのです」（『月刊よこはま』昭二十五・八）

「私は小学時分、つまり横浜学校時代息子の原喜一郎さんと同級で、原さんは私のことをウシダといわず、ギュウデン〳〵といって仲好くしていましたから当然出入りをしたし、死んだ速水御舟や小茂田青樹なんか、私が世話をうけるようにしたんです」（同誌）

こうした芸術家のほかに、和辻哲郎、安倍能成、阿部次郎、児島喜久雄もさかんに出入し、三渓と食事を共にしながら議論に沸いたという。

インドの詩人タゴールは、岡倉天心の推薦によって、三渓園にしばらく滞在した。このときの通訳は矢代幸雄（のちの美術評論家）であった。下村観山は、その住まいを三渓園の近く、和田山に持っていたので、地元には今でも、観山についての思い出を語る人たちが多い。

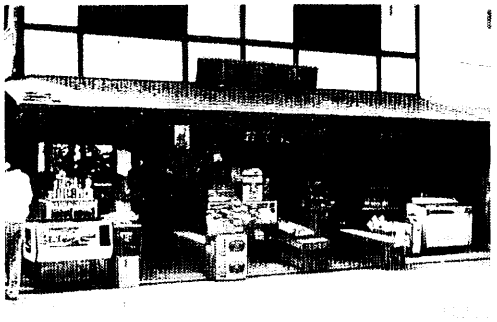
「ある時、三渓翁が観山に屏風絵を依頼していましたが、観山先生は毎日毎日酒ばかり飲んでいて、ちっとも書きはじめない。ところが、一カ月たったある日、『旦那さん出来ました』といって書き上がったのを見せました。たった一晩で書いてしまったんです。今もそれは残っていると思いますが、私の妹が原さんのところにつとめていたので知ってるんです」（本牧三之谷有志座談会）

「観山先生は酒が好きだったんですが、体を悪くしたもので、医者から酒を止めるよう、言い渡されたんですね。それで奥さんが私共に相談に来られ『医者が言うには、ごく上質のブドウ酒なら月に何本か飲んでいいと言う』ので頼まれました。それで明治屋に行って舶来の良い品を一ダースずつ買ってきたもんです」（同座談会）

◉横浜電気鉄道――横浜電気鉄道株式会社による電車鉄道は明治四十四年（一九一一）十二月に敷設された。地区内は山下町西ノ

開通した横浜電気鉄道（明治45年頃）――竹輪下停留所付近

十二天停留所付近



三渓園前の茶屋、旧状を残している

三渓園へ遠足（大正初期）——入口の桜道で〈高田重次郎氏提供〉

花見をかねた運動会（大正5年）——園内で〈小畑重蔵氏提供〉

橋から本牧町字宮原間であった。これは路線全延長で五、一九八・四メートル、面積八、六九〇坪（二・八七ヘクタール）が軌道用地にあてられた。その工事に際して、沿線上にあった建物、延面積二、八六〇坪（九、四五四・六平方メートル）が除去されている。

軌道敷設は、急ピッチで進められたが、土地の買収などの障害で、なかなかすんなりとはいかなかった。

例えば、明治四十四年五月二十九日づけ、横浜電気鉄道株式会社から某家にあてた、田六畝歩の軌道用地買収にあたっての文書が残っている。それには「再々協議をしたが、いままでお答がない。ついては、よいか悪いかお答をいただきたい。万一、お答がない場合は、協議がととのわないものと認めて、収用審査会の裁定を得ることにしたい」ということで、強制収用を示唆する内容のもの。これなどは買収価格の折り合いがととのわなかったことによるものであり、強制収用も辞せずとする横浜電気鉄道株式会社側の態度を示すものであった。こうしたこともあったが、とにかく軌道用地が確保されて、電気鉄道は敷設されたのであった。

停留所は麦田町、上野町、千代崎町、台、小港、そして終点が宮原で、これらの停留所の周辺から人家が建てられていくことになる。さらにこの軌道わきには新しく人道ができた。

そして字宮原までの路線は、大正十三年（一九二四）四月には、字三之谷まで延長された。

◉影響——三渓園の開園や電気鉄道の敷設は、地区にとってはまったく画期的なことであった。いままで「野良」といわれた田園地帯は刺激され、急速に近隣が開発されていった。地元の人々はいう、「三之谷は原さんが力を入れて、和田山をくずした土で三之谷一帯を整地したんです。このあたりは新開地といいまして、田舎に都会がぽっと出来たって感じでした」（本牧三之谷有志座談会）

「原さんの力で、宮原までだった電車が、こっちの三之谷まで引っぱってこられました。それから本牧は開けはじめたんです。

原さんの地所を借りた人には、一年間電車の無料パスを発行する、というような住宅誘致策をやりましたね。

それからどんどん住宅地ができました。和田山を切りくずしたところは、山をひな段にして別荘地にしたんですが、関内あたりの有力者で成金（たりまん）といわれる金持ちの人がどんどん別荘を建てましたね。そりゃァ住むのには閑静で海には近いし、こんないいとこ

亀ノ子石——町内会が祀っている。

ろはありませんもの…」（同座談会）

「商店の人たちの三渓園へ払う敬意は大変なものでしたね。三渓園のお蔭で商店が成り立っているようなものでしたから…。このあたりは高級住宅地でしたので、三個十銭のゆで玉子も一個五銭で売った方がよけい売れる、という土地柄でした」（同座談会）

「三渓園の入口には大きな茶屋ができて、花見によし雪見にまたよしで横浜は勿論、東京あたりからぞくぞく見物に来ましてね。桜道の茶屋では貝細工が売られましてね。よく知られてませんが、江ノ島の貝細工は、実は三渓園の貝細工にヒントを得て売り出したもんです」（同座談会）

この一帯の埋立整地工事は、平塚組や長坂組という土木業者が沼を埋立て、湿地に盛土して、原三渓の地域開発の構想が実現したのであった。工事の従事者が多いときは一、〇〇〇人にのぼり一時的なにぎわいとなった。このことはのちの三之谷商店街が発生する遠因となったとされている。童話作家の平塚武二は、この平塚組経営者の子息である。

「平塚武二は、私どもと本牧小学校の同級生で、私たちはタケちゃんと呼んでましたが、おとなしくって、勉強もなかなかできて優秀な子どもでしたね、いたずらはあまりしなかったですがね…。それにネ、平塚組というのは、別に大きな事務所を持ってませんでしたけれど、工事は手広くやりましたね。三渓園とそのまわり全部、大里の土地もそうでしたね…」（本牧地区有志座談会）

土地開発業者の内容など詳細はわからない。ただ三渓園の入口近くの、俗にいう「亀ノ子さま」の祠には、「平塚組」の刻銘のある石の小さな香華台が、ひとつだけ残されている。

●**花屋敷**――この平塚組の平塚福太郎は、土木事業のほかに、四十四年（一九一一）十二月には三之谷に本牧花屋敷を建てた。敷地内には池や滝をもうけ、小さな動物園や水族館もつくり、初夏にはツツジ、秋にはキクの花壇がもうけられ、演芸の常設場もあった。町の人々はもとより、市内の人々がここに集まった。この頃の横浜では物珍らしい有数な行楽地となったという。

大正初期には、児童倶楽部ができて、本牧小学校などの児童を会員として、催物を行なった。

しかし、このレジャーセンターともいうべきものも大正八年頃には解散した。本牧地区繁栄のパイオニアも短命であった。（『横浜社会辞彙』）

地元の人はいう。

「花屋敷は広かったですよ。場所は今の並木薬局から本牧病院のところまで、海に向って、長方形に広くなっていました。

建物自体、立派ではありませんでしたが、動物がいて、遊園地があり、池や滝などもあって、迷路なんかもありました。キリンや猿がいましたね。「菊人形」なども開かれ、小学校の遠足などにもずいぶん利用されてましたね。

まあ、今でいえば、遊園地と動物園を兼ねたものです。池があ

花屋敷の広告

秋の花屋敷

菊花壇　菊花数百種

四季の草花いろ〳〵

菊細工活人形

富士の大瀑布

珍獣動物

活動大寫眞

本牧花屋敷

貸地貸家広告（明治45年1月）"横浜貿易新報"

って、池から滝が落ちてました。花屋敷の入場料は、ハッキリと覚えてはいませんけれど、子どもで七、八銭だったんじゃあないでしょうか」（本牧三之谷有志座談会）

この花屋敷は、その閉鎖後は復活しなかったが、三之谷を観光地として一般に印象づけたことはたしかであった。

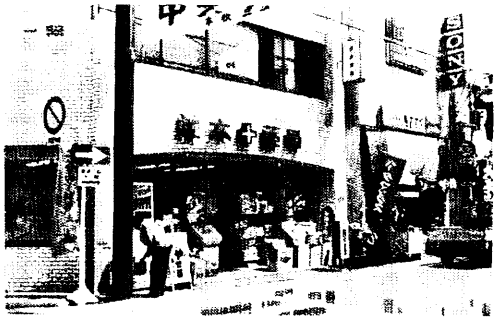
●田園開発——原三渓の構想による宅地開発は盛んに行われたが、原の経営する原地所部からは新聞広告が数回出された、貸地・貸家の広告で当時の横浜貿易新報の一ページを使っている。

こうして、電車のターミナル、三之谷方面が繁栄していったが、沿線に当る一帯は、大正の初期はまだその兆候が少なかった。

「電車が敷けたものの、その軌道に並行して道路を作らなかったもんですから不便でした。トンネルができてから、軌道のわきに人道ができて、それからが便利になりましたね。いままでの農家のほかに、ぽつぽつと勤め人の住宅が建てられ、それにつれ店も少しずつできたという程度だったんです。

大正のはじめ頃までは、まったくの田園地帯で、海に吹く風も涼しく、夏は海水浴の絶好の場所でしたね」（本牧地区有志座談会）

「上台幼稚園前、車庫から下って本郷町一、二丁目の所は、田んぼといってもどぶっ田のようなもので、米もあまりできない『よしずの原』でした。少しよいといっても『蓮っ田』で、鮒などをよく釣ったもんです。この辺の、上台も、震災前はまるっきり家



花屋敷跡地（現本牧三之谷五番地の一画）

も無かったが、ただ一軒だけ中沢さんという人の屋敷がありました。洋館の三階建で、中庭でサーカスなどがあり、よく見にいきました。そのそばの道にはわずかですが新種の桜なんかが植えてあり、麦田の「桜道」に対して『新桜道』といいました」（千代崎町有志座談会）

◉上台の西洋館――談話にある上台の西洋館は、明治四十二年（一九〇九）の建築。その後諏訪町の園田邸内に移築されたといわれているが、園田邸はさらに昭和五十二年春には個人によって山手町に移築保存され、今では「山手資料館」として公開されている。この建物は当時の建物の一部がそのまま残ったものと推測され、軒まわりや窓のひさしなどは洗練された組立てで、現存する明治期の洋風建築として数少ないものの一つである。

◉観光地――こうした地区の発展とともに、もともと風景のよいこの地区一帯は、観光地として宣伝されていった。前述の原地所部の新聞広告は、観光地として、十二天を紹介している。

「横浜電鉄の新線千代崎停留所を出て、東に走れば眺望俄かに左右に展けて眼前に来る三角形の底辺一帯、蟹荘参差として岸樹の隙に映じ車窓袖を掲げて波徐かなる緑刷の湾内より徂徠の片舟を招くべし」（『横浜貿易新報』明四十五・一）といった美文のあと、十二天停留所にて下車するのが便利としている。

この頃の状景について作家有島生馬は次のように記している。

「久しぶりで三渓園の方へ行ってみたくなった。本牧行の電車は込んでゐた。後ろの車掌台に立って異人や女異人の異った匂の間にはさまって、薄暗いとんねるを通った。

とんねるを出抜けると港外の海はまともに西日を反射させて、まるで磨いた許りの刃物に簪のあたったやうな黄色、橙色がぎらりとしてゐた。大きな北方の渓、ぶるっふの丘、電車の中の乗客の鼻の下の反射まで、悉く同じ色で染った。女異人等のひらひらさせる扇子も光った」（有島生馬『嘘の果』）

ここでいう「とんねる」とは、現在の山手第二トンネルで「港外の海」とは、麦田から、上野町、本郷町へ、本牧二丁目から、小港町にかかったあたりのことである。

◉鉄道とビール会社――電車が通って便利になったのは、地域の人たちだけではなかった。北方地区の章でも述べたが、北方天沼のビール会社にとっても重要で歓迎すべきことであった。鉄道とビール会社は連携、天沼のビール会社の構内から、千代崎町のほか本牧上台、箕輪下を通り、元町まで専用引込線を作り、専用貨車で製品を輸送し、西ノ橋（元町）の河岸からダルマ船に積み込んで出荷したもので、横浜市における貨物専用車の始めであった。この専用車は電動有蓋車二両と無蓋車一両で、大正二年五月六日から営業が始まり、震災までそれがつづいている。

今の本牧町一丁目二五番地近くには倉庫ができ、ビール製品輸送の拠点となった。

「この倉庫はキリンビールが製品をここまで運んできて、それを

専用貨車に積み込むのに使っていたんです。それを貨車で、西ノ橋まで持って行くのです。すこし前まで、交通局の所有地だった場所がそうです。そして下の堀川で待っているダルマ船に積み込んでは、各地に送っていました」（千代崎町有志座談会）

「市電のプラットホーム前に、出荷用のビンと空ビンとが、山のように積まれていました。引き込み線です。そのときの荷物電車は、屋根のないものでした」（同座談会）

「それで、ビンには、藁でできた『つと』がかぶせてありましてね。三角のムギワラ帽子になるんで私ら子どものときは、これをかぶってよく遊んだもんです」（同座談会）と地元の人はいう。

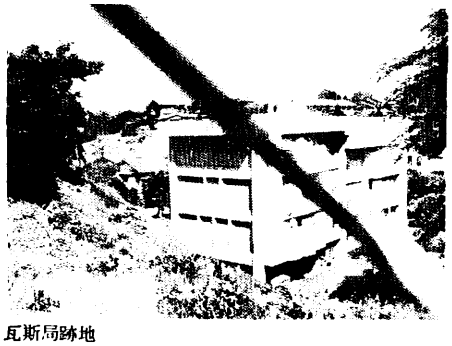
大正年間本牧地区は、本牧元町の既成市街地のほかは、三之谷のまわりの新開地や住宅地に、電車が通って人々に利便を与えたが、地域としてはそれほどの変化が見られなかった。大正二年、本牧二丁目には、真田加工の石田製紐工場が創業されるなど、ごくわずかに近代的事業を始める人も出たものの、ほかには見るべきものはほとんどなかった。現在の本郷町一、二丁目あたりは谷戸田と農道であった。いまその谷戸は、亭々と立つケヤキの老樹数本があり、尾根道のかたわらに苔むした祠があり、そして楠の大樹が茂っているが、地元の〃、は、明治末期の本牧をしのぶよすがにしている。

◉瓦斯（ガス）谷戸――「この辺（ガス谷戸）は沢が旧道で、農道のようなのが本通りです。この辺には古い木が多いでしょう。その中でも大きな木のところに『お稲荷さん』がありますが、この木は御神木となっています。昔、海からその木が見えて、漁師が船をあやつるときの目印にしていましたね」（本牧地区座談会）

「谷戸の呼び名は時代とともに、いろいろと変わっていますが、それは呼び名にする目標物が三十年ぐらいたつと変わっちゃうからです。ガス谷戸のことを、明治の初期から半ばころの人は、麩（ふ）屋の谷戸とも呼んでいました。ガス谷戸という呼び名は比較的新しいんです。明治十年代、大沢さんが盛大にやっていた大沢牧場があったので大沢谷戸とも呼ばれますしね……。

ガス谷戸のもうひとつ向こう、池田さん寄りにあんこ屋の谷戸というのがありました。あんこ屋があったからなんです。ここに

ガス谷戸風景


瓦斯局跡地

瓦斯局の施設跡

はいい水路がありましてね。上からずうっとつながっているんですよ。これは地下水らしいですよ。井戸を掘るといい水が出たらしい……」（同座談会）

「そうですね。大沢谷戸も両側はほとんど田んぼだったんですよね。その田が埋められていくのを知っています。その水路を利用したのが、先ほどの話に出たあんこ屋ですよ。良いあんこを作るには、いい水でなくちゃあいけないんです」（同座談会）

こうした地域に、近代的な施設ができるのは、大正十二年、いまの本郷町三丁目に、横浜市の瓦斯局本牧出張所が置かれたことからであった。これが地域の公的な利用の始めであった。高さ二一・六メートル、容量三、五四〇立方メートルの瓦斯溜があり、この本牧出張所に送られて各戸に配送されている。しかし、地元の人々は、この瓦斯溜について、「家が少しあった所にガス会社が出来まして、平地に大きなガスタンクがありました。昔の洋館みたいのは事務所でしてね。このガス会社では土地の人を正式に従業員としては採用しませんでした。またガス会社があって、特にこの辺が開けたということでもありませんでしたね」（本牧南部地区座談会）

と言い、地域の発展のきめ手にはならなかったという。

◉三渓園のまわり――しかし、地域でも部分的には、風景と環境のよさが一般に注目され、三渓園の人気が高まるにつれ、少しずつ開発されていった。特に三渓園の前には、大正元年（一九一二）十月に、料理屋、待合による本牧二業組合が設立されるまでになった。

「大正元年に私どもが組合を作ったとき、表通りの商店街には料亭、裏通りには待合、茶屋、芸妓置屋といった花街が出来上っていました。桜道にも二、三軒あって、なかなかの繁盛ぶりでした。そのうえ桜道の境から三渓園寄りは浜の紳商、貴賓の自宅がたくさん建てられ、いわゆるお屋敷町となりました」（本牧三之谷日下部勇蔵氏談）

「本牧が新開地として、賑やかな全盛時代は震災までで、震災後は華やかさがなくなって地道に発展したんです。それが本牧でした」（本牧地区有志座談会）

さらに大正三年四月には、歌舞伎座の重役柏木多七の女婿遠藤為春によって、三渓園入口に、芝居小屋の「横浜演舞館」が建てられた。自宅の庭に、大正二年九月現在の南区共進町で開催した勧業共進会の演舞館を移しておいたものを、さらにここに持ってきたものであった。

横浜演舞館は、この年五月九日開場され、柿落しは菊五郎、米吉、三津五郎、男寅一座。四年四月には、松井須磨子が『サロメ』を演じた。大正六年廃座されている。（池田千代吉『横浜の芝居』）

「それと活動写真や新派なんかもやってました。なにしろいろんなものがかかって、ドサ廻りの東一座なんかも覚えています。いまの本牧三之谷七五の港寿司あたりにありましたね。でも割合と

横浜演舞館の跡地――道路と左右の家を含めた土地（現、本牧三之谷）

本牧二業地があったあたり

早くつぶれちゃいましてね。あれにゆくなら、電車賃かけて伊勢佐木町の喜楽座とかオデヲン座、又楽館なんかにいった方がいいって、本牧の人間はあんまり観ないんですよ。だから商売にもなんにもならなかったんでしょう」（本牧三之谷有志座談会）

「まあ劇場ができたんですから、かなり繁栄してた証拠でしょう。当時、横浜の有力者がこの辺に住んでいたんで、問屋筋では、本牧は伊勢佐木町に次いで良い品が出る（買われる）といわれてましたね。

本牧のこの辺は大正の初期、成金の旦那方で『つばめ会』というのをつくっていました。だいたい、この人たちの勤め先が山下町や関内方面でしたので、南から北へ、毎日往復するというんで、名づけられたそうです。旦那方というのはその頃の横浜の有力者ばかりですよ。園遊会なんかの当時の遊びも大いにやってました。

日ノ出館や旭館という海水浴場がありましたが、あそこの一カ所をつばめ会で買い切っちゃって、会員はカードを見せて出入りしていましたね。

旦那方ですから、遊んでくれて、ずいぶん業者は後援してもらいました。江戸時代の箱根用水建設の友野さんという有名な人のご子孫もいました」（同座談会）

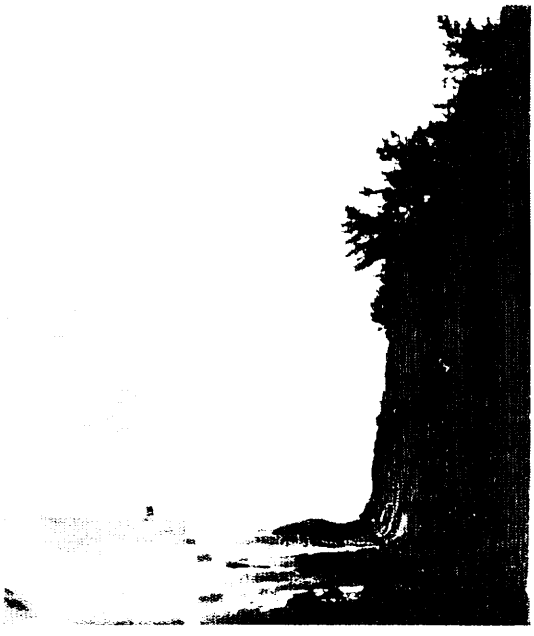
明治末期は、本牧の静かな田園地帯をベルト状に、田を埋め畑を潰して、砂利道を造り、軌道用地がそこに設けられたことで、大きく変化をはじめた。停留所は、はじめはあまり利用されなかったが、原合名会社を中心とする土地開発の宣伝は効果をあげて、平坦地では分譲土地が売れ、三渓園を中心とする三之谷のまわりの和田、大里に別荘がふえていった。例えば和田山には下村観山邸、大里には小野光景邸があった。このあたり田園にめぐまれた自然環境が大きくものを言ったが、一方では、本牧は漁村として繁盛し、さらに海は外国人の海水浴で賑わった。

(3) 外国人とのかかわり

●**本牧海岸海水浴**――十二天先から八王子にかけての海岸は遠浅で、しかも波静かであった。ここは、外国人にとって絶好の海水浴場であった。すでに明治十三年（一九二四）の外国人旅行記の一節には「断崖からけわしい坂道を降りると、稲の栽培されている谷間に入る。ここから数本の小道が伸びて、ミシシッピー湾の絵のような入江に富んだ海岸にある、数多くの小さな海水浴場に達する。断崖に住んでいる多くの人びとは五月から八月にかけて、横浜の暑苦しさを避け、よく澄んだあまり冷たくない水を浴びて楽しむために家族たちをそこへ送るのである」（アーサー・H・クロウ『ハイウェイズ　アンド　バイウェイズ　イン　ジャパン』一八八三年刊）

と、本牧の海水浴場を外国人が記しているが、ミシシッピー湾といわれたここで、外国人がレジャーを楽しんでいたことがうかがわれる。いつ頃から外国人の海水浴場であったかは明らかでな

本牧の外国人住宅――海に面した本牧には外国人が相当居住していた。これは今に残る住宅の一つ（本牧元町所見）



本牧海岸八王子鼻――陽が沈む本牧海岸、こうした光景を絵師広重も描いた〈横浜市図書館提供〉

いが、大正初期から震災前は特に、盛んであった。地元本牧の人たちは、この海水浴によって外国人とかかわりを持つようになる。このことは地区変遷の節目の一つともいえる。

「本牧元町あたり、外国人専門の海辺がありましてね、そこでいつも外国人が泳いでいました。この一区画には柵がしてあったんです。海に入るまで、陸から砂浜にかけてずーっとね。トンボ線（鉄条網…編者）ですよ、それでね、そこは『立入禁止』って木の札に書かれていて、日本人は入れなかったんです。『日本人の子どもがたくさん入ってくるから注意して下さい』って必ず怒ってくるんですよ。子供たちは陸から入れないものだから、海からずーっと泳いでまわっては、外国人のハウスを見に行くんですよ。

その時分、我々男の子はまる出しで泳ぐんですよ。そうすると外国人がね、日本人は不潔でいけないって、外国人の方へ泳いでゆこうものなら、ダメだダメだって、手をふって怒るんです。だから外国人のかこいの近くでは泳げなかったもんですよ」（本牧地区有志座談会）

●**サマーハウス**――地元の老人は子どもの頃（明治後期）の話として、

「柵の向こうには、サマーハウスがあって、外人は長崎さんの所（本牧元町二八七番地あたり……編者）から入るようになっていたんです。サマーハウスというのは、赤くペンキを塗った掘っ建てで仮造りの家でね。中は八畳位でしたね。

それがA、B、C、D……と幾つもあってね。そう、こっちに十二軒位、あっちの方も十軒位あったかしらね。

日本人も経営していて、貸していたんです。地元の人で半五郎さんは七、八軒持っていました。赤いうちだったもんだから『アカウチ』って地元ではそう呼んでいました」（同座談会）

このアカウチは本牧元町の浜辺に集中していたという。

「サマーハウスには、シャワーがちゃんとついていました。シャワーというよりも、井戸水を汲み上げて溜めておいて使ったんで

八王子の浜辺――八王子鼻の森のなかには外国人の住宅が見える

すね。上からジャーと流すんです。今と違ってそりゃ簡単なものでした。

そしてね、三軒の家を一人の日本人が面倒見ていましてね。紅茶を入れたり、コーヒーを入れてやったり、海水着を干して、又翌日着られるようにしてやったりするんですよ」(同座談会)

これは、地元にとっては、副収入源ともなっていたようである。

「うちのお袋なんか、このサマーハウスを三、四軒面倒を見ていたんですけれど、外人がトマトが余ったから食べろ、なんていってくれるんですが、この頃はトマトなんぞは南京ナスだの赤ナスだのって、この辺の人だって食べてはいない。いらない、いらないって断るのが大変だったそうです。牛乳だの肉だのと、その頃のめずらしいものを貰ってくるんですが、昔の人は食べなかったもんです。そのころは普通の家でも、夏になると一部屋だけ貸したり、畳を抜いて板敷きにしたりして、家を貸したりしてましてね。朝からは来ませんからね。お昼頃来て晩方帰るんですよ。その頃は自動車なんてありませんからね。みんなベットつきの馬車でバカバカ来る。

サマーハウスは、ひと夏単位でね。ふた月でも、ひと夏っていっちゃうんだけれど、それで一年の家賃を取るぐらい高い値段でしたね。だからサマーハウスの三、四軒持っていれば、今のアパートを一軒持っているようなものでしたね。根岸の方も遠浅でしたが、道がよかったり、電気鉄道があったりしてでしょうね、海

外国人専用海水浴場の跡――(本牧元町本牧南小学校北側裏)

水浴は、ここだけに限っていましたね。その上、たいへんことは水がきれいでねえ。外人は早くから海水浴にいいって目をつけていたようですね」(同座談会)

こうして外国人は本牧海岸で夏の夜もたのしんだ。震災前頃は「海で泳いだあと、外人は夜になると海岸に出て、乗ってきた自動車のヘッド・ライトで砂浜を明るくするんです。そこでレコードをかけてダンスが始まるんです。

見ていると踊らないかって。このとき十六歳の女の子ですから恥しくって恥しくって。でも、はじめてブルースを間違いながら踊りましたよ」(同座談会)

◉**本牧の夏**——本牧は夏になると途端によその人々の遊びでにぎやかになる。本牧はまた豊かな四季に恵まれていた。

「やがて青黄い光線が室の中に瀰漫して、夢現の境界線が朦朧として来ると、その頃にはもう此本牧にも麦藁帽子が潑剌として疲れた中折帽の中を泳いで行く。そして爰に夏が来て、本牧は避暑地といふ事になるのだ。その頃にはもう海岸に近い家は、泳がふといふ野心家にみんな占領されて了ふ。海岸には葦簀張りの海水浴場が出来て、大勢の人間が磁石による鉄粉のように、此処へ吸ひ寄せられて来る。それも七、八の雨月と九月の中旬迄だ。暴風雨でもあらうものなら、一溜りもなく人出が減る。彼是れしてゐるうちには日が詰つて、蟬の鳴声も薄らぐ。そして蟋蟀が根繼石の下で途切れ〳〵に鳴き出して、障子を締切る頃には、「天淺」の親爺も夜は褞袍を着るようになる。青葉もいつか色が剝げて行つて、氷屋も外面の障子を立て、舊との駄菓子屋に改る。そこへ村の衆が宵の口から集まつて、今年は海水浴で何人死んだとか、去年の首縊りの話だのに花が咲く。そこで本牧にも秋が来るのだ。唯此土地の月と星の美しさが又格別な事は多くの人が気附かない」(小野鉄楼『本牧』大十二・十)

◉**海水浴でにぎわう**——横浜での海水浴場は、北方地区(第七章)でも述べたが、明治二十五年(一八九二)本牧の佐藤五郎吉と増五

海は招く横浜・本牧へ(戦前)——横浜市電気局のポスター

本牧海岸の臨海学校（戦前）――寿小学校の児童たち〈南雲正子氏提供〉

郎の二人が、県の許可を得て、山下（現、新山下一丁目あたり）に海水浴場を設けたもので、（『横浜市史稿・風俗編』）当時はほとんど外国人の専用であったが、その山下が埋立てられ、さらに、大正十三年市電が問門まで延長されてくると、この本牧の海岸が海水浴としてにぎわいを増したものであった。

「私なんぞもう三つのときには、四、五人の仲間と泳いでいましたね。ところによっては、潮の流れがひどいんです。生れながらの海の子も、何度か死にそうになったこともありますが、海は私どものすべてですな」（本牧地区有志座談会）

「私ども、明治生れの人間は若い頃海水浴なんぞはしませんでしたよ。第一、海水浴なんてシャレタことは、よその人たちが持ち込んだんです。まあ海水浴は大正生れ（の者）が初めての体験者になると思いますよ」（本牧南部地区座談会）

という地元の人々にとっても、本牧の海は今までのように漁業の場としてだけでなく、自らも海水浴をたのしむ所になっていった。そして、海水浴客をあてにしての地元の人々の経営の飲食店やほかの店もふえていった。客も外国人から市民へと、次第に変ってゆくのであった。

●被災――しかし、外に向って開き発展していったこの地区にも震災が襲った。だが焼失が少なくてすんだのは幸であった。

この地区の震災すこし前は戸数約八三〇。人口四、〇〇〇人で、上台の大部分と台の北は平地で市街地であった。市街地に商

店がならんでいたが、その他は農家、勤め人の家で、なかには邸宅がまじっていた。瓦斯局の本牧出張所ぐらいがめぼしい建物であった。震災の建物被害は平地で八パーセント、丘地では四パーセントが倒壊したにとどまった。しかしここでは丘のがけくずれ一二カ所が発生した。なかでも台山のがけくずれでは高さ四間（七・二メートル）、長さ五〇間（九〇・九メートル）、はば四間のものもあり、台で高さ五間（九メートル）のがけくずれのために東本願寺出張所がつぶれ、二人が生き埋めとなった。

「震災の時、農家で潰れた家というのはほとんどありませんでした。みな山際に建っていましたから。地盤がよかったんでしょうね。ただし瓦屋根の家はみな潰れてしまいましたよ。大震災の時に戒厳令がしかれました。子ども心にもすごいものだなあと思いましたね」（本牧南部地区座談会）

火が千代崎町から千代崎川をこえて延焼、他の二方面からも延焼してきたが、土地の有志により川の水によって防火、一三〇戸を焼いたのに留まった。

一方、本牧町の箕輪下・天徳寺・宮原・十二天・原は市街地で、電車道ぞいに商店があってにぎわいを見せ、箕輪や天徳寺は住宅地で、丘地はおおむね畑地であった。海に面した十二天などには、別荘、料理店があり、三之谷にも別荘が見られた。この方面は約一、二〇〇戸であった。

こうした地域も震災によって、全壊・半壊七〇パーセントに及んだ。箕輪下で約五〇戸、原、宮原では三二一戸、箕輪では一二戸が焼失した、このとき天徳寺・本牧神社・吾妻神社にもそれぞれがけくずれほかの被害をうけた。

さらに牛込、八王子下、三之谷方面は約一、三〇〇戸であったが、主に市街地は牛込・八王子下・下里・矢・真福寺などであったが、ここも七、八〇パーセントが倒壊した。牛込の多聞院、千歳寺、和田の本牧基督教会堂、間門の東福院も建物に被害をうけた。ただし、三渓園は無事であった。矢では三五戸、池田で一一戸がそれぞれ焼失した。二之谷には遊楽園という行楽施設が建設され、鉄製の飛行塔も新設され、九月中旬にオープンの予定であったが、これも倒れてしまった。ある外国人住宅は十丈（三〇メートル）の高さの丘の上から転落した。

◉金子林蔵奮闘――この地区での犠牲者は約一八〇人になったが、その多くは、関内や関外に出かけたり働きに行っていた者であった。

この災害に際して地元有志や青年会は、延焼防止あるいは人命救助に奮闘したが、そのうちの一人、台山の退役水兵金子林蔵は上台に火災がおこると、身を挺して出動、黒煙のなかから六人を救助、他町へも出動して、四人を瀕死のなかから救った。さらに彼は、本牧、根岸方面が罹災後、混乱していたので、これを鎮めようと、単身小港からボートをあやつり、暗い夜の海を二時間あまり漕ぎ、沖合を警戒していた軽巡洋艦「五十鈴」にたどりつき、

警備を懇請、自ら五十鈴の水兵二個小隊の水先案内をつとめ、十一時には水兵が上陸、ラッパを吹いて町を行進した。「このとき私どもはうれしかったですね、なにしろ地震がまた来やしないかって、不安な時ですから、随分と気強かったものです」と今に地元の人はいう。

地元の人々が平静をとりもどしたこの地域の丘陵地に、九月中旬までに避難した人は一日七千人に達した。避難者はこもや木片で仮小屋をたて、畑の野菜で飢えをしのいだ。丘の墓地の卒塔婆は小屋の材料としてすべて利用された。地元で広い建物には、罹災者が泊り、大鳥小学校や私立貿易中学校では、それぞれ百人が収容された。

大鳥の牧畜業後藤某は、乳牛一八頭分の牛乳を避難者に配給、上台の米商池田某は、蔵にあった一五〇俵の米すべてを避難者に提供して、配給の来るまで飢えをしのがせるなど、本牧地区では避難の人々を救済したのであった。(『横浜市震災誌』)

第二節◉近代への脱皮

(1) 発展へ

◉市場の復旧――本牧地区での被害で、公共的建物の目ぼしいものは、上台市場、本郷町のガス溜などであったが、これらはいづれも倒壊した。上台市場は、大正七年(一九一八)八月、全国あちこちに起きた米騒動の応急対策として市内十カ所の「白米廉売所」をもうけたことにはじまっている。「精良にして廉価なる物資を供給し、市民生活の安定、福祉の増進を図るため」(『横浜市社会事業概要』大十四・五)に、木造平家建一二九坪(四二五・七平方メートル)が誕生した。

この地区にとっては、これは代表的な施設であったが、震災では建物が倒壊しただけで、焼失をまぬかれたことは幸いであった。早速上台は罹災者の避難所として使用された。しかし大震災後の物資は極端に不足し、人心はたいへん動揺していたので、市は応急救護に全力をあげた。九月十一日、白米一升を三十銭で、巡回販売を行ったところ、たちまち売り尽すといったように、さし迫った状況であったので、市は公設市場を急いで開設することとした。上台・青木の両市場を復旧、とりあえずバラックや天幕で市内十三カ所に市場を建てて、九月二十一日からは米・塩・野菜・味噌・醤油・梅干などを販売した。そののち市は市場を増設して、大正十三年(一九二四)五月には、全市二六市場となった。(区内では福富、日ノ出、翁、山下、鉄砲場(大和町)の五市場が増加した)

市場の開設は、震災後の食糧の供給、物価の上昇をおさえるのに大きな効果をあげたが、上台市場も同じであった。そしてここは市場の老舗として、その後も町の人々の生活の上に大いに役立

ってゆくことになる。

本牧地区の震災復旧にあたっては、道路が大幅に広げられた。大江橋から関内を通り麦田、上野町などを経て、本牧町原に達する街路番号四の街路計画線（幅二二～二五メートル）が国によって施工された。これによって現在のような幹線道路ができ上った。

◉授産施設――一方、震災によって職を失った人々のために、一定の技術を習わせて、再就職を容易にするため、小港には小湊職業補導所が設けられ、十三年四月十七日、事業が開始された。

さらに九月二日には箕輪下四五九番に本牧町婦人授産所がもうけられた。震災後の授産施設は十月一日には山下町二七に印刷場、昭和四年（一九二九）六月十一日には、桜木町に中央授産所などが設置されたが、この本牧地区は、この種の公的施設建設の先がけとなった。

そして本牧地区は、根岸の地区と同じように罹災者の受け入れ地として、住宅もふえて、ようやく電気鉄道沿いの土地には市街化の傾向が見られていった。

◉本牧中学――大正十二年（一九二三）三月、私立本牧中学が箕輪下（現、本牧二丁目四〇三から四七二あたりまで）に創設された。

この学校は、ガス谷戸入口、現在の本郷町三丁目七七番地に私立皇道中学として、大正八年、明治大学の山内照代によって創立され、のち貿易商業学校を併設して、簿記や珠算が教授されていた。この学校の第一回生は次のように語っている。

「たしか大正十年頃だと思いますが、県へ文部省認可をもらうように懇請にゆきました。私は当時の級長で、副級長とほかに三人の生徒だけで行きました。文部省の認可を受けて正式な学校にしてくれるようお願いに行ったのです。その時、県視学の及川規という先生が種々尽力してくださって、のちに及川先生は校長となりますが……昭和元年父兄が資金を出し合って創立されました。

学校は昔からスポーツが盛んでした。前身の皇道中学校時代もヒマがあると野球ばっかしでした。プロ野球の苅田久徳、鈴木茂などがこの学校の出身です。柔道では、生徒で七段という猛者も

接収中の本牧小学校

大鳥小学校（改築前）

本牧婦人授産所跡（現、本牧青少年図書館）

間門小学校

区)、大岡(現、南区)方面の枝物や和風草花の切り花、富岡(現、金沢区)方面の大規模な温室栽培によるカーネーションの切り花などにたいして、この地域では「鉢物」が盛んに作られたことに特徴がある。だが、太平洋戦争によって西洋草花栽培は、地場産業として定着するまでには至らなかった。いま本牧には、かつての花卉栽培の痕跡はほとんどない。

この地域の栽培が盛んだったということは、本牧周辺の気候が栽培にむいたこと、次に山手の外国人住宅地、あるいは関内、元町などでの需要が多く、この需要に対して地の利を得ていたことと、培養土に恵まれていたことの三点があげられる。

培養土は、近くの本牧海岸での、海苔養殖に使う海苔ひびを作るときに取った木の葉を集め、腐葉土として、これに荒木田を混ぜ合わせたもので、草花栽培には有効な土だった。

栽培業者は、昭和初期では一五戸で、大鳥谷戸に四、三之谷に三、本牧元町　二、箕輪　一、簑沢　二、西之谷　二、競馬場際一、であった。そしてそれらは二〇坪から五〇坪のフレームや温室を持ち、一戸平均の露地栽培は四〜五百坪の作付けで、専業経営だった。なかでも施設の規模が大きかったのは、通称ジャーメン、藤沢浅次郎が経営した藤沢花園であった。そこでは昭和初期、オランダつつじ(アザレア)を主として栽培した。栽培面積は約八〇〇坪で、うち温室は数棟で約一〇〇坪程を持ち、さらにフレームに似たトンネル型の霜除けの設備を持っていた。この花園は、が最大という規模だけでなく、本牧周辺における西洋草花栽培の先駆けだった。圃場は本牧町二丁目四二三番地から四二五番地にかけてにあり、のちに同町二丁目四〇五、薬師堂(現、本牧二丁目南部町内会館と併設)前の土地を追加して圃場を拡張したこともあった。

だが、このジャーメンは、オランダつつじの市場人気が落ちたことにより、他の農場よりも早く、昭和十年頃、本牧の地から戸塚区の鍛冶ヶ谷方面へと移転していった。

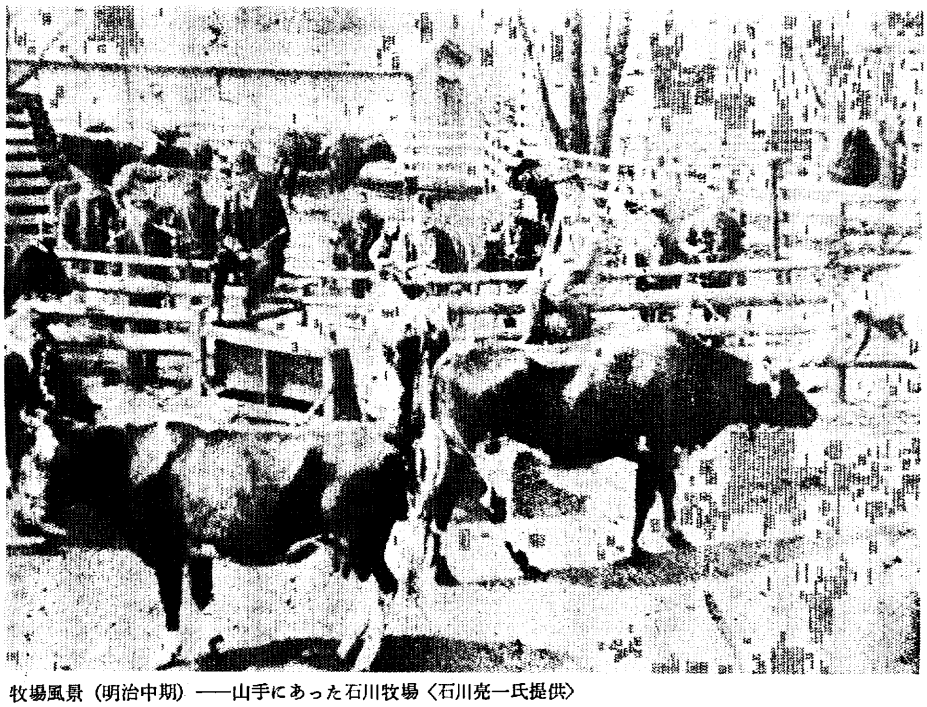
その他この地にあった農園の終末が訪れるのは、今次戦争によるもので、昭和十八年(一九四三)頃から急速に凋落(ちょうらく)し、戦災と米軍接収によって、西洋草花栽培は、完全にその姿を消すこととなった。

◉牧場――一方、この本牧地区や根岸地区では、牧畜が丘を利用して行われ、いわば地場産業的なものであった。

その頃のようすを地元の老人は次のように述べている。

「牧場がたくさんあり、乳牛ばかりを飼っていました。谷戸の奥には必ずといってよいほど牧場があったもので、大正初期ごろには、大倉牧場、渡辺牧場、川口牧場などがありました。この牧場があったことによる農家の利点としては、草を刈って牧場に売ったことと、農家の人が牛糞をもらって肥料にしたことなどです。肥料として牛糞は最高のものでしたものね。

牧場はよその土地の人がやっていましたが、本牧だけでも六、



牧場風景（明治中期）――山手にあった石川牧場〈石川亮一氏提供〉

七カ所ありました――」（本牧南部地区座談会）

「渡辺牧場は大鳥小学校の上の方の山にありました。大沢谷戸の奥には大沢牧場がありました。斉藤牧場が善行寺の奥、杉村牧場が立野の山にありましたね……。

国大付属（横浜国立大学付属小学校）へ行く途中のある牧場は、根岸線の山手駅用地の買収問題でこじれ、最後まで残りました。結局は廃業したんですが……。

どこの牧場も肉牛はなく、乳牛でしたが、これは山手に外人が多く住んでいて、ミルクを朝必らず飲んだせいです。外人だけでなく、近所の住民もみな買いに行きました。最近まで牧場がありましたよ。昔は餌を千代崎町のところから旧道を通って上台へ大八車で運んだようです……」（同座談会）

しかし、このような牧畜も、太平洋戦争によって廃業を強いられたあと、丘地の住宅化が進行し戦後はつづかず、本牧や根岸の牧畜業は現在二、三を残すのみとなる。

(2) 開発の中途

◉市街地化――こうした農業と牧畜、静かな丘地のこの地区は、まだなんの変哲もないまま、いわゆる戦前を経過する。

昭和十年前後の各地の状況については、本牧町、本郷町の平地部が、すっかり市街地となって、ガス谷戸や大鳥谷戸にも住宅がかなり建て込んでいた。

この頃の本牧町には、二〇ほどの店舗が見られるが、前にふれた明治期の店を加えた震災前の店舗数は七、震災後から大正十五年までは七、そして昭和十四年まで六店というように早くも増加している。しかもこのうち製造販売九、小売三、その他となっていて、すでに戦前の町並みはここに完成していた。

一方、丘陵地の方面は、昭和十年（一九三五）五月頃調査の地図によれば、これらの町には、平坦部が一部あるほかほとんどが台地で、本牧満坂の場合には、本牧二丁目に隣接して道なりに二〇戸ほどの住宅、ほかに渡辺牧場や川口牧場があった。

本牧荒井は本牧和田、間門町二丁目に接する平地の道なりに、家が並んでいたのにすぎなかった。その数はおよそ二五戸であった。

緑ヶ丘はおよそ五三戸の住宅、荒井の境に、ＹＣＡＣのテニスコート、その北側には豚舎四棟が見られる程度であった。

ここに大正十三年（一九二四）創立された県立横浜第三中学校が、畑地の丘に、そそり立っていた。

この地は震災後罹災者の受け入れ地になったとはいえ、依然として田園地帯であった。

◉緑ヶ丘の自然池――本牧緑ヶ丘の場合、地元の人は次のようにいう。

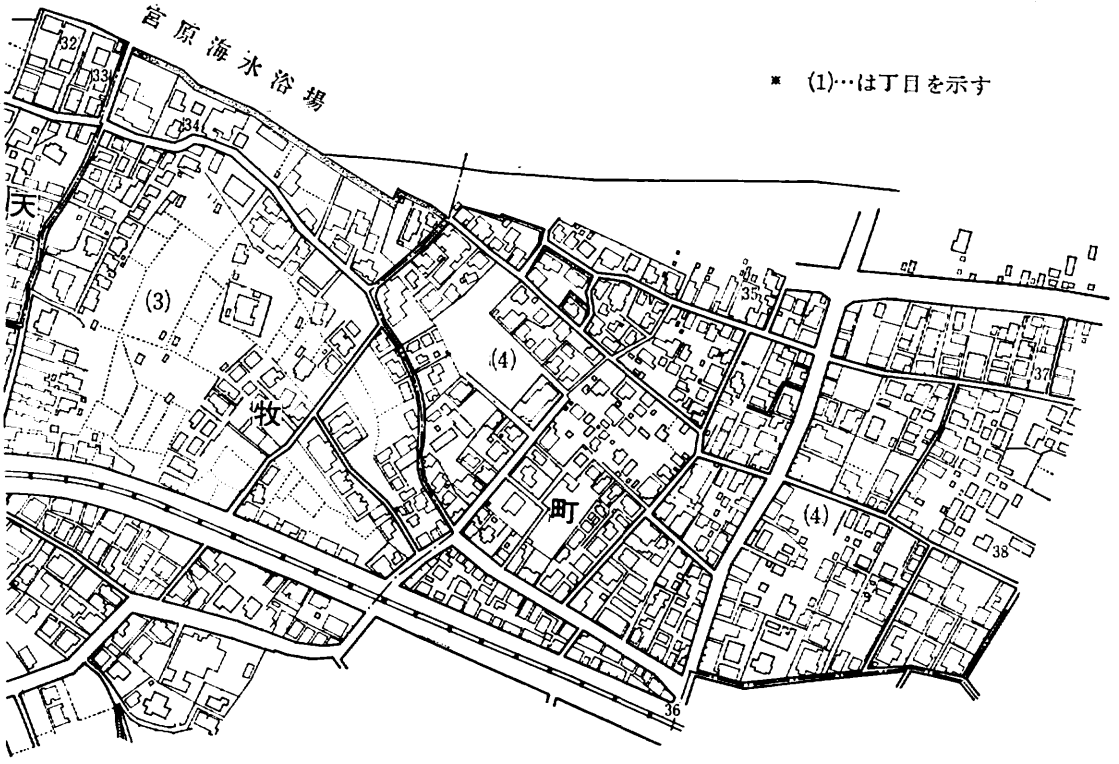
「関東大震災の頃、緑ヶ丘には一戸の家もありませんでした。ただ三中（現緑ヶ丘高校）がちょうど建設中で、これからぽつぽつ家ができるだろうという時に地震ですから、開発されたということはなかったのです。西之谷からいまの高校への道路は細い農道で、舗装なんぞはされておりませんでした。道路両側には池がありまして、食用蛙がゴオゴオと鳴いていましたっけ……。

震災後の大正十五年、一、二戸の人がここに来られて、それからぽつぽつと開けてきました。戦前の十五、六年頃、この土地はほんとうに自然に恵まれていまして、まさに『緑ヶ丘』というにふさわしい土地でした。さっき申しあげた池のほかに、もう一つ池がありましてね。今の四二番地のマンションのところあたりは自然池で、カエル、ヤゴ、ホタルやイモリがいましてね。それにまわりがうっそうとした森だったもんですから、フクロウの啼くのが聞かれましてね。それは淋しいところでしたね」（本牧地区有志座談会）

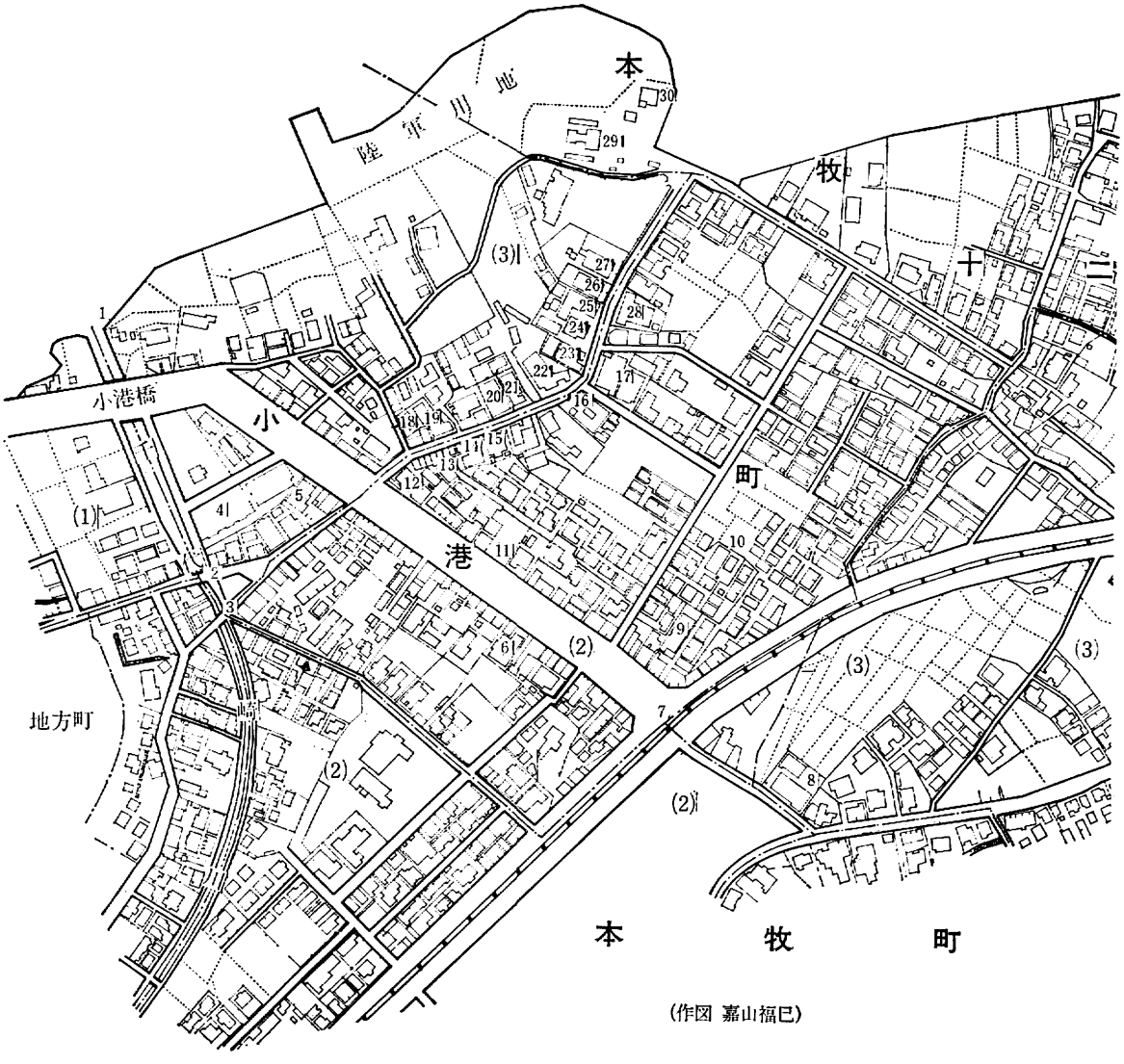
この辺にいま、自然池としてしのべるものはない。

しかし、本牧の地区のなかでも、字箕輪や元町一帯では、既成の住商混在地域がいっそう市街化のようすを示しはじめていた。昭和十年頃、地区内には授産所、北方消防署、本牧中学、天徳寺、金比羅神社があったが、消防署のあたりには、まだ住宅のない部分も目立っていた。

◉町の新設――町は第一章で述べたように、昭和三年（一九二八）九月一日、町名町界整理によって本牧町から分れて本郷町一・二丁目が旧字上台の区域によって新設された。



1	神社	8	北方消防署	15	ホームホテル	22	第二キヨホテル	29	本牧神社	36	本牧停留所
2	東泉橋	9	文ノ家ホテル	16	キングホテル	23	大和ホテル	30	同社務所	37	東湯
3	西泉橋	10	山手旅館	17	スターホテル	24	スターホテル	31	十二天下停留所	38	吾妻神社
4	横浜セルプ(資)	11	バイオレットホテル	18	ダイヤホテル	25	十二天ホテル	32	カノホテル		
5	フジヤホテル	12	小港湯	19	梅ノ家ホテル	26	サノホテル	33	キヨホテル		
6	モリヤホテル	13	大黒ホテル	20	甲子ホテル	27	マツホテル	34	塩風呂宮原館		
7	小湊停留所	14	アサヒホテル	21	横浜ホテル	28	トクホテル	35	浜の湯		



(作図 嘉山福巳)

本牧・小港方面街並図(部分)昭和8年頃

さらに昭和八年四月一日、本牧町を廃町にして、次のような各町が新設された。（かっこ内は旧字）

本牧町一丁目から四丁目（台・箕輪下・天徳寺・原・宮原の一部）

小港町（小湊・箕輪下の一部）本牧十二天（十二天・宮原の一部）本牧元町（牛込・八王子・八王子奥の一部）本牧大里町（下里・大谷戸）本牧和田（和田・池田）本牧満坂（満坂・大久保）本牧荒井（荒井・間門の一部）本牧荒井（荒井・間門の一部）本牧緑ヶ丘（長久保・間門の一部・荒井の一部）間門町（向・一之谷、二之谷・配郷・池田の一部）本牧三之谷（三之谷・真福寺・矢）そして本郷町には三丁目が旧字の上台・台の一部をもって新設された。

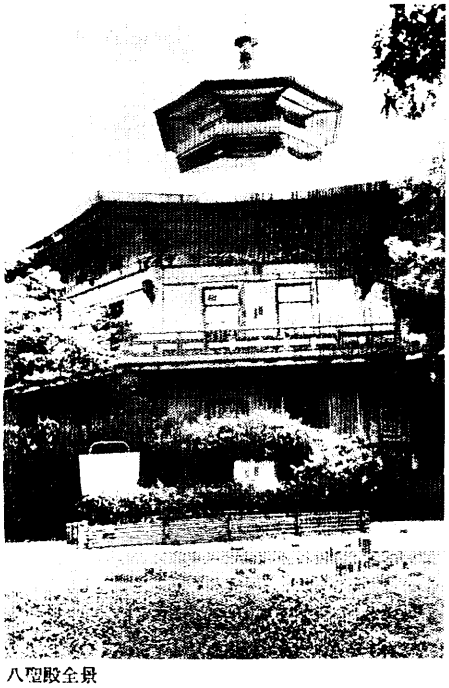
◉八聖殿――昭和八年（一九三三）十一月、八王子鼻のがけ地に、八聖殿が建立された。もと逓信、内務大臣を歴任、国民総同盟総裁の安達謙蔵は某日、本牧に海釣りにきて、沖合から見えるみどりにつつまれたこの地に、青年たちの精神修養の殿堂を建立することを決意したという。（地元老人談）

安達は私財を投じて、奈良法隆寺の夢殿を写した、コンクリート造、八角三層（二階建）の建物にキリスト、ソクラテス、孔子、釈迦牟尼、聖徳太子、空海、親鸞、日蓮の八聖人の等身大像を安置した。

「八聖殿開殿当日は、時の斉藤実首相が臨席され、大臣級の人も十二、三人やって来ました。

地元の若い者に開殿式を手伝ってもらいたい、という安達先生からの電話もあって、わざわざ生れてはじめてのモーニングを新調して手伝いました」（石川町　高橋幸作氏談）と語っている。

八聖殿の創建は、地元の人たちの総意といったものではなく、直接的な地元への影響はみられなかった。しかし前述のように本牧三之谷が繁盛するなかにあって、ともすれば、開発が遅れがちな本牧大里町あたりの開発に、大きな刺激となったようであった。震災時は、小野光景邸のほか、わずか数戸の住宅があったにすぎない大里町も、町域の中央部は沼地で、昭和八年十一月には、大里町整理組合（組合長佐藤幹治）によって、この沼地を埋


八聖殿全景

大里町耕地整理記念碑

八聖殿の内部

立てて、整地がされた。いま本牧大里町三六番地先にはその整地記念碑がある。

埋立が終わっても、しばらくは空地で、本牧の海苔干し場や子どもたちの野球大会に使われていたという。十年代には大里町をふくむ一帯は、高級住宅地として開発されていった。

◉要塞地帯――昭和十年代、この地区も、戦時下の地区となっていった。本牧海岸一帯は要塞地帯として撮影は禁止、海を見下ろす丘はあちこちで立入禁止になった。丘や森林の自然が、防空のために大いに利用された。対航空機用の高射砲陣地が和田山や緑ヶ丘、本牧大里町の小野邸の台地などに設置されたほか、和田山には防空監視壕が設けられた。

円型の監視壕は直径五メートル、深さ四・五メートルであったという。

風光の美しいこの地区はまた、十六年（一九四一）三月二十二日、市内一〇カ所の都市計画公園の一つとして、本牧町の一部が本牧公園（一・六五ヘクタール）として、次いで十八年一月二十八日には、八聖殿のまわりが八聖殿公園（一・三四ヘクタール）として、それぞれ設置決定された。これらは内務省の告示によったが、公園設置の理由は「防空防護ノ完璧ヲ期スルト共ニ平時ニ於ケル一般市民ノ保健・衛生ニ資セムトスルモノナリ」ということであり、公園は、防空防護の一端を受け持つ施設として、計画された。

◉食糧確保――しかし、全体的にまだこの地区は、戦時色への大きな変化はなく、美しい海の風景があった。漁業は盛んで、人々は相変らずの潮干狩を楽しんだ。だがこれは、戦時下の食生活の不足にたいする食糧確保のためでもあった。潮干狩は本牧から根岸、磯子にかけての海岸一帯に漁業組合が養殖して育てたアサリ、ハマグリなど貝類が多く、シーズンともなると多くの人々がやってきて賑わった。海が埋立てでなくなるまで、横浜周辺の人たちにとっての手ごろの潮干狩の場であった。昭和十五年の新聞には、次のように書かれた。

「潮干狩に賑はふハマの磯辺に非常時の波高し……今を盛りの本牧、間門、磯子方面海岸の潮干狩は例年の賑やかさ以上の賑やかさ、日曜・祭日ならずとも物凄い人出で、『もう浅蜊も蛤もありませんよ』と土地ッ子が嘆く。鮮魚類の値上りでお台所異変を来した家庭の主婦連が、〝栄養資源〟の開発に目醒めた結果なんである。

主人を送り出した夕方までの時間を浜辺の風に吹かれ、オゾンを胸一パイに吸い込んで先づ健康の実をあげると同時に、帰りがけには晩餐の材料をしこたま持帰れるといった寸法、市電の往復十四銭で効果は正に百パーセント。こんな訳で、浜辺は連日主婦連の氾濫、渚で春眠を楽しんだ浅蜊も『今年ばかりは流石に非常時だわい』と近付いた二十八、二十九両日の休日続きを前に震え上ってゐるだろう」（『朝日新聞』昭十五・四・二十八）

しかしまだ、のどかさが残るこの地区も、かつて黒船の警備地点となったと同じように、いよいよ防空監視の重要地点となってゆくのであった。奇しくもアメリカが同じ相手であった。

(3) 学校も災難

◉小学校も軍需工場に——この地区の美しくのどかな田園風景は年とともに消えていった。その前兆は、間門小学校校庭で、海を見渡していた東郷元帥の銅像が金属回収で撤去されたことであった。さらに十九年八月には、ここの児童も足柄下郡温泉村へ学童疎開となった。児童のいなくなった教室は二十年三月第二海軍技術廠に収用され、併設されていた臨海学級が廃止された。学校の前の丘（現、立野高等学校位置）はくりぬかれ、地下の軍需工場となった。学校と丘の間の住宅は、ベルト状に建物の強制疎開をさせられた。空地となったその跡地は、道路や資材の置場となった。このことについて「昭和十九年十二月五日、大東亜戦争のため軍の指令により校舎の一部が東京芝浦会社及海軍技術廠として転用される」（『間門小学校沿革の大要』）とあるが、当時の工場長は、次のようにいう。

「この工場は陸海軍のレーダー極小送信管を造っていた軍需工場でした。昭和十九年から丘の下を掘りぬいて地下工場を造り、二十年一月から終戦の月まで操業していました。

はじめは間門国民学校の校舎の一、二階を使って、真空管の一部の組立てを行い、その半製品を川崎の工場へ送っていました。

地下工場が出来上ると、そこに入って、いよいよ真空管を作りました。高木高女や一中の生徒の学徒動員、新潟県の女子挺身隊で、初めは七、八〇人が働きました。やがて学生も一〇〇人となりました。

地下工場は長さにして延べ二キロメートル、広さは約一、〇〇〇平方メートルありました。間門国民学校の側には出入口としてトラックが通れる約二間（三・六メートル）と一間程（一・八メートル）の幅の道を掘りました。そして、海岸寄り（現、産業道路側）と裏側には二本の道を掘りました。ちょうど井桁のような恰好の細長い地下道で作業をしたものです。それに空気孔ともいうべき口を東側に開けました。工場内にはシーレックマシン、グリットマシン（自動封じ機）、ほかの工作機械を入れておりました。

六月十日の爆撃で、本牧三渓園等に被害はありましたが、分工場では直ちに従業員を地下工場に避難せしめ、施設その他にも何ら被害はなく、翌日から作業を開始しました」（千代崎町　鵜飼新一氏談）

また、当時の間門国民学校教師はいう。

「学校の二、三階の二つの教室が東芝の軍需工場に転用されました。なにしろ子どもたちのほとんどは箱根へ疎開していましたので、学校はがらんどうで、空き教室ばかりでした。それでも学校には、疎開できない何人かの子どもが居りましたし、役所と疎開

地下軍需工場の位置——この丘に横穴を掘って作られた、丘の上は県立立野高等学校，右は間門小学校（改築前）〈渋谷将氏提供〉

先の連絡などがあって、私と女の先生数人が残りました。

東芝は真空管を作っていました。

西側の丘にトンネルを掘っていました。丘の付近の数戸が疎開になっていて、その空地から掘り始めたのですが、なんでも延長二キロもあったということです。掘り出した土は相当なものでした。そうですね、学校の体育館の先が海でしたので、そこへ土を捨ててすっかり埋立てができた程です。当時は学校の前、こちら側は風呂屋の辺まで蒲が生えていた湿地でしたが、そこへ土を運んで埋立てていました。

学校の中ですが、東側の校舎の一階から三階までを海軍の技術士官が使っていました。これは八聖殿のところに電探の部隊が居て、そこの支隊かなんかかと思います」(間門町　渋谷将氏談)

こうしたことは、もとより、間門国民学校に限ったことではなかった。大鳥国民学校の場合は、箱根小湧谷の三河屋旅館へ昭和十九年(一九四四)から疎開が始められ、計三七二人が疎開した。からになったここの校舎も海軍に収用された。当時の学校長はこのありさまを次のように語っている。

「戦闘が激烈となった昭和二十年一月、海軍から校舎の一部借用の要請があった。それは教室と附属建物、備品で、求められるままに貸与した。しかるに、少壮の士官らは勝手に他室へ出入りしたり、何んの断りもなく備品を使用したりしたので、その都度その非を責めたものだった。やがて、次第に軍の要員も多くなり、

間門風景(昭和30年頃)——電車通りにそって森，左手の方の木かげには地下軍需工場の入口があった〈今村幾太氏提供〉

三室だったものが五室となり、ついに全教室が転用されるまでになってしまった。兵隊たちは校庭で竹槍の訓練をし、付近で防空壕掘りの毎日であった。

そのうちに、日本軍は敗けているようだという声が、だれいうともなく出て来た。飛行機はもとより鉄砲の弾すらないという。これは大変だと私はいままでの管理の方針を変えた。どんな犠牲を払っても勝って欲しかった。というのが本音だった。そこで、全校の施設を自由に使ってよいし、備品も最大限に使用して差しつかえないと便宜を計った。喜んだのは指揮官ばかりでなく、兵員全員であつた。ミシンも貸す、オルガンも貸す、何んでも要求に応じた」(本牧満坂　杉崎精治氏手記)

兵隊たちは学校周辺の農家にも分宿した。金子豊吉氏宅などは、畳を上げ床板をとりはずし、土間にはカマドを作って烹炊場(調理場)とした。家族は奥の部屋、納屋は兵隊たちの宿舎となった。

◉焼夷弾の雨——三之谷の戦災前の繁栄のしるしであった本牧二業組合も、昭和十九年決戦至上措置の条例によって廃止された。

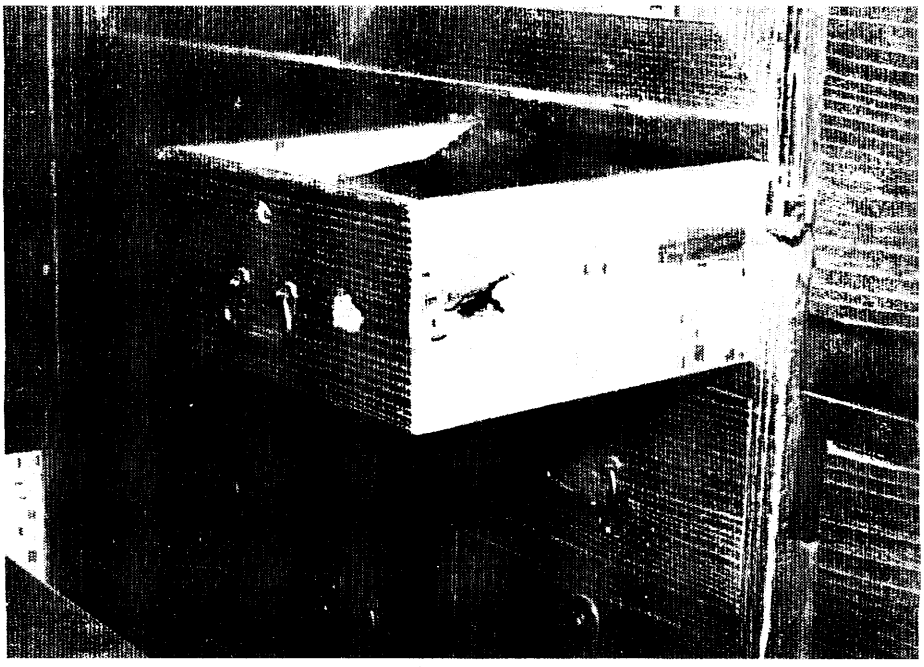
「とにかく横浜中のみんなが廃業しました。覚悟はしてたが、いざ廃業して、さてあすからどう食べてゆくかとなると、まったくみじめな思いがしたもんでした」(本牧三之谷　日下部重蔵氏談)

昭和二十年五月二十九日、この地区の大部分が焼失した。本牧町、本郷町、本牧元町、間門町の大部分は焼失、その周辺も焼けた。

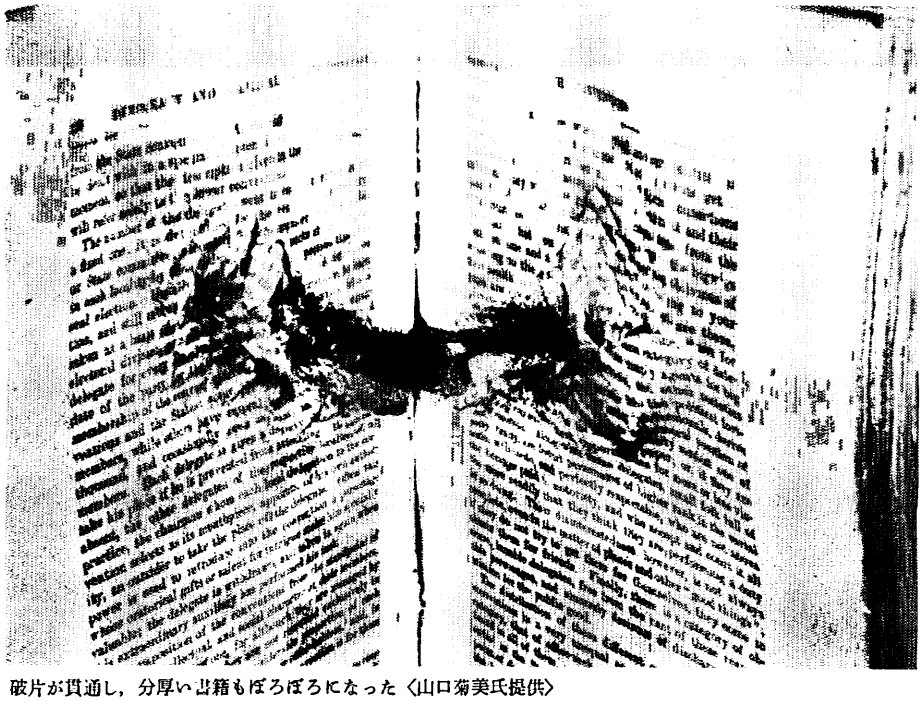
「焼夷弾がザアーザアーと音をたてながら雨のようにふってきて、それが途中で分散するんです。地面に突きささってメラメラとそこらじゅうに火を吹くんです。まんべんなく落したらしいですが、でも学校(大鳥国民学校)だけはよく残りました。学校の前へ出てみましたら、公設市場、上台のあたりがもう丸みえですもん。架線だけが垂れ下っているのがみえ、焼けたトタンばっかりで、とても恐しかったですね」「でも別にケガもしなくて本当に良かったです。主人もその日は、日本鋼管の上司の引越しがあるんで、鶴見の方へ行ってまして途中で空襲にあったそうです。夜暗くなってから帰って来たんですが、どこかでやられているんじゃないかと思って涙も出ませんでした。その位恐しくて……」と地元の人はいう。

焼夷弾攻撃をうけなかった地区は爆弾攻撃に見舞われた。二十年六月十日、八聖殿から三渓園、本牧大里町にかけての海沿い一

破片でえぐられた門柱——黒い部分がその痕，ただし最近では風化がすすんでいる〈山口菊美氏提供〉



爆弾の破片によってタンスに穴があいた〈山口菊美氏提供〉



破片が貫通し，分厚い書籍もぼろぼろになった〈山口菊美氏提供〉

帯に投下された爆弾は、この地区に炸烈、地表をくだいた。八聖殿は幸いにも被害はなかったが、三渓園には五〇発ほどの爆弾が落とされた。楠公社が焼失、臨春閣は大破してわずかに原形をとどめるのみ、天瑞院寿塔は大破、聴秋閣は中破、月華殿は小破、丘の上の三重宝塔は軽び、春草廬は、移築する予定で解体してあったため無きずであったという。(『月刊よこはま』昭和二十五・八)

本牧大里の場合、大型爆弾が、住宅地のなかのわずかな空地に投下された。市民の数人が瞬間に爆死、建物はこなごなになった。飛び散った破片は近くの石の門柱をえぐり、さらに家のなかに踊り込み、畳に家具に、鋭角的に喰い込んだ。惨状の証(あかし)はいまに残る。

さしも、みどりにつつまれた広い庭をもつ別荘も大きく屋根はさけ、庭の樹木がみな無くなってしまったという。

よくぞ生き延びたものよというのが、今に残るこの町の人たちの実感である。

◉**終戦**――八月十五日終戦――。

「終戦の日には大鳥国民学校に駐屯していた日本帝国海軍は、そそくさとここを撤収してしまった。日本人が知った敗戦の憂き目。兵は借り物を返却することもなく、小さなミシンの部品にいたるまで自分の荷物の中へ入れ、クモの子を散らすように立ち去った。今までの軍律もなにもあったものではなかった。そのあたりは何んといってよいか、ただただ呆然とするばかりであった」

(本牧満坂　杉崎精治氏手記)

これは一例にすぎないが、とにかくあわただしく、この地区も終戦をむかえたのであった。

第三節●最大な接収地区

(1) 苦難のエリア

◉**米軍接収**――戦後の本牧地区には、かつてない最大の苦難が始まっていた。米軍による土地の接収であった。昭和二十一年(一九四六)十月一日現在、横浜市は全国接収地の六二パーセントにあたる膨大な面積を接収されていた。そしてこの本牧は、そのうちでも最大の接収面積であった。しかもその期間は、実に三六年間におよび、延々と終戦処理の犠牲となるのであった。

接収されたこの地区の人々は、やり場のない憤慨を持ちつづけ、忘れ得ない追憶をもつ人がいまだに多い。

空襲で焼けてから、町の人々は、焼けあとに焼けトタンでバラックを建て、ずたずたに切れた水道管から洩れてくる水と、わずかな食料の配給で生きつづけてきた。

八月十五日の終戦からまもなく、進駐軍はどっと上陸した。厚木からの陸路と、横浜港のほかに本牧沖からも上陸用舟艇によって、完全武装の米兵が上陸。つづいて海岸に鉄板を敷き、その上にジープやトラックを陸揚げした。いまの大鳥中学校あたりの海

焼けトタンで作った小屋に住む（本牧元町）

岸には、露営のテントが張られた。こうした状況を町の人々は遠くから息をこらして見ていた。それはローソクの火を消した、バラックのすき間からであった。

接収はその後すぐ行われた。バラックの住人にたいして米軍から立ちのきが命ぜられた。

「アメリカ軍が来て、ここからここまでの地区を接収するから、一週間以内に立ちのけといってきました。その時、私は四丁目の町内会長をやっておったんで、八軍の本部へ行って、せめて一カ月の猶予をくれと、さんざん掛け合ったんですが、駄目でした。なにしろ相手は戦勝国ですからね。一週間内に立ちのいていないバラックがあれば、ブルドーザーで海に突き落すと言われましてねえ……それは高飛車な態度でしたよ」（本牧地区有志座談会）

あわてて逃げ出したあとのバラックを、米軍はブルドーザーでいとも簡単に潰して整地した。

本牧荒井でも同じであった。

「がけっぷちに戦災バラックがあって、立派に人が住んでいましたが、米軍のブルドーザーがやってきて、人が入っているまま崖から落としてしまった事件がありました。米軍は、立ちのきを命令したが、聞かなかったので落としたというんです」（間門町有志座談会）

幸いにも、ここに居た人には、怪我もなかったというが、目撃した人は、恐怖というよりも、ただ呆然と手をこまねいて見てい

ただけだったという。こうして整地された所は住宅が建てられることになるが、時期によっては

「終戦直後の昭和二十一年、米軍の進駐で、裏の崖がMPの射撃場にされました。ひと言の断りもなく作られ、ジープ何台かで米軍がやってきて、だいぶ撃っていました。撃ち込まれていたところの崖が今でも崩れて困っています。それに各家庭の庭の植木や苗類の珍しいものを黙って持って行かれました」（間門町古老座談会）といったこともあった。

●墓地すらも――いま町内の東福院のすぐ上山に墓地がある。その隣地は接収地二号地のはじで、米軍の施設であったが、墓地と、米軍施設との間は、ブロック塀で画然と区切られている。この墓地は東福院の阿弥陀堂と共に間門の平地にあったが、そこが接収地となったため、移転を余儀なくされ、現在の位置に移転させられ、ブロック塀が、その時米軍によって作られたという。

「あとのことになりますが、米軍駐留後、家族が同時に居住することになりますと、その子どもたちがかなりのいたずらをしたんで困りました。東福院の墓地に五、六人で入り込み、石塔に縄をゆわいつけて、引っ張ったとか……お石塔をかたはしから倒すんです。我々が厳重に抗議したところ、英文と日本文で、申し訳なかったという、詫び状を一さつ取ったこともあります。

ベトナム戦争がたけなわの頃、米軍では嘘かほんとか、いたずらっ子の父親はベトナムに転勤させられることになったそうです。ですから親の方で気を遣ってたといいますがね」（本牧地区有志座談会）

●立ちのき――米軍の強制接収によって行き先のない人たちがたくさんいた。

「行き先のない人がたくさんいましてね。市や私どもで随分と骨を折って、あちこちに土地を探しました。

浅間町に三五世帯、麦田の山の根のところに二五、六戸、それから三渓園の通り、今の本牧外科病院のあたりに中村さんの土地が空いていたので、そこにも頼んで一〇何世帯、岩崎さんが麦をつくっていた所を借りて八戸……という具合にね」（同座談会）

「接収された土地に住んでいた人たちがダァーとこちらに来ちゃったんです。元町や八王子というのは皆三百坪位の敷地があって、そこに住宅があってゆっくりとした所だったんだ。ところが、宮原から追い出されたから、みんなこっちへ入って来て、ウワッーと混んじゃったんだ」（同座談会）

「私は進駐軍が来た頃、漁業組合の役員をやっていたんですけど、一番困ったのは漁師が陸の方へ移転しちゃうんですよ。接収されて漁が出来ないからです。何とかしてこの土地の近くに住めるようにと考えて、疎開して空いている土地とか、原さんの土地とかに入ったんですけれど、どうしても入れない人たちは今の大鳥中学校の所に居てもらったことがあるんです。十戸ばかりね。

後で大鳥中学校を建てるんだから退いてくれって言うことにな

りましてね。また立のき問題で困ったんですけれど、やっと何とかなりましたけれど……」（本牧漁業協同組合有志座談会）

接収は建物にも及んだ。洋館には赤紙が張られ、学校のような大きな建物も入口にはベタベタとペンキで数字が書かれ、接収されていった。

「洋館には土足で入り込み、玄関に赤紙を貼って接収しました。日本家屋はそのままにして、洋館だけ接収していったんです。

私の家も外見が洋館だったので、接収の赤紙を貼られました。ところが米兵が土足のまま入って見たら、なかの方は日本の造作だったので接収されずにすみました。子供が肺炎で寝ていたのもよかったのかも知れません」（本牧地区有志座談会）と地元の人はその時のようすを語る。

◉**学校も接収**――市立大鳥国民学校は、二十年十月四日米軍野戦病院として接収され、翌年二月、病院が伊勢佐木町の松屋に移るまで本牧国民学校に仮住まいした。その本牧国民学校も、二十二年五月一日接収されて廃校、大鳥国民学校に統合された。かつての本牧国民学校は接収地の二号地区のなかにぽつんと残されて、アメリカン・ミドル・スクールとなった。

「もとの本牧小学校は焼けなかったんですよ。鉄筋の立派な建物でしてね。だから接収されたんですね。当時は随分役所に交渉したりして、何とかならないかと頑張ったんですが、駄目でしたねえ。……あの頃の役所は弱かったんですよ」（同座談会）

間門国民学校は米軍の結核療養所として接収されかかったが、接収を免れたのは幸いであった。米軍が接収の下見に来た時のようすを、当時の教師はいう。

「ある日、機銃をかまえた兵隊を連れた米軍の大佐など五、六人が学校に来ました。乱暴されると困りますので、女の先生を逃がして、私一人で応対することになりました。

接収されるなとピンときました。とっさに私は汚ない所ばかりを案内しました。倉庫とか、特に清掃も行きとどかない汚れた便所の周辺を見せたりしました。ところが大佐は平気で、そんなものはすぐ片付けさせると言ったように覚えています。

やがて白色のペンキで建物にマークしていきました。が、どうしたわけか、間門は接収されずに、近くの大鳥が野戦病院として接収されることになりました」（間門町　渋谷将氏談）

「二十年十月初め本牧にも米軍が上陸、四日に学校へ進駐と決まった。私は学校に預っていた戦死者の遺品や、本牧郵便局の重要書類など、五行李ほどを自宅に運び、戸棚に保管した。

大鳥国民学校は、海軍が駐屯していたので、米軍は占領が当然と心得ているかのように、進駐するとすぐに学校を接収し、病院に転用するという。接収の日、十余名の米兵は来ると真っ先に応接室へ入ってきて、まず御真影が狙われた。『奉安庫を開けろ』というのが最初の命令だった。もっとも、御真影はすでに港北区の谷本小に疎開奉安してあったので何ごともなかったが、何しろ

作法室の戸棚まで検査するほどだった。彼等は校旗、優勝旗数本、それに一六本の少年団旗などを持ち去ったにすぎなかった。しかし、私はまさにこれは掠奪だと思った。

校舎も運動場も備品もことごとく接収され、米軍の海軍病院として使う為の準備が始まった。その後、県から被害調査などもあって、いくぶんかの補償も考慮されたようだが、この精神的な屈辱は何んとも拭い去られなかった」（本牧満坂　杉崎精治氏手記）

また、学校のすぐ脇に住む町の人も、その時の状況を次のように見ている。

「何しろ早かったですよ。道路のはじなんかにある防空壕の土盛りなどを、ブルドーザーでワーッと平らにしましてね。発電機をすぐに置きまして、ドンドンドンドン発電しましたね。もう一日のうちにバアーと明るいテント村ですよ、校庭の中に。早い早い。ものすごい早さ。

兵隊の泊る所はテントの中、病人は校舎の中に全部収容していました。将校は校舎二階の廊下に寝ていました。人数？　さあ、何人だったか、とにかく大勢でしたね。ものすごい車の数でして、病人をどんどん運び込んで来ました。

調理場はやはりテントでした。大きなテントを持っていますからね。事務室はあたしら用がないからわかんなかったですが、おそらく職員室とか校長室とかを使ったと思うんですがね。そういう所へは、あたしらは入れない。番兵（ＭＰ）がついていてね」（本牧満坂　笹井牧三氏談）

●東条大将入院――この野戦病院に昭和二十年九月十一日、自殺未遂の東条英機大将（元首相）が収容された。この時のことを病院に雇われた人は、

「ええ、顔が見たいと思っても、腰にピストルをぶち込んだＭＰが部屋の前に二人いましてね。近づくこともできやしません。東条が入ったというのは、米兵から聞いてすぐにわかりました。来たのは昼間でしたね」（同氏談）

と、語っている。

東条大将の病室に充てられたのは、校舎三階の裁縫室（家庭科準備室）であった。

●接収地の影響――接収地の出現は、周辺の町の人々の生活に、いろいろな影響を与えた。

「私の家内がある日、魚の配給所へゆきました。配給所といっても風が吹けば飛ぶようなバラックでしたが、ちょうど配給のお金を勘定している所へ覆面をした兵士がジープでやって来て、マネー、マネーといいながら、そのお金を鷲掴みにしてひったくって逃げたことがあります。薄暗くなりかけた時刻でした。これなんか一つの例ですが、夕方明かりのついている家を外国兵が狙っていたので、大変恐しい毎晩でした。私の家は焼け野原に一軒のバラックなので、こわいのでローソクすらもつけないで頑張りました」（本牧地区有志座談会）

「接収後、クリスマスや祝祭日には、外人が外へたくさん遊びに出るので、日本人は早々と家にもどったものです。怖いですもん……。昭和二十年頃、道を歩いていた三人の進駐軍が突然やって来て、男の私の体を触って、マネー、マネーと言い、私がノー、ノー、ノーと言ったら、オーケーと言って、行ってしまいました。その時はほんとにゾオーとしました」（同座談会）

◉言い訳無用――さらに米軍進駐直後のこと。

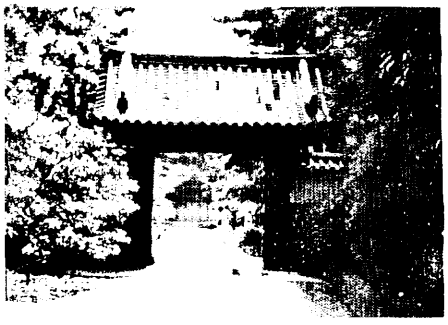
「何年のことだったか忘れましたが、本牧の接収地、そう、今の本牧町四丁目バス停あたりに、進駐軍の『命令所』というのができました。兵士が数人と通訳がいました。三〇坪ぐらいの建物でしたが、なんと、この建物の入口には、幅二メートル、たて一メートル位の板に『言い訳無用』とデカデカと漢字で書かれていました。

当時私は電気会社に勤めてはいましたが、電気屋が本職ではなくていわば手伝いといったものでしたが、どこをどう間違えたのか、兵舎の配電が悪い、すぐ直せ、と進駐軍に呼び出されました。誰かほかの人に頼んで下さいって、いくら言っても、すぐにジープに乗せられ、近くの兵舎につれてゆかれました。結局は直したんですが、恐しいやら、情けないやら、まったく言い訳無用の時代でした」（本牧町　石田兵一氏談）

三十年代の本牧地区は、町はそれなりに復旧、商店街も次第に大きくなっていったが、接収地の無期限使用協定によって絶望的

名園三渓園――大池と旧澄明寺三重塔〈柴原卓磨氏提供〉

月華殿


御門

天授院

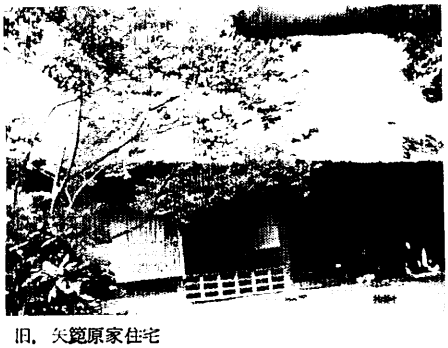
臨春閣，右手前橋の上は亭榭

旧東慶寺仏殿

聴秋閣

横笛庵

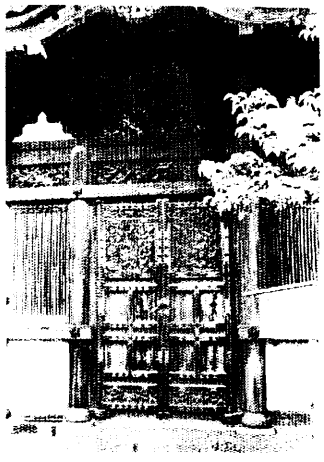
臨春閣第三屋

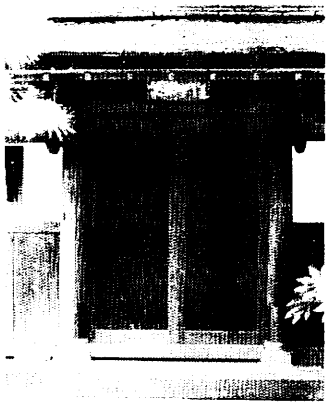

旧，矢鏡原家住宅

草春廬

であった。

旧間門天神


旧，天瑞寺寿塔覆堂

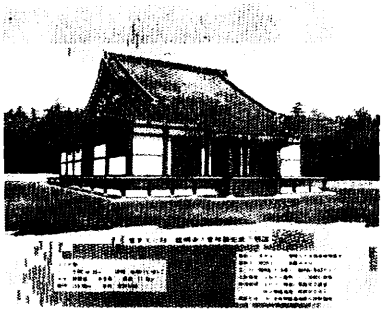

白雲邸門

◉三渓園復元――三渓園は、原家の努力によって戦中・戦後、園内の建造物は護られていた。しかし「現在のここの名園も市民の関心外にあり、訪客の数も戦前とは比較にならない程少ない。三渓園という名は単に横浜だけのものではなく、日本全国に知られていただけに、此の名園の復旧を望むに切なるものがある」（『月刊よこはま』昭二十五・八）というような声もあり、二十八年、原富太郎の嗣子、原良三郎によって、重要文化財建造物等の寄附採納願が市に出され、それを受けて、財団法人「三渓園保勝会」（理事長平沼亮三市長）が設立された。三渓園の内外苑三万一、七七六坪（一〇万五、〇一九・六八平方メートル）の土地が買収され、市による維持運営がなされるようになった。さらに、二十九年には国庫補助金を受けて建造物の復元工事が開始されることになった。

二十九年に開始された三渓園建造物の復旧工事は三十三年五月に完成した。旧東慶寺仏殿、旧燈明寺三重塔、横笛庵、月華殿、聴秋閣、臨春閣、天瑞寺寿塔覆堂、蓮華院、金毛窟などが復元された。三渓園は再び市民や多くの人たちのために公開され、小学生や中学生の遠足をはじめ四季折々に多くの人が観光バスなどを連ねてやってくるようになった。

三十五年には、天授院が国の重要文化財に指定された。そして、園内充実の目的のもとに、岐阜県白川郷（荘川村）の代表的合掌造りの民家、重要文化財の矢篦原（やのはら）家（江戸中期の建築）が移築され、一層充実されていった。

三渓園が復旧充実するなかで、その周辺の整備が市によって企画された。三十二年十二月には、本牧元町、本牧三之谷、本牧大里町の土地一九・七四ヘクタールをもって、横浜国際港都建設計画公園として本牧臨海公園が、他区の二つの公園とともに、決定


燈明寺本堂完成予定図

燈明寺本堂保存修理現場

された。三十四年、公園は造成され、三十六年（一九六一）には八聖殿の修復が終った。

◉**宅地開発**——観光地として、三之谷周辺はふたたびにぎわいと、うるおいを見せはじめ、折からの高度成長期にのって、分譲地ブームがおきた。本牧満坂を中心として本牧荒井をわずかにふくむ、起伏の多い約七万へクタールの整地が西武鉄道株式会社によって行われ、工事は昭和三十六年八月に完成した。

しかし、工事の追い込みの時期ともいえるその年の四月、整地に必要な土砂を八聖殿西側の丘から運搬するダンプカーが、一日約十五台ほど十数回も往復し、地元は驚いた。地元の西之谷、緑ケ丘、上野町一、二丁目の南部町内会、大鳥自治会は、道路は狭く、しかも簡易舗装のため、道路の振動、家屋のいたみ、さらに通行人の危険があると訴え、トラックの運転経路を米軍接収地内道路にう回するよう、市に対して陳情が行われた。市は五月に行政指導、施工者から米軍に申請、こうして米軍接収地内を通って工事が続行されるということもあった。

造成された土地は、順次分譲された。接収地に隣り合わせた土地としては、かつてない大規模な宅地造成であった。これにともなって、この区画のまわりにも住宅がたちはじめていった。いまその区画、二三二区画にはそれぞれに住宅が建ち、空地となっているのは六区画にすぎない。

◉**千代崎川**——丘の上に宅地開発が行われるとともに、根岸、北方とこの北部を通じて流れる千代崎川に、三十七年覆蓋（ふくがい）工事が一部竣工。地区にとって、川をふさぐことは大きな変りようの一つであった。

千代崎川の源は、根岸の丘陵とも山手の丘陵ともいわれている。この流域には古くから人が住み、生活への恵みを受けて来た。水田の用水ともなり、雨水の排水路の役をつとめた。川はこの地域の丘陵の北の裾を流れ、柏葉町ほか七カ町の境界ともなっていた。

この千代崎川は、大正十五年（一九二六）三月には、滝の川（神奈川区）とともに都市計画事業として改修されたこともあっ

千代崎川の覆蓋——街並に沿っている，子供の遊び場が見える（上野町２丁目）

まだ橋の形で残っている（上野町１丁目）

た。柏葉から小港海岸にいたる延長約二、四五四メートル、三ないし一四・六メートルの川幅をもつ河川であった。この川が都市計画事業の俎上にのったのは、川幅せまく、屈曲が多く、河底が浅くて氾濫することがあったからで、浚渫し護岸工事をして、災害を防ごうとするものであった。

◉川をふさぐ――しかし、いつもは、せせらぎを作り、小魚が湧き、夏にはトンボがとびかい、子どもたちの遊び場でもあったこの川は、良きにつけ悪しきにつけ、町の人々と直接に結びついていた川であった。戦後流域に家が密集しはじめ、商店が並んでゆくにつれて、この小川は汚濁した。そうしたなかに、昭和三十一年五月、戸塚ストアー周辺の延長五五メートル、幅五・二メートルの覆蓋が施行された。間もなくその上には、屋台や日用品市場の出店が出され、場所によっては自動車が駐車し、かえって交通妨害ともなってしまった。さらに三十七年には、下流にある中部下水処理場に流れ込む下水道幹線として、その一部に工事が行われて、翌年五月には川筋すべてに覆蓋がされた。

地元の第三地区連合町内会（下田重平会長）は、三十八年七月市に陳情し、ふたがけをした空地は駐車禁止とし、子どもの遊び場、歩道専用にすることを要求した。これにたいして市はその十二月暫定措置として、つぎのようにとりきめた。

柏葉橋――大和橋間　歩行者専用道路（幅四・七五メートル延長五〇・八メートル）

大和橋――立野橋間　占用許可済（幅五・二メートル延長五五メートル）

立野橋――五月橋間　駐車場（幅五・二メートル延長六三メートル、公安委員会管理）

五月橋――中野橋間　子供の遊び場（幅五・五メートル延長一七〇メートル）

中野橋――宮前橋間　駐車場（幅五・七メートル延長五・一二メートル、公安委員会管理）

子どもの遊び場としては、第三地区連合町内会が中心となって、四十一年、地元で五〇万円を負担、市からの助成金一〇〇万円をもって、ブランコ四コ、スベリ台二コ、組立式野外ステージ、砂場、国旗掲揚塔、水呑場を作った。

一部には昼間だけ自動車の駐車を認めたが、いつの間にか夜間駐車がなされ、それも台数がふえ、ついには個人の車庫のようになって来た。地元連合町内会では、夜間駐車の禁止を訴えて、しばしば新聞にも報道された。結局解決したのは昭和五十八年に入ってからであった。

◉「外国」――本牧の接収地は、こうしたなかでも依然として、星条旗はためく外国であった。この地区はひたすら解除を待つほかはなかった。

接収地周辺地域は二十年代からさまざまに変容を見せていった。しかし、接収は癌であり、本牧の発展を大きくはばんでいっ

た。接収地は山下本牧磯子線をはさんで一号地区と二号地区に分かれていた。一号地は普通エリア・ワン（Area One）と呼ばれ、本牧町三、四丁目、本牧十二天、小港町二、三丁目、そして錦町の一部の一帯であり、二号地エリア・ツウー（Area Two）は、本牧三之谷、本牧荒井、間門町一丁目・二丁目の一部、本牧緑ケ丘、本牧満坂、本牧和田、本牧町一、二、三、四丁目の各一部、池袋の各町にわたった。面積は、七万〇、七七六・八平方メートル、この地区の米軍の正式名称は「横浜海浜住宅地区（Yokohama Beach DH-Area）」で、米海軍横須賀基地横浜分遣隊の管理下にあって、横須賀や横浜市内の米軍施設に勤務する軍人・軍属とその家族の居住用にあてられた。一号地には四二七戸、二号地には四八三戸、合せて九一〇戸。広大な土地には木造二階建が点々として建てられ、敷地は芝生で全体を覆い、完全なアメリカ式の住宅地帯となった。ほかに発電所やコミュニティー・センターとして、学校、郵便局、銀行、物品の販売所、ボーリング場、映画館、野球場、そして和田山には教会などがあった。接収地帯は、金網で外部と遮断して、出入口にはゲートを作った。施設は英文で表示された。英文の下には漢字で「日本人立入禁止」と書かれたのであった。

この頃の本牧接収地はまさに租界の様相を示した。

「ある晴れた日に、横浜本牧上空から下界をのぞけば、みどりの芝生の上に風通しよく並んだ駐留軍将校ハウス……ショートケーキのような美しさにくらべて、電車通りひとつへだてた海側は、窒息しそうにつめこまれた日本家屋、黒砂糖を無造作にまぶしたようなダ菓子の群れだ。『アメリカ租界』ということばが、アメリカ人の占領意識、優位性に対する日本人の劣等意識とすれば、これは白昼まざまざみせつけられる優位性の姿だろう。もちろん金網越しに近づいてみれば、湿気の多い日本の風土と、ガンガンたくストーブの熱のために、ペンキははげ、板壁はそりかえり、見るからにみじめではある。しかし駄菓子の家にストーブもない日本人には羨望以外のなにものにもうつらない。かりに『本牧ゆき』の市電に乗ってみたまえ、ハウスメイドらしい娘さんの会話をきいてみても、

『うちのマスター、いつも口ぐせにいうの、スピッツ一匹飼うとアバウト三万円かかるって。これはね、ジャパニーズ・メイド三人分のペイだっていうのヨ』

アメリカ人対日本人という意識の面からのぞいた『租界』という形が『毛唐ずれ』している横浜でも、これだけはっきりしめされている」（神奈川新聞社『この十年』）

◉地租問題――がっちりと区画された一、二号地の土地は、たしかに戦災地から生れかわって、しょうしゃな米軍住宅が並んだが、その土地は勿論、もともとこの地区の人々に、所有権や借地権があった土地であった。接収された土地は国（当時、特別調達庁）と土地所有権者との間で、私法上の土地賃貸借契約を結び、

国が賃借料をアメリカに代わって支払うという制度であった。従ってこれらの土地には課税された。その税金は昭和二十五年の税制改革以前は「地租」といわれたが、この課税は、土地の所有者にとっては、心外なことであった。

「昭和二十三年度の地租が区役所から来ました。税額を計算してみますと、坪当り二五銭、私どもの地所は接収地で、国からは、地代として坪当り二〇銭、これじゃ計算が合わない。直接米軍にかけ合うのは無駄だし、そこで、本牧、間門、千代崎町、本郷、上野の各町の一〇三人の連名で、税金を安くしてくれるよう区役所に陳情しました。結果は減額は認められず、分納しましたが、接収なんぞは国の責任だのに、私どもには余分に税金を納めさせるんです。まあ、接収のすぐ後とはそんなものでした」(本牧町二丁目　石田兵一氏談)

これは戦後においての「陳情」のはしりであった。このときの陳情の呼びかけの写しは次のようなものである。

「昭和二三年度分の地租税通知書ハ御手許ニ配サレタ事ト存ジマス。此ノ税額ハ各位共地代収入ト全然収支償ハズ、當局ガ独断ノモノデ誠ニ無謀トモ云フベキデワ有リマセンカ、妥當ナル租税ハ国民ノ義務トシテ當然納付スベキナルモ、地代ノ値上ハ法規ニ依リ抑圧サレ未ダ現在ニ対シ此ノ不當ノ租税課額ハ土地ノ維持ノ困難生活ニ恐慌ヲモタラスモノニテ、此ノ際當局ノ猛反省ヲ促シ、合理的ナル税額ニ訂正ヲ要望シタイト思イマス。此ノ主意ニ御賛同ノ上、陳情書ニ添付スベキ本主意書ニ、記名調印ヲ御願申上ゲマス。

昭和廿三年十二月廿四日」

やがて地代と課税とのバランスがとれるようになったが、土地所有者のなかには「どうせ百年間は接収だ、国に買い上げてもらって、他の土地を買い替えよう」とする人々も多くなった。このため、接収土地が、国や他の人に売渡される結果となった。所有者の数、四八八人の変動がなくなった時点(五十八年三月現在)でみても、一、二号地合せて四八八人の地権者の内訳は、個人二〇八人、共有(個人)二五二人、法人二八人であるが、全体面積七〇万七、七六〇平方メートルのうち、これらの所有面積は三八・八パーセント、残り六一・二パーセントは公有地となっているのが実情であった。

昭和二十年代、「本牧は接収でどうしようもない」といったムードも出はじめてきた。ただし何の根拠もなかったが、わずかな期待感で「十年もすれば解除」といった楽観も生れた。

◉皮肉な復興——こうしたさなかにあって、戦災を受けた隣接の本牧町一丁目の一角には、チャブ屋的な建物が発生した。一号地にあった本牧チャブ屋街(区域としては小港町三丁目を含む)が接収地となると、ここで営業していた経営者のうちの数人が集り、米兵相手に営業をはじめたものであった。しかしそれは戦前のものとは違って、その内容もムードも異なって売春だけのもの

であった。そしてこのまわりには小さなバー、キャバレー、喫茶店の類も数店発生していった。しかしこれは皮肉な復興であった。

このような地点のほか、戦災地には、終戦後、道路ぞいに簡易住宅を建てたり、そこでささやかに商売をはじめる者も出てきたが、それがこの地区の戦後のはじまりであった。

「この地区の戦後の復興は、疎開せずにふみ止まり、戦災で焼かれて、ヤケトタンのバラックで頑張った、限られた人たちによってはじめられました」（本牧有志座談会）と地元の人はいう。

昭和二十二年（一九四七）三月、本郷町二丁目の商店を中心におよそ五〇店舗で、早くも本郷町商栄会が結成された。本牧地区での最初の商店会であった。次いで翌年の六月近くに千代崎商栄会、あとになって上野町一、二丁目商栄会（二十七年三月）など、上台市場を中心とした地帯に商店街が形成されることとなった。

◉本牧青少年の家――一方復興にともない、戦後の文化振興が全市的に図られていくなかで、二十四年八月十日、本牧町二丁目に本牧青少年の家が設立された。敷地一一〇坪（三六三・五五平方メートル）、建坪三〇坪（九九・一五平方メートル）のうち二〇坪（六六・一平方メートル）が図書閲覧室にあてられ、一、二〇〇冊の書籍、六〇〇冊の雑誌とを備えていた。代表は医学博士渡辺熊雄（本牧一丁目）で運営経費は年間三〇万円、うち二〇万円は参加一三の地元町内会が各戸五〇円を拠出、一〇万円は篤志家の寄付によった。

その後「戦後における地域社会の文化の向上は青壮年の教育をおいて外になく、青壮年の教育は学校教育のほかに社会文化の環境を健全にかつ、よりよき雰囲気に醸成することが肝要であり、それには図書館の設置を第一とする」（『横浜文化名鑑』昭二十八・三・三十）といった風潮から二十五年には、旧山手警察署庁舎に青少年を対象とする図書館が開設された。

発足以来この図書館は、講演会や講習会などに大いに活用された。いわば、この図書館は民間図書館のはしりであった。この頃、市内にはこのような図書館が全市で一三館であった。

図書館の運営は、一六町内会の月二〇〇円から二、〇〇〇円の運営分担金、総額一五万〇、六〇〇円（昭和三十五年九月現在）によって運営された。

本牧の地区は、こうして中央部に広大な接収地を抱え込んだが、その周辺に居住する市民は戦後の混乱からたくましく立ち上っていった。

(2) 復活への道

◉復活の海――こうした戦後の大きな変化の渦中にあったこの地区で、ただ一つだけ幸いなことは、本牧の青い海までは米軍によって接収されていなかったことだった。市民にとっては苦渋な戦後ではあったが、漁獲は順調に延びはじめていた。とくに海水浴

本牧海岸にて〈落合昭一氏提供〉

や海釣りがささやかなレジャーとして復活していた。二十三年の夏、三渓園海水浴場は早くも更衣室、休憩所をもうけ、間門にも簡単な施設が開場した。入浴料は大人二十円、小人十円。海水浴場はほかに磯子区の偕楽園、中原、杉田、金沢区の金沢八景、野島などに開かれ、海が戦後の市民を呼んだ。

海釣りも早くも営業復活。本牧沖の中ノ瀬、十二天、下根あたりが絶好の釣り場となった。朝八時から夕方六時までで船賃五〇円、その他を加えて三〇〇円、この頃としてはかなり高値についた。

「ごく普通の成績で一日に白キス四十から五十枚は確実。また、アジ、コチなども有望。

道具。ハリスはナイロンの一厘半位のもの。錘は横浜式片天六匁位のもの。針は一分半の袖型針で短いのは五寸、長い方が七寸の二本。餌はゴカイ」(『月刊よこはま』昭二十五・八)

このほかに、防波堤の夜釣りがあった。

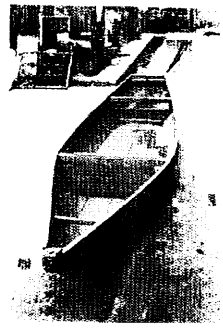
「夜釣りは主として黒鯛一本やりで、七時から十時半頃までに二、三年もの七、八枚は確実とのこと。時には五、六年ものもかかるという。渡し賃は四〇円で経済的だし、納涼気分を味わうには絶好。道具竿は裏調子がよし。道糸は人造の九尺から二間。ハリスはナイロンの三厘から四厘位。餌はフクロ(十本で三五円位)」(前掲誌)

本牧や間門の海辺は根岸、磯子とともに、また汐干狩にも人気を集めた。

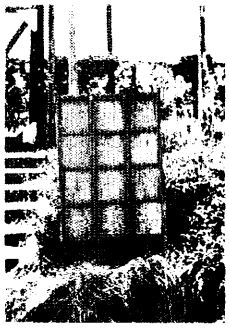
「潮風に貝と戯る

例年より温度が五、六度高いといわれるこのごろ、潮干狩のシーズンが訪れ、海は大変な賑わい……。横浜本牧、三之谷から根岸一帯の海岸ではアサリ、ハマグリを大量に養殖しているので、素人でも三十分で一升くらいのアサリやハマグリが面白いようにとれる。食糧事情も緩和され、海を渡るオゾンを一杯に吸い込み、貝と戯れている顔ものんびり」(『毎日新聞』昭二十五・四・二十)

◉海苔の養殖――三渓園の丘から見下す本牧の海、そこには海苔


海苔舟

海苔網


海苔す

ひびが、青い海面にすきまなく何条も建てられていたが、戦中、戦後はそのかげを失なっていた。海苔養殖は二十六年頃復活した。

「おノリ様々！　転り込む一億二千万円

本県特産浅草ノリは沿岸の川崎、本牧、根岸、屏風ケ浦、富岡、芝（ママ）、金沢の七漁業組合で目下採取期に入っており、最盛期は十二月中旬から来年二月までだが、本年は順調な天候に恵まれ、このまゝの状態が続けば豊作型も総生産額は四千万枚にも達し、昨年度の生産額三千五百万枚を上回るものと予想されている。

値段は十一月二十日入札したところによると生産者価格最高価一枚四円で昨年に比し一円安、平均二円五十銭といったところ。一帖廿五円で小売価格は生産者より十円位高いと見てよい。……いずれにしても一帖二十五円とした場合、生産者には約一帖三十円となり、一億二千万円の金が転り込むわけでノリ様々といったところである」（『毎日新聞』二十六・十二・四）

一方、町の商店会は、前述のように本郷町二丁目を主体として、二十二年には結成されていたが、次いで本牧三渓園通商栄会が五十数店をもって二十六年八月に結成された。接収地とは道一つへだてて、隣り合せたこの地区の商店会結成は、なにかと困難がともない、遅れてこの年となった。

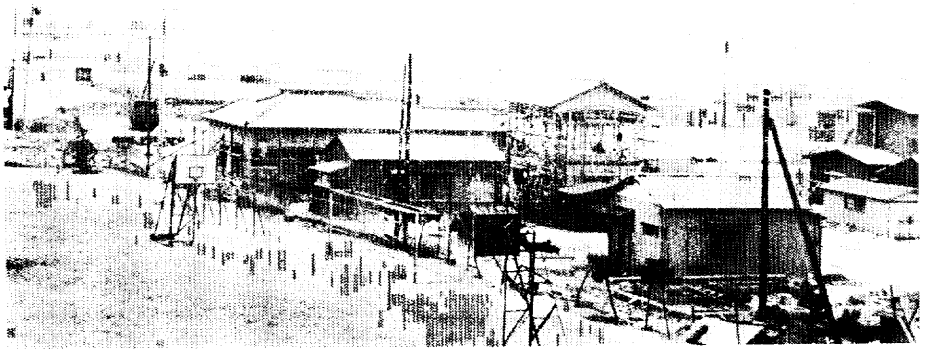
◉本牧神社――だんだん落着きをとりもどしてきたこの地区にとっては、本牧神社の復興が大きな課題となった。本牧十二天の丘の上にあった本牧神社は空襲によって社殿はもとより、境内の大樹まで、ことごとく焼失、氏子の努力によって仮社殿が早速造営されたのも束の間、その境内地も社殿も接収されてしまった。そこで、地元の人は「本牧神社復興奉讃会」を結成、各町から十名の委員が出て、関音三が会長となった。復興予算四五〇余万円、各町の人口割によって割り当てられ、拠出された。新しい境内地には池田綱の所有地一五〇坪（四九五・七平方メートル）を無償で借り受け、昭和二十九年十一月に遷座されたのであった。

◉無期限使用――地区の人々の接収解除の、藁をつかむような、ささやかな願いも空しく、二十七年（一九五二）七月二十六日、日米行政協定によって、米軍に提供する施設や区域が調印され、講和後もひきつづいて無期限使用となった。接収された土地所有者はもとより、まわりの町の人々も絶望的となった。

あきらめのなかに本牧地区の人々は、接収地を横目で見ながらも、それぞれ地域の変化を生み出していった。

◉商栄会――戦後いち早く商店会を結成した市電通りの本郷町商栄会は、交通の便のよさで一日に六、〇〇〇人もの人出となった。この頃の店舗は、上台市場の二四店を含め一一〇店、店舗面積は二坪（六・六平方メートル）から五〇坪（一六五・二平方メートル）、主として食料品店、雑貨や衣料の日用品店であり、商圏は地元はもとより北方や小港町、さらには根岸地域の一部にまで及んでいた。

本牧神社



埋立地に住宅が建てられてゆく，左は大鳥中学校の校庭〈落合昭一氏提供〉

上台小売市場（昭和30年代）〈横浜市図書館提供〉

今に残る舟小屋（本牧町４丁目）

「この商店街は、食料品と名のつくほとんどのものがそろっていることや、買ったものをそのまゝ夕食のお皿の上に盛ることができる簡単さ、夕食の仕度をしながらエプロンをかけた主婦が買物籠をさげて来ると大抵の物が間に合う便利さが特徴である。

夕食前に最も力を入れることと午前より午後の方が気分的に買物しやすいことに原因がある。この上台公設市場の反対側に本牧マーケットが設立され、かなりの人気を呼んでいるけれど、店数、物品の量などに難があり、まだまだ発展の余地を残している。まとまったものとか、高価な物などは伊勢佐木町方面のデパートや東京方面に出かけて買っている現状である」（『中区社会科

資料集』昭三十三・四）

しかし、こうした状況はここだけに止まり、本牧三之谷との間の接収地は、広域的な商店街の発達をはばんだ。それに対して本牧緑ケ丘、本牧満坂の西武鉄道の宅地開発以後は、次第に丘地にも住宅が建てられていった。昭和三十五年頃から、普通住宅が一挙に増加する傾向を見せ始めた。そして本牧海岸の埋立地のうち、本牧町四丁目には、大鳥中学校の鉄筋校舎が三十年三月に完成、三十六年まで、逐次増築されていった。これとほぼ並行して、中学校わきから本牧元町にかけて、漁業を離職した人々の住宅二五五区画が、もとの海岸線にそって次々と建てられていった。

四十年（一九六五）に入ると、地区内には鉄筋構造の住宅の増加傾向が見られ、五十一年以後はさらに急激な増加となった。

◉解除運動――こうした地区の住宅地化のなかで、ひとり接収地だけは、広い庭つきの住宅として並び、すでに十年が経過していた。そこへ昭和三十七年九月、米軍側は適当な代替施設を日本側で負担するなら、土地の返還に応じると発表した。この米側の発表にともなって、にわかに住民組織が結成されていった。昭和三十八年三月、「本牧地区接収解除返還同盟」が結成された。この同盟のメンバーは、本牧三之谷四人、本牧町二五人、本牧元町一九人、間門町四人の地元の人々を中心とし、区内八人、市内二〇人、県内九人、県外三一人計一二〇人で構成された。これらの人々は接収地内の土地所有者であった。一方、土地所有者でない、もとのこの地で営業をしていた商店主たちによって、昭和四十年四月一日に、「本牧モデル商店街協同組合」（組合員六一人）、などの組織が設立されて、それぞれの利害の上にたっての活動が開始されていった。これらの組織は、それぞれ具体的に活動してゆくことになるが、返還同盟では「本牧接収地区復興再開発研究会」さらには「再開発研究企画委員会」などを設けて組織の強化を図り、ますますその活動を活発化してゆくのであった。

この同盟の活動には、幾度かの会合があるが、その一例として次のような案内状がある。

「　案　内　状

本牧地区接収地解除返還同盟

前略　昨年末以来、再三に亘り有志相集ひ、奔走中であった本牧地区接収地即時返還要請運動に関し、曙光を得ましたので現在迄の経過報告と今後の行動に万全を期し、一刻も早くその成果を挙げ度いと存じ茲に皆様の御会合を願い左記の通り大会を開催し我々地主及び関係者の声を大にして、此の運動を一段と強力に推進し要望の貫徹を期し度いと存じます。就いては、萬障御繰合せの上是非奮って御参加下され度く、折入ってお願申し上げる次第であります。

記

一　日　時　昭和三十八年三月十日（日）午后一時

二　場　所　本牧大鳥中学校（本牧海岸）　」

ただしこのなかの「曙光を得た」ということは、解除に有利になったことではなかった。いわば一喜一憂の一齣にすぎなかった。

そして、関係機関へはしばしば陳情が行われた。三十九年（一九六四）三月には、大蔵大臣、防衛施設庁長官に早期解除の促進が要望された。四十一年六月には「本牧接収解除地区復興同盟」（会員約五〇〇人）が結成された。これも地主側の組織だが、二つの同盟の会員は実質的に同一人であって、返還というのは防衛庁に対しての返還運動であり、一方の「復興」は、開発を含めて対横浜市への要請組織であったといわれている。事実、返還の見通しが四十九年九月につくと、この二つの同盟は統合合併して新たに「新本牧地区開発促進協議会」（会員約五〇〇人）が発足している。

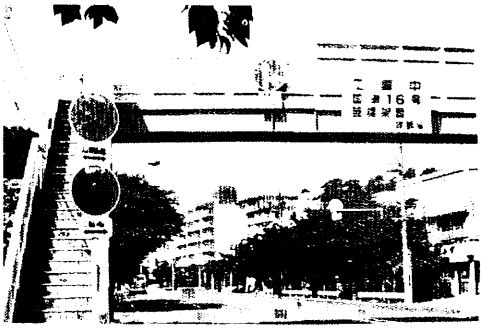
◉**歩道橋**――こうした接収地問題がもみにもめた頃、一方では全市的な傾向として、自動車交通量が増加し、市民生活の上に大きく影響を及ぼしていた。昭和四十一年十二月六日東福院前の市電道路を横断する幼稚園児の群に、突然、ダンプカーがつっこみ、園児三人が死亡、六人が重軽傷という惨事が発生。この地区の戦後最大の事件となった。

「麦田のトンネルからずうっと、歩道橋がありませんね。あるのは間門だけなんですが、初めてここに陸橋が出来ました。昭和四十一年のダンプカーの事故。可哀そうに、幼稚園児が犠牲になりましたが、ひどいもんでした。私どもはそのダンプをのろいましたね。二度とこんなことが起らないように、私どもで陳情して歩道橋を造ってもらったんです。歩道橋のはしりです。どうもここに来ると、直線の道になるので、車がスピードを出したので、よけい事故が大きかったんです。間門の大きな事件ですね」（間門町有志座談会）

◉**本牧埋立**――昭和四十二年（一九六七）六月三十日、本牧地先海面に産業関連用地二八二万二、三五四平方メートルの埋立が竣工した。この土地に十一月十日「錦町」と「豊浦町」が新設された。いずれも繁栄を願っての命名であった。この年、本牧ふ頭には一二億円の起債が許可されて、手の指を並べたような形状で、A・B・C・Dの各ふ頭八二万一、二三八平方メートルが四十三年四月三十一日に完成した。十一月にはコンテナー貨物集荷場が完成した。八月二十七日、町名も付き本牧ふ頭という町として独立したが、そこは企業のわずかな倉庫と市営の上屋があるだけのコンテナふ頭である。

四十四年五月六日には豊浦町の地つづき、三四万二、〇二一平方メートルの埋立が竣工、七月一日にこの区域に「かもめ町」が誕生した。

錦町には日産自動車、三井物産、日本通運、鹿島建設、三菱重工業などが進出してきた。三菱重工業は内田町から一部移転があり、造船部門がここに移った。日産自動車は自動車輸出専用のふ



間門歩道橋

埋立前の本牧海岸〈今村幾太氏提供〉

頭と自動車収納ビルをもった。

豊浦町には、日本石油精製、住友金属、日本農工業、国際埠頭、横浜トヨペットなど、いずれも大手企業が進出、かもめ町には、中小区画として、五七社の企業がそれぞれ進出した。本牧ふ頭八二万一、二三八平方メートルと、港湾産業関連用地三一六万四、三七五平方メートルをつなぐ工業団地には、四十四年（一九六九）十月一日根岸線根岸駅から本牧C突堤をつなぐ神奈川臨海鉄道の本牧線が営業を開始した。全延長九、九八二メートル、錦町には本社屋と本牧操車場が建設された。物資輸送動脈として臨海鉄道が走り、かつての漁船に代って、大型タンカー貨物船が豊浦町の日本石油精製株式会社根岸製油所岸壁に横づけされるようになった。

この一帯は、幾何学的に区画され、白く大きな壁面がつづく巨大な工場群が出現した。ここには自動車が疾走するだけで、人かげは見られない。町とはいうものの、住民不在の町であった。

こうした工業団地や港湾に働く人々のための共同住宅が、四十三年十一月から五十年七月にわたり建設された。本牧港湾団地の出現である。五階建二棟、七階建一三棟、一〇階建二棟で合せて一七棟、全部で一、七〇三戸の大団地の誕生であった。団地のなかには市立の錦保育園や、日用品を販売する商店二四店をもつ本牧港湾福祉会館が設けられた。

さらに、この地区の人口急増にたいして、四十六年九月一日に

本牧南小学校が本牧元町に創立された。収容児童数四九七人、普通教室一八教室をもち、建物もスマートな学校であった。

◉**海に替えて**――この埋立で、三渓園の海岸も埋立てられたが、かつての本牧鼻あたりの自然の崖と松林を残して公園がつくられ、四十四年三月完成、本牧市民公園と命名された。さらに失なった海水浴場に替るものとはゆかずとも、市民の遊泳場として、この七月には七、〇〇〇人が利用できる大市民プールがオープンした。さらに園内の施設は充実され、青少年のための自転車コース、テニスコートなどができた。

翌四十五年一月には、園内松林の一角に青少年陶芸センターがオープン。四十六年三月には鶴見線で廃車になった蒸気機関車D51型五一六号と市電の四輪ボギー車一、二〇〇型各一両が保存され、十月には、県によって野鳥保護区に指定された。園内のがけに沿った細長い池は、自然の景観を残している。この本牧市民公園から本牧臨海公園、そして八聖殿、さらに三渓園への一連の地域は、市民の一日の散策には恰好のところとなった。

一方、八聖殿は、四十八年三月、市の施設八聖殿郷土資料館として、民俗資料を中心に、漁業生産・生活用具など約一、〇〇〇点を保存し、農家を復元、展示した。それに八聖像が公開展示され、新しい意義をもつ施設となった。

◉**三渓園さまざま**――三渓園の場合も、年毎に市民の来遊が多くなっていったが、昭和四十八年三月には臨春閣の内部がはじめて

本牧臨海公園

本牧プール（西島久栄氏提供）

市民の特別観賞に供され、六月には能舞台が復元された。この頃臨春閣の地袋戸が盗難にあい、幸いにも四十九年九月、五カ月ぶりに無傷で、兵庫県下で発見されるという事もあった。またこの年十月、園内の矢篦原家のふすまの下張りから江戸期の古文書約八〇〇点が発見されたり、五十年には観梅会が六八年ぶりで復活したり、汚濁して蓮が咲かない池を改修して、五十二年七月には観蓮会が催された。かくして本牧地区の象徴三渓園は充実された。

(3) 解放

◉**情緒再来**――この地区の海は工業団地となり工場群が林立、埋立によって本牧市民公園などの新しい景観を生みだした。工場敷地の先端の海の青さや、エントツを染める夕映どき、そして公園のみどりと松籟などは、この本牧地区の情緒をかもし出している。

しかし昭和四十年代から五十年代は、この新しい景観に対して、平坦部は依然接収中であって、はっきりと明暗を分けていた。

◉**接収解除運動**――適当な代替施設を日本で負担するなら土地を返還するという三十七年の希望的な声明はその後一向にらちがあかず、接収地にはいぜんとして、米軍の住宅がならんでいた。

この頃からの接収解除運動経過は略年表に示したが、これは実にわずらわしく、難問解決の苦難の軌跡が見られる。本牧はひとり、敗戦のつけを宿命的に負いつづけていた。

長い間、接収というわが国の中でも異例なきびしい状況にある本牧接収地に、昭和四十三年（一九六八）十二月二十三日、ついに返還の方針がきまり、わずかに曙光が見えはじめてきた。「横浜海浜住宅四二七戸中、旧本牧一号地の百戸分の移転費として、国は七億八千万円（うち二億円は四十二年度繰越分）を計上し、移転先の決定次第着工することになった」（横浜市『昭和四十年事務報告書』）というのが内容で、四十四年三月二十七日この方針をもとに、日米合同委員会において横浜海浜住宅一号地区に代るものとして、横須賀の米海軍施設内に住宅などを、新設することを条件に合意された。

しかし地元と市の意志は固く、一・二号地一括返還をふたたび要望しつづけたのであった。この間、本牧十二天の国有地六、二一三平方メートルが返還され、さらに代替施設を横須賀市に建設することに決った。

昭和四十八年（一九七三）八月になって、市開発構想案と国有地の利用計画案を地元に提示してから、地元の組織団体の活動が活発化し、地主の自主的な研究会がしばしば開かれた。

これにともなって、国有財産審議会は、四十八年十二月、接収地内にちらばった国有地――その多くは、かつて永久接収になる見込みと思って国に売却された私有地が多いのだが――を集め

て、区画整理を行い、もって都市開発にあてる方向が適当であるとの基本方針を出し、四十九年三月には、この方針を大蔵大臣に提出したのであった。

◉再開発気運――四十九年九月には、地元の地権者や都市計画の専門家たちによって『再開発研究報告書』が提出された。市は、市の「新本牧地区開発基本構想」を、さらに広い視野から検討するために、高山英華東京大学名誉教授を委員長とする「新本牧地区土地利用計画検討委員会」を設置し、その検討結果をもって、基本構想を裏づけすることとした。

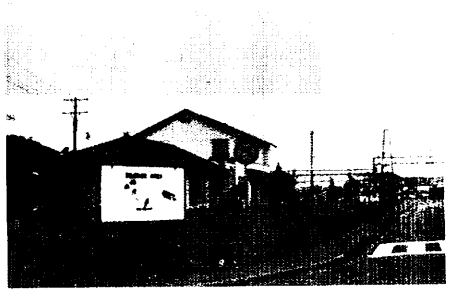
五十年二月に入ると国は、この本牧地区にある国有地を含めた区画整理に同意、この結果、区画整理による開発形式が本決りとなったのである。このことは区民にとって、単に地元だけのことではなく、当然に全市的な問題としてとらえられた。

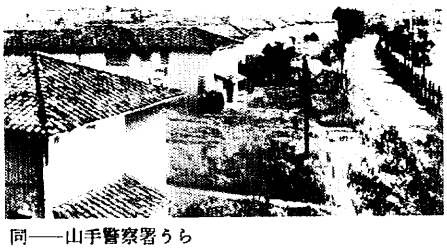
◉組織動く――五月二十四日、中区民協議会が神奈川県住宅供給公社会議室を会場として、参加者一一八人によって「接収解除を考える」のテーマをかかげて開催された。会議には中区選出の市・県議会の全議員も顧問として参加した。このときの区民の発言には、次のようなものがあった。

「接収地はこのままでよいのかどうか、原点にもどって考えるべきである。地主以外の区民も本当に真剣に考えたことがあるだろうか。早く返してもらうためには、跡地利用構想を含めて、私たちひとりひとりがどうすればよいのかを考え、この活動を盛りあげてゆくべきだ」（二〇代男性　会社員本牧元町）「本牧を大きなビジョンで考え、健康で文化的な生活を営める福祉の町にしたらどうか」（三〇代女性　主婦本牧町）「接収地問題も区民が本当に自分の問題として考え、総力を結集して活動すれば必ず解決する」（八〇代男性　無職打越）「三〇年間解除されていない。市民運動がどれほど効果があるか判らないが、みんなが総決起して当局にあたることこそ解決を早めることになりはしないか」（六〇代男性　会社員石川町）（以上『区民協議会議事録』）。十月、市は開発の構想をわかりやすくパンフレットにした説明書『本牧への提案』を地元地権者に配布した。

これには「本牧への提案」と「現況」を述べたあと、新しい町づくりの提案として、丘陵部分は「山頂公園」、平坦部には住宅地と商業、業務地（事務所街）とし、もとの十二天の丘は「ふるさとの森」として残そうとするものであった。そして小・中・高等学校の新設、中部下水処理場や山手警察署の拡張、保育所などの公共公益施設のため、有効に利用することなどを述べ、さらに新しい街づくりの手法にふれ、「皆さんは、本牧の新しい歴史をスタートさせました。その第一歩が『再開発研究委員会報告書』にまとめられた開発構想であり、その骨子がこのパンフレットの〝本牧への提案〟です。これを実現させるためには、皆さんが進んで街づくりに参加し、智恵をだしあい、後戻りのないよう、着実にその成果を積み重ねてゆくことが大切です」と述べた。

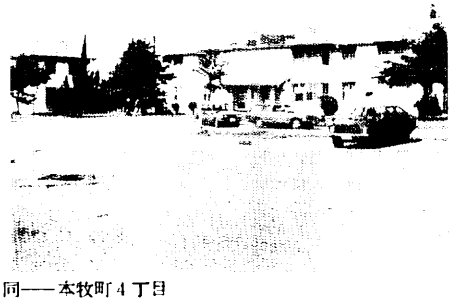
接収1号地（エリア・ワン）


同——小港町3丁目

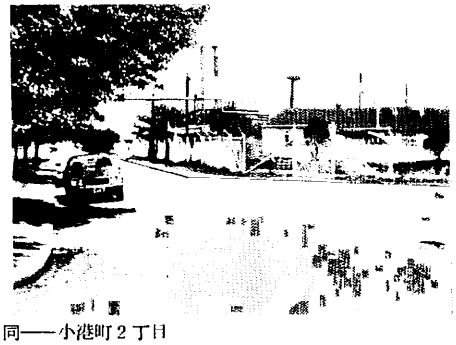

同——山手警察署うら

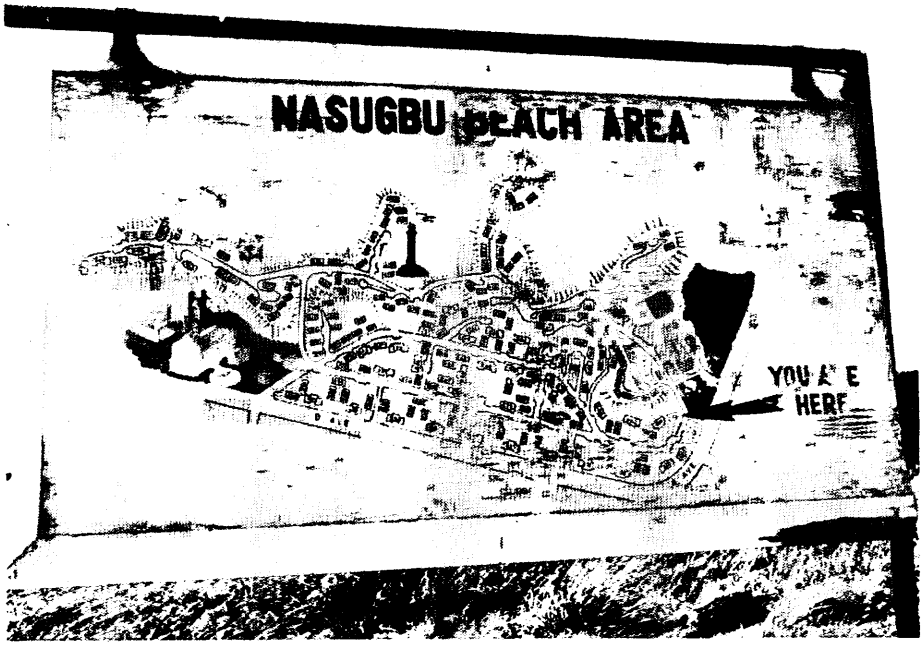
同——本牧町4丁目

同——山手警察署隣接

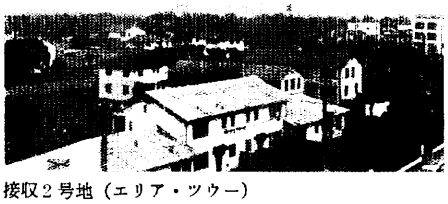

同——本牧町4丁目

同——本牧町3丁目

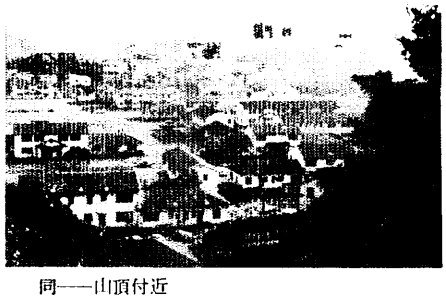

同——小港町2丁目



接収地の案内板（2号地）——長さ2メートル、はば1メートル、木製



接収2号地（エリア・ツウー）



同——山頂付近

同——中央部

同——向は本牧三之谷方面

こうした区民の集会や、そしてパンフレットなどによる市の構想の発表は、地権者にとっては、いよいよ研究の期間を脱して、本格的な検討に入らなければならない時期となった。

昭和五十年（一九七五）十月十一日促進協議会の総会が、薬業会館（国電根岸駅前）で開催され、市の開発構想案説明ののち、「事業計画基本方針と活動、それに賃借料についての特別決議」などが議決された。その主な内容は、以下のようなものである。

(1)接収地は、国有地、公有地、民有地が入り乱れているが、それぞれの境界は判らず、境界を確定することは事実上できない。それに原形復旧して返還されても、古い土地区画のままでは建築基本法の上で高い建物は建てられず、地権者にとって大変不利であること。

(2)一方市では、横浜国際港都建設法による都市開発を本牧地区にも行う計画があり、国でも接収地内に散っている国有地を集めて区画整理による有効な都市の再開発を行うことを目的としている状況なので、協議会は今後も土地区画整理による都市開発を主眼とした研究を慎重に行っていく。

そして、この確定によって、ひとまず、地権者の意向をアンケートによって調査することとした。アンケートの回収率は五〇・九パーセント（一九三通）で、地権者の総会で、意向がまとめられた。

さらに切実な問題として、賃貸借料についての特別決議がなされた。このことは、地主にとっては一種の死活問題であった。

「防衛施設庁では、解除になった時点で、賃貸借契約は終り、賃料の支払い義務はなくなるという見解をとっているが、もしこの見解に従うならば、仮りに返還後、土地区画整理事業が施行された場合は、地権者は換地処分が行われるまで、その土地の利用はできない上に、賃料収入はなくなる。これは国が地権者に土地を原形復旧して返還する、民法上の義務に違反したうえに、地権者の土地の使用収益権まで侵害することとなり、地権者としては承服しがたい。そこで国は、地権者に対しその代償として、土地利用のできる日までの賃料の支払い（補償）をすべきである」（新本牧地区開発促進協議会『本牧ニュース』78号　昭五十・十一・十五）

◉方針確認――その後日米間において、二号地区などもあわせ、一括して移設する方針が確認された。そして、五十二年十二月十五日の日米合同委員会において、横浜海浜住宅地の一号地区、二号地区、それに新山下地区、根岸住宅地区内の旧根岸競馬場の一部と横浜チャペルセンター（横浜公園内）の解除・返還は、住宅などの施設を横須賀と根岸住宅地区に移設することを条件として合意され、それぞれの移設工事がほぼ完了した時点、昭和五十七年三月三十一日付で返還が決定したのであった。

横須賀泊浦湾の代替施設は住宅七七七戸のほか、小・中学校、教会、倉庫、医療施設、ボーリング場、劇場、売店があり、根岸は住宅一戸、育児所、独身将校及び下士官宿舎と下士官食堂等で

ある。

このような状況のうちにも、市と市民との間で、新しい街づくりの計画の話し合いが進んだ。しかし地元の人々、特に地権者にとっては、さまざまな不安がうまれていた。

さきに述べた、総会での賃貸料収入の問題は、依然として不安となって表われている。ある人はいう「解除されれば今まで入ってきた賃借料はなくなり、そのうえ、区画整理の工事が完成するのには五、六年はかかるでしょう。それでもこの間は固定資産税が課税されるとは……一体どうしたらよいか判りません」と。もとよりこうした収入だけのことではなく、次のような今後の不安もある。

「減歩率が二五パーセントであっては、有効に利用する面積は少なくなります。まして、私どものような少しばかりの土地を持っていて、二五パーセントでは、残る面積では、どうしようもないですよ。仕方がないから少ない者同志で土地を出し合うと言ったって、一区画三百〜五百坪の耐火構造の建築計画のごく一部では、なんになりますか。自分の土地であって自分の土地でなくなります。そのことは目に見えていますよ」

「誰だって、小さいながらも庭つきの家に住みたいんです。でもそれはできません……法律で決っていれば仕方ありませんが、われわれは解除されてもアパート暮しなんですかね……」

「選択換地というけれど、ある場所に希望が殺到したらどうします。結局、市でも県でも割り当てはしてくるんじゃありませんか」

「水道だって道路だって、昔からあったんです。それを新しい街づくりと言ったって、われわれの土地から余分に減歩しようとする。これじゃかないません」

こうしたことを地元の人々は素直に言う。そして国に対しては、「国は国有地をあれだけ持っています。国は市を通じて莫大な補助をすべきだと思います。私が聞いたのではありませんが、接収の当時、国はいつ解除になるか判らないから、土地を国に売ったらどうか、仮りに解除になったら、その際は買いもどすから、と言う指導があったといいます。それに、国は解除になった時は、原状回復する、それができなければ補償する、と言ったと聞いてます。とにかく、接収はえらい災難ですから、国に責任をもってもらわなくちゃあ……」（以上本牧町某氏談）

こうした地元の人たちの談話のなかに「減歩の大きさについては、この地域内に相当面積の国有地があることや、原状回復義務を負う防衛庁に資金負担を期待できることなど、他の接収解除による区画整理より、権利者にとって有利と思われる点が見受けられます。従って、権利者が接収解除を所管する大蔵省、防衛施設庁から、接収前にあった上水道・下水道施設等の復旧財源を引き出すことができれば、保留地減歩は減ることになります」そして「当地区はある程度、市街化の進んだ地域であるため、区画整理に

よる宅地利用の大幅な値上りは望み薄です。それ故権利者としては、減歩の見返りに留意し、減歩以上に宅地利用の増進も確保するよう努めなければなりません」(『本牧ニュース』第一〇号講演会記録 昭五十五・六)という量より質を問題とする減歩、という考え方もある。

とにかく、本牧接収地の解除後は、今後に問題をはらんでいる。だが、住民のいう「接収はえらい災難ですから、国に責任をとってもらわなくちゃあ」という一言は印象的である。

◉返還式——五十七年(一九八二)三月三十一日に、待望の一号・二号地の解除返還が行われた。面積八八万二、一九八・六四平方メートル、接収後実に三十六年ぶりであった。——この日、本牧の空は、快晴であった。

解除のあとエリア一・二号地にいた一四三人の日本人メイドは職を失って、ここから転居したが、いずれも住民登録上の転出の届はなく、中区役所では職権で登録を抹消したこともあった。永い間の接収の、解除のあとのひとこまであった。

接収地の施設解体は年内に行われた。全体の地区を四つの工区に分けて実施、工事費約七億円。旧米軍住宅二三〇棟のほか、道路舗装(コンクリート)、上・下水道などの施設一切を撤去した。排出されたもの、コンクリート片三万一、二〇〇立方メートル、廃材一万二、六〇〇立方メートルに及んだ。このコンクリート片のなかには、旧本牧小学校校舎のコンクリート細片も含まれていた。

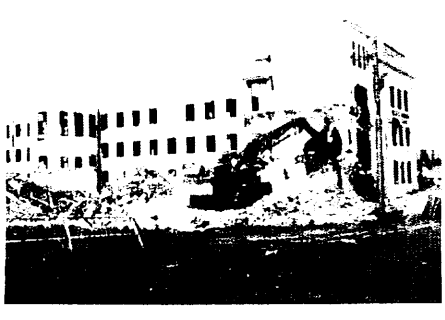
この地区にとって、接収の解除・返還は昭和二十一年接収以来、市民の悲願であった。接収解除のために、国をはじめ行政機関、そして地元市民あげての運動を展開してきた成果であった。

これまでに到る一連の経過について、前に述べたこととの重複もあるが、次のように略年表としてあげておきたい。

◉接収解除運動略年表

昭和27・7・26　本牧接収地区は、日米両政府間において、行政協定第二条により、在日合衆国軍隊に提供する「施設及

接収地返還式——青空に日の丸がひるがえった，右は降下されたアメリカ国旗のポール



返還後解体されるアメリカの中学校(旧、本牧小学校校舎)

び区域」として、無期限使用となった。

37・8・14　総理・大蔵・建設・通産の各大臣及び防衛施設庁長官あて、整理統合及び再配置に関する要望書を市が提出した。

9・　米側は適当な代替施設を日本側が負担するなら土地の返還に応ずる旨発表した。

38・3・　本牧接収地区解除返還同盟が結成された。

39・12・1　大蔵大臣・防衛施設庁長官あて、接収解除促進を市が要請した。

40・4・1　本牧モデル商店街協同組合が結成された。

6・21　防衛施設庁長官あて、移転費の計上につき要請した。

41・1・27　防衛施設庁は、市が国に代って代替施設を建設するよう建築交換契約を締結したい旨明示した。

2・11　市は、この移転計画には納得できない旨回答した。

6・9　日米合同委員会において、中消防署北方出張所の排水管接続のための共同使用が承認された。

6・　本牧接収解除地区復興同盟が結成された。

43・2・19　横浜海浜住宅地区の移転計画につき、内閣総理大臣あて要請した。

12・23　日米安保協議委員会において、横浜海浜住宅地区の返還方針が決定された。

12・29　横須賀市長は、横浜防衛施設局長に対し、横須賀米海軍施設内の泊浦湾への移転計画につき、了承する旨回答した。

44・3・27　日米合同委員会において、一号地区の返還が合意された。

4・3　一号地区の一部（十二天、国有地六、二一三平方メートル）が返還された。

4・5　基地関係県市町連絡協議会は早期返還と国有地払下げを求める要請書を防衛施設庁、大蔵省、同関東財務局あて提出した。

4・9　日米合同委員会施設区域調整部において、昭和四十四年度移転実施計画が決定された。

(1)　海浜住宅一号地区、山手地区のうちから二五世帯を厚木航空基地に移転した。

(2)　横須賀の泊浦湾の埋め立て（約一一・五ヘクタール）の七分の一を実施した。

8・7　横須賀市議会は泊浦港の埋立申請を承認した。

8・21　関東財務局長あて、国有地の跡地利用について要請した。

46・9・21　防衛施設庁長官あて、接収解除を市が要請した。

10・21　大蔵大臣あて、国有地の無償譲渡等につき市が要請した。

47・1・8　本牧接収地区解除返還同盟、本牧接収解除地区復興同盟の代表者は防衛施設庁長官あて、解除促進方を要請した。

2・26　二号地区が災害時の広域避難場所に指定された。

8・11　市は防衛施設庁長官あてに、早期返還を要請した。

48・2・22　本牧接収地区解除返還同盟会長及び本牧接収解除地区復興同盟会長より防衛施設庁長官あて、早期返還の陳情書を提出した。

3・14　返還同盟会長及び復興同盟会長より防衛施設庁長官その他にあて、早期返還の陳情書を提出した。

8・10　返還財産処理連絡会が大蔵省で開催され、本市は海浜住宅地区の開発構想案と国有地の利用計画案を説明した。

8・30　本牧接収地区復興再開発研究委員会が発足した。

9・6　米空母横須賀母港化に伴なう一部乗組員家族の横浜住宅地区への移住について、防衛施設庁長官及び横浜防衛施設局長に対し抗議した。

9・27　第2回研究会が中区青少年図書館（以後図書館と略称）で開催された。

10・5　米空母ミッドウェー号が横須賀に入港した（母港化の開始）。

同日、市長は「本市内の基地の接収解除が遅延されることを恐れる」と抗議声明を発表した。

10・9　両同盟合同で「本牧ニュース」が創刊された。

10・14　第3回研究会が図書館で開催。大村都市設計研究所長が講演した。

10・26　第4回研究会が図書館で開催された。市企画調整局が横浜市の基本方針を講演した。

11・24　第5回研究会が開催された。町田市の町田コーポタウンと横浜北部農業協同組合の藤ヶ丘アパートの区画整理事業を見学した。

11・30　第6回研究会が開催された。

12・7　国有財産中央審議会の返還財産処理小委員会が開催され、「海浜住宅地区の区画整理を行ない国有地の集約化を図り、都市再開発の用に充てる方向で処理することが適当と考える」との基本方針を打出した。

12・11　第7回研究会が開催された。

49・1・17　本牧接収地区解除返還同盟会長及び本牧接収解除地区復興同盟会長が防衛施設庁長官及び横浜防衛施設局長に対し、海浜住宅1・2号地区の同時返還陳情を行った。

1・21　両同盟会長が同上趣旨の陳情を神奈川県知事に対し行った。

1・31　第8回研究会が開催された。市開発部より街づくりの基本的な考え方と国との折衝経過を説明した。

3・14　国有財産中央審議会が開催され、四十八年十二月七日の返還財産処理小委員会の報告内容が、ほぼそのまま取入れられて、それを大蔵大臣に対し答申した。

3・15　一号地区の一部（小港町二丁目四五外）、土地九九六・五五平方メートル、建物四三六・九〇平方メートルが返還された。これは本牧ふ頭の進入道路の拡幅のため、昭和四十六年以来、返還運動を進めていたものである。

6・17　大蔵省関東財務局、同横浜財務部、建設省都市局、防衛施設庁移設対策本部、横浜防衛施設局、神奈川県渉外部、横浜市関係局により「海浜住宅地区の区画整理事業と都市計画事業について」の打合せ会が開催された。

9・1　本牧接収地区解除返還同盟及び本牧接収解除地区復興同盟の統合合併により、新本牧地区開発促進協議会が結成された。

9・4　地元地権者や専門家などの協力により、再開発研究報告書を地元が作成、市へ報告した。

9・25　大蔵省関東財務局（管財第一部次長、特別財産課長ほか）に対し、再度、新本牧地区の跡地開発構想案を説明した。

9・28　出店同盟会は、再度地区内に戻り営業したい旨を陳情した。

11・1　市の「新本牧地区開発基本構想」を広い視野から検討するため「新本牧地区土地利用計画検討委員会」（本市の委嘱）が設置された（委員長、高山英華東大名誉教授）。

11・8　右の検討委員会（幹事会を含め六回開催）の最終会が開催され、検討結果の報告がなされた。

50・2・12　市議会接収解除促進実行委員会の代表が、議長名をもって、大蔵大臣ほかに対して「横浜海浜住宅地区返還後の国有地利用に関する要望書」を提出した。

3・16　市では、開発に関するアンケート調査を実施した。国有財産関東地方審議会において「横浜市所在横浜海浜住宅地区所属国有財産の処理について」の条件が審議され、国は「横浜市長が本地区に土地区画整理事業を施行することに同意することとする」という処理方針が了承された。新本牧地区開発促進協議会が開催され、市長が出席して接収解除の見通しなどを含め挨拶した。また市関係局が出席して返還跡地の開発構想案等について説明した。

5・24　第3回中区区民協議会が開催された。テーマは「接収解除を考える」。

10・11　新本牧地区開発促進協議会の総会が開催され、市の開発構想案の説明が行われた（パンフレット「本牧への提案」を配布した）。

10・16　協議会総会を開催した。

11・13　市議会接収解除促進実行委員会の代表が、議長名をもって、大蔵省関東財務局長に対して「横浜海浜住宅地区返還後の国有地利用に関する要望書」を再び提出した。

51・1・20　役員会において、選択換地の方法によることを基本的に了承した。共同開発の内容方法について市が地元に説明した。

51・2・6　国有財産中央審議会の返還財産処理小委員会において、大規模返還国有地の三分割案を大蔵省に提案し大筋で了承された。

2・26　新本牧地区開発促進協議会の下部組織として「再開発研究企画委員会」が発足し、新本牧地区の今後の具体的課題への適切な対応を図ることになった。役員会委員会において、土地区画整理事業によることを了承した。

3・2　神奈川県知事、横浜・川崎・相模原・逗子の各市長の連名で、大蔵省理財局長・次長・特別財産課長に対して「基地跡地利用に関する緊急要望書」を提出して、国有地の三分割案を撤回し、処分については現行の優遇措置を講ぜられたい旨の要望を行った。

4・6　第2回研究企画委員会が開催された。

6・10　土地区画整理地区（十日市場ほか）を見学した。

6・21　国有財産中央審議会が大蔵大臣に「米軍提供財産の返還後の利用に関する基本方針について」（三分割有償）の答申を行った。

6・25　第3回研究企画委員会、国有地の三分割有償払下げ方式などについて研究。

7・30　横浜市長が、防衛施設庁長官に対して「横浜海浜住宅地区（新本牧地区）の早期接収解除並びに土地区画整理事業施行区域の都市計画決定に伴う諸問題について」の要望書を提出し、また大蔵省関東財務局長に対して「横浜海浜住宅地区（新本牧地区）の接収解除に伴う土地区画整理事業施行区域の都市計画決定について」の要望書を提出した。

8・5　土地区画整理事業について講習会を開催した。

8・11　神奈川県基地関係県市町連絡協議会が大蔵大臣、大蔵省関東財務局長に対し、「基地跡地利用に関する緊急要望書」を提出して、跡地国有財産の処分に当

っては、地元の計画を尊重されたい等の要望を行った。

8・31　役員会において減歩の考え方、平均減歩率について基本的に了承された。

10・16　定時総会が太田町の神奈川県建設会館で開催された。市都市開発局長らが出席した。都市計画決定を本年中にと強調。

10・27　市議会接収解除促進実行委員会の代表が、議員名をもって、大蔵省関東財務局長に対して「返還国有財産の公共利用に関する要望書」を提出した。

52・2・1　土地の利用等に関する希望調査を実施。

11・22　市議会接収解除促進実行委員会の代表が、議長名をもって、大蔵省関東財務局長に対して「返還国有財産の公共利用に関する要望書」を提出した。

12・15　日米合同委員会において二号地区の返還が合意された。

53・2・15　返還国有財産の処分条件（教育施設用地）について、大蔵省と渉外関係主要都道府県連絡協議会との間で合意した。

3・8　土地区画整理事業施行区域として都市計画決定するため市長から関東財務局長に協議したが、同局長から異存ない旨の回答を得た。

5・30　新本牧地区土地区画整理事業が都市計画決定された。

11・14　市議会接収解除促進実行委員会の代表が、議長名をもって、大蔵省関東財務局長に対して「返還国有財産の公共利用に関する要望書」を提出した。

54・1・30　1号地区の一部（本牧町四丁目一九番地先）土地三二・七〇平方メートルが返還された。これは道路の隅切りのためである。

9・14　返還国有財産の処分条件（公園・緑地、社会福祉施設用地）について、大蔵省と渉外関係主要都道県知事連絡協議会との間で合意した。

11・15　市議会接収解除促進実行委員会の代表が、議長名をもって、大蔵大臣、大蔵省関東財務局長に対して「返還国有財産の公共利用に関する要望書」を提出した。

55・4・　この頃までに横須賀の米軍施設として、高層住宅、病院などがほぼ建設された。

6・14　促進協議会の総会が開催された。

8・25　協議会主催の集合住宅地区、表通り地区換地希望者に対する研究会が開催された。

57・3・31　一号地及び二号地の接収が解除され、返還された。

いま返還された土地は整地され、土地区画整理の方法による新しい街づくりの計画のもとに基礎的な一部の工事が進行している。地元はもとより、全市的な期待が寄せられている。

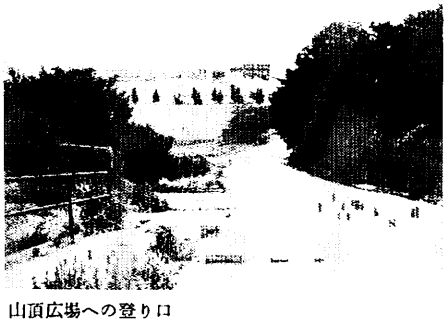
◉**お馬流し**——接収の解除は、本牧地区に平和を蘇らせたが、いまの平和なこの地区にとって、地元の人々の関心が大きいものは、伝統的な行事の「お馬流し」である。これは本牧神社の神事として神奈川県の選択無形民俗資料に指定され、現在中区において唯一の伝統行事として盛んに行われている。

海を失なったこの地区には、埋立に際して造られた本牧漁港があるが、そこがスタートの地点になる。

本牧が埋め立てられるすぐ前までは、木造船でのお馬流しが行われ、旧本牧町の六つの字、間門、牛込、原、宮原、箕輪、台、あげての祭りとして行われた。時代によって、仕様も若干違っているようであるが、次の談話は、埋め立て前に直接神事に奉仕した人たちの話である。

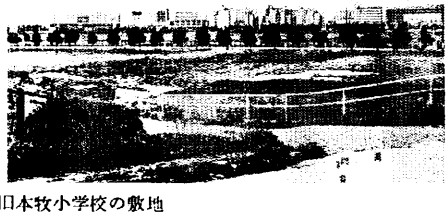
「八月には『船こぎの祭り』（註・お馬流し）があります。宮本、宮原、北、南、新町、八王子の六カ所でやるんです。それは、十二天さん（本牧神社）大祭の行事で、大祭はそれはそれは盛大で、店が山の上まで並びました。

ところで『船こぎの祭り』は、字ごとに船を出すわけで、船の乗り子は鉢巻きで色分けをします。赤、黄、ブルー、緑、白などです。流す『お馬』もつくるのは、昔から一軒だけが決められて


山頂広場への登り口

開発を待つ旧本牧接収地——右手は天徳寺裏の森

山頂から見る，左は本牧荒井，右は間門


旧本牧小学校の敷地

接収地のなか唯一つ残った中消防署北地方消防出張所

旧本牧小学校敷地裏の坂道

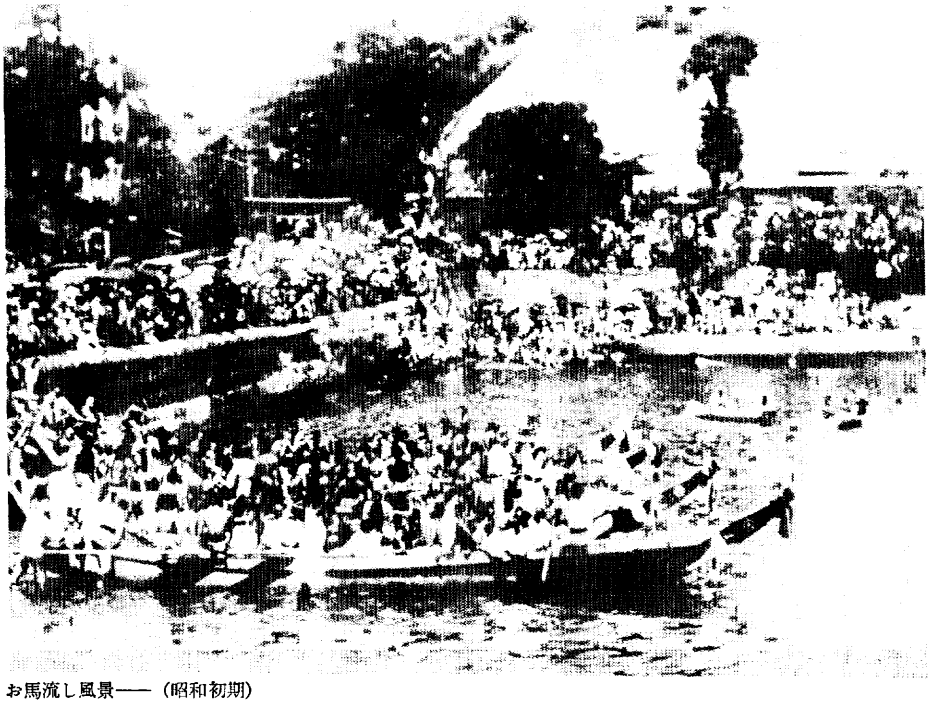
おり、本牧の羽鳥さんという家がそれです。

お馬流しの時の役割は各町内で決められるもので、自分の勝手にはできないのです。一番頭に乗る人は年配者で櫂さしといい、その両脇に二人ずつの四人がつきます。船頭は交替で漕ぐので一つの櫓に最低五人はつくので二五人位必要です。そうですな、一つの船には全部で四十人位の人が乗るのです。

新参の人には舳先の方の櫓がまわってきます。だんだん心得て、みんなの眼鏡にかなうと『よし、先頭にしようじゃないか』となるわけで、先頭になると一番の貫禄がつきます。当番があって船に乗った人たちをご馳走しますが、その時、先頭は上座に座ります。

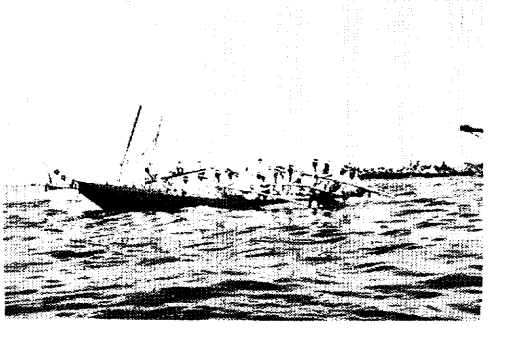
各櫓にも『櫓間長』というのがいて、櫓について古参の人が新参者を指導します。前からいうと、櫂さし、艫櫓、先頭、前櫓、脇櫓、四丁櫓、五丁櫓とあり、櫓を漕ぐのは激しい運動で、沖に出るまで何回も交替を繰り返すので、それだけの人数が必要なんです。槽いでいるのを見ると、櫂が一度に揃っていて絵に描いたように見事ですが、狂うと船は舵行するか遅れてしまうわけです。

お馬を流すということは、お馬さんに村の厄病神を乗せて沖へ流すということで、早く流してその帰りを争うのです。一番手の船が突然に向きを変えると、それをみんなが見ていて合図をします。そうしないとどこで帰るのかわからないのです。早く帰って



お馬流し風景――（昭和初期）

お馬流し神事〈神奈川新聞社提供〉



木造船での最後のお馬流し（昭和37年）〈落合昭一氏提供〉

十二天さんにお参りしたものが勝ちで、その年に幸運が向いてくるというのです。

舳の舳先についている印は、八王子の色は紺とグレー、新町は濃紺と白、北と南が白地に紋が茶、十二天（宮原）と宮本は鶴と亀で空色です。服装は各乗組員とも、色分けの鉢巻に股引と襦袢を着たもんです。彼らは、当日は三時に起き出し、風呂に入って身を清めてから船に乗るのです。そう、祭りの当日は風呂屋と朝湯の契約をして、船に乗る人や当番組の人、特に希望する人などを先に入れたものです。まあ、こうして行事が始まるんですが、とにかくたいへんなものでしたね」（本牧漁業協同組合有志座談会）

この神事の現在は、本牧埠頭の漁港から動力船で行われている。毎年八月、本牧神社の大祭に行われているが、基本的には内容は変っていない。

お馬は昔から代々羽鳥氏が作り、そのお馬をはじめに本牧神社におさめるが、そのときは神社の手前百メートル程先から羽織はかまの町の長老連が、うやうやしく頭上にささげ、すり足でリレーする。このとき頭上より下には絶対にさげてはならないというきまりは変らない。神社から漁港まではトラックではこばれ、港の手前から、同じように長老連の奉仕で船にお馬を安置する。安置された漁船には、榊、しめなわがほどこされ、それに二、三隻の供奉する船がつく。エンジンの音快よく数分にして沖に出ると、同乗した神職が、うやうやしくお馬を流し、すぐ反転して港にもどる。この神事に奉仕する町が、年番できまっている。

◉**社寺**――この伝統行事は絶えることなく、いまでもつづいているが、本牧元町の吾妻神社は祭礼こそ町の人々によって盛大に行われているが、この神社の伝統行事としての御神体腹帯巻替の神事は、戦後は行われていない。

いま、この本牧地区内の社寺は、先に述べたお馬流しの本牧神社、吾妻神社、天徳寺、多聞院、千歳寺があるが、それぞれは、いずれも地区の人々の厚い信仰のなかにある。

◉**鈴村要蔵**――このうち天徳寺は、全面接収地のなかにあっても接収をまぬがれ、市民に天徳寺だけは残っているという、一種の安堵感を与えつづけてくれたものであった。

その天徳寺には、かつて製茶輸出業界の大御所といわれた大谷嘉兵衛の墓がある。

寺の本堂の裏側には「三界万霊塔」がある。角塔八六センチメートル、台座正面六三センチメートルのもので、裏には「于時元治元甲子年十月　日建立　武陽横浜　人足方要蔵」とあって、鈴村要蔵の建立である。

碑の右側には、「横浜が開港し、交易を始めた頃、開港場造成のために近在遠国、さらに老若を問わず数百人を人足として使ったが、なかに愁いかな頓死、病死したものがあったのでここに回向したい」（要旨）という建立趣意が刻まれている。

要蔵は横浜開港に伴う土木工事に貢献のあった人物で、一代の

侠客でもあった。その経歴など詳細は不明である。この三界万霊塔はかつて、西側、約二〇メートル先に要蔵の墓碑と共にあったが、数年前整理されて、現在の場所に移された。要蔵の墓碑はこの際整理されたらしいという。

墓碑は、角塔で立派なものであったといわれるが、今となってはそれをしのぶよすがもない。

◉地つきの人々――いまこの地区の間門町や本牧町の一部にも、明治・大正期、或いはそれ以前の集落を継承するいわゆる地つきの人たちがかたまった地域がある。戦災にあって建物を失った家もあるが、これらの人々は昔ながらの屋号をもって今でも互に親類づき合いが行われている。

間門町の場合、地域の人は次のようにいう。

「昔といってもはっきりしませんが、間門村は四七戸しかなかったんです。屋号がありますが、屋号のあるのは本家筋で、分家は当主の愛称などで呼ばれてました。これなくしては通用しませんでした。今でも若い人もその屋号や愛称でお互いに通じています。

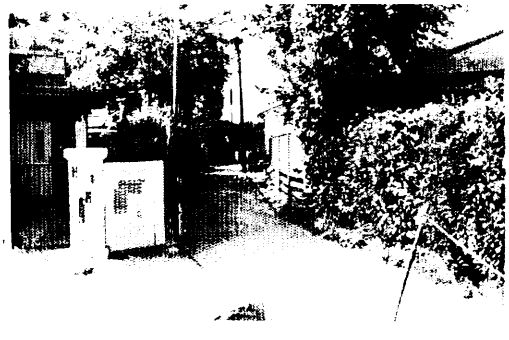
綿屋だったんで『綿コー』、かどやだったらしく『かんどや』、井戸屋なので『いどや』、浅間神社に関係あって『せけ様』、その他に『やぎや』、これは山羊を飼っていたらしい。それと八五郎さんの『さぶ』、荒井五郎さんの『桶屋』などですね……『なると屋』、というのもあります」「私の生れた家は、屋号を『お鉄砲』と呼ばれていました。親父が鉄砲が好きで撃っていたからといいますが」（間門町有志座談会）

本牧元町の場合にも、旧家といわれる家が多いが、ここでも町の人はいう、「本牧の屋号には、ごんげんさま、そば屋、にこみ、てんぺん、さとうもち、やぶじぞう、かしや、やわらかや、やぶや、いつぱた、かわばた、かんだ、かわしり、おかごめ、にかいや、いなりまえ、らんぷや、ちょうちんや、やまざきや、かわらや、というのがありますが、いまでもそう言ってます。わけはよく判りませんが、農業の片手間のらんぷやとかちょうちんやの余業がそのまま屋号となったもの、また住んでいる場所からそう言ったものだと思います。かわばた、かわしり、なんかは小さな川がありましてね。そういえばすぐ判ったものです。」（本牧地区有志座談会）

「このあたり（本牧元町……註）は、昔から区画整理をしたみたいにかたまっています。昔はこのかたまったなかから分家をする場合には、それぞれ土地を二反半ずつ分けられたと聞いています」（同座談会）

「昔の本牧の店で扱っているのは、雑貨に駄菓子に酒といったようなもので、やはり万屋（よろずや）でしたね。

だいたい屋号というのは、親の商売（職業）とか、あだ名がいわれたようですね。例えばかわらや（瓦屋）というのがありますが、その瓦屋も先祖がそういう職業に関係していたんだと聞いて



本牧の旧道（本牧町二丁目）

います。

これは屋号ではないんですが『ちょんまげ』といわれている家がありましたが、そこのおじいさんはご維新後、断髪令が出たあともちょんまげを結っていたんですって。日露戦争の頃のことですよ。がんこ者で、絶対にちょんまげを切るのはイヤだって……。私たちもそれを見ていますが、それでちょんまげって、その家のことを言ってました」(同座談会)

本牧町二丁目の旧道に沿った旧家も通り名で呼ばれている。

「うちの方の屋号でいま残っているのは十八軒ほどですかな。本通りの方から順に言いますと、角からぼうや、もえむさん、わき、にいや、しも、さいむどん、つじ、やいむさん、奥の道に入って、おもて、かつら、その道をへだてて向い合って、しんや、おけや、つねさん、かざいむさん、いんきょ、本通りの方へのもどり道には、やねいせ、あたらしや、むかいのやと、その家の下に在るしたや、だいくさん、道のはじに近く、でぐち、やぶ、それに、したのうち。ええ、むろん今でもそう呼び合ってます」(本牧箕輪有志座談会)これらの家の主人は町内にある箕輪薬師堂で毎月一回講を開き、茶菓を持ち寄って町内のことなどを話し合ったり、懇談をつづけている。座長といった役目は、やはり年長者がこれに当って、講をしきることが多い。

◉本牧町――現在の本牧地区の各町は、本牧海岸や根岸湾の埋立てによって、様相を大きく変えた。そして米軍の接収によって、その発展を大きく阻まれてしまった。接収は解除になったものの、蟠踞(ばんきょ)していた横浜のなかの外国の傷痕が癒えたのは、ついこの間の五十七年三月であった。

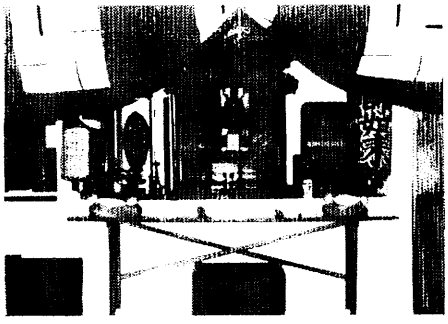
こうした本牧で、しいて中心地を求めれば、本牧町一丁目、本郷町の上台市場あたりと、それに本牧三之谷の一部となるであろう。

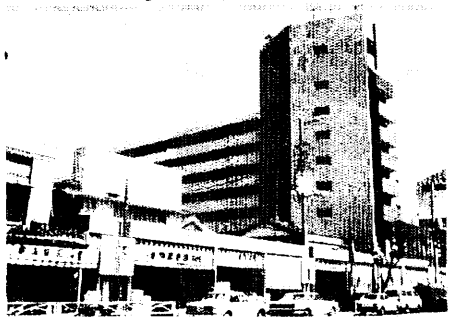
現在、本郷町上台市場や本牧町一丁目は、麦田町、上野町からつづく商店街となっている。

本郷町の一・二丁目は平地で、買回り商店街であって、本郷町商栄会・千代崎商栄会の商店会が結成されている。その中心は上台小売市場で、市民生活の上に大きな利便となっている。市場の外には五八店舗が店をかまえている。夕方などはどっと押しかける主婦らによってにぎわっている。この七階建ての建物は、この辺一帯の象徴的な存在となっている。市場の二階は横浜市上台集会所で、市民の利用が多く一二万六、八九六人(五十七年度)というように、活発に利用されている。三階以上七階までは日本住宅公団本郷市街地住宅(五四戸)となっている。

上台市場の真向いに、小規模ながら店舗十店の本牧マーケットがあり、ここも利用者が多い。

三丁目は丘陵地で、尾根道のガス山通りと、その谷戸下のガス谷戸で形成されている。本牧緑ケ丘や本牧満坂に隣接して、ここも住宅地帯である。ここの住宅地は比較的に樹木が多く、本牧町


本牧箕輪の薬師（本牧町２丁目）


この地区唯一の高層建（物公団住宅，集合所など）

改築成った大鳥小学校

上台市場入口

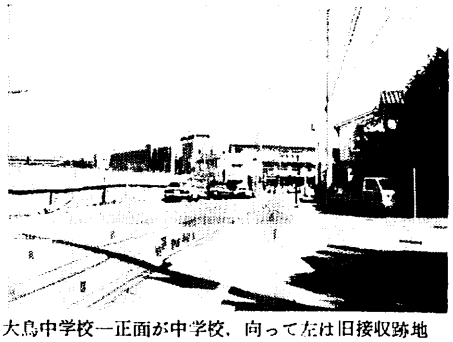
の奥座敷といった感じがする。古木が谷戸に見られ、三つほどのほこら（祠）は昔を偲ばせてくれる。ここにも旧家が数軒ある。

ガス山の入口は東京ガスの本牧住宅で、ここは三階建のアパートである。この地域はまだ高層マンション化がすすんでいない。

本郷町一・二丁目につづく本牧町の一・二丁目は、横浜信用金庫本牧支店、横浜銀行本牧支店、横浜本牧郵便局があり、この辺りは、商店街の末端となり、もとの米軍接収二号地に接している。

商店街の背後は、区画整理がされた住宅地で、住宅のなかには旧山手警察庁舎であった中区青少年図書館があって、地域の青少年に図書を提供している。隣りには、中区医療センターがある。

中区医療センター


大鳥中学校—正面が中学校，向って左は旧接収跡地

本牧漁業組合事務所

本牧町二丁目の一部、丘の上ももと接収の二号地で、この丘すそには旧道があって、大きく曲った道なりに前述の旧家が並ぶ。それらの家の庭先の古木や石垣に古いおもむきが見られる。旧道の辻には旧字名をとった箕輪薬師堂が祀られていて、本牧町二丁目南部町内会館が併設されている。

旧道がカーブする地点には本牧神社、前述のように、十二天からの移転後はここに鎮座したままで、ここから毎年八月には、「お馬流し」神事の行列が出発する。

本牧神社の奥は大鳥小学校である。老朽鉄筋校舎改築計画によって、五十九年一月に改築され普通教室二八、特別教室五となった。町域には残り少ない林や空地があるが、その林の温室五棟をもつ農園は、かつての本牧地区の農耕、特に花き栽培の往時をしのばせてくれる。

本牧町三丁目の全域は旧接収地で、緑につつまれた天徳寺境内と、中消防署北方消防出張所のほかは、すべて金網一枚だけをへだてた米駐留軍施設であった。

接収地内にはショッピングセンター、劇場、テニスコート、駐車場、PX、ガレージ、銀行、米軍専用の給油所、それに旧本牧小学校の校舎を全部白ペンキで塗った米軍高校があり、接収地内の中心地であったが、前に述べたように解体撤去された。

四丁目も同じくもとの接収地で、主要地方道をへだてて一号地区であった。ここには大鳥中学校がある。本牧海岸の埋立地の一部である。かつての海岸線に沿って新しい住宅地がつづく。埋め立てた海辺の名残りは、貝がらまじりの土や、もと漁業用の船小屋一棟にその俤(おもかげ)をしのばれる。本牧漁業組合事務所は町のはずれにあって、現在の漁業活動をささえている。

もとの接収地の隣接にあるバス停「本牧原」は旧字名をとったもので、旧字名が今に残る一例である。その筋向いの本牧町四丁目児童公園、この一帯は住宅地帯である。本牧元町の境には吾妻神社が地元の信仰をあつめ、現在も例祭が盛大に行われている。境内の鳥居、手洗鉢や玉垣には古さを留めている。境内には本牧町四丁目町内会館があって、町の人々の集会に使われている。

この四丁目は接収によって一カ所に押しやられた地域といえるかもしれない。古い本牧の人々の住居地の一角である。

◉本牧元町――本牧元町のメインの通りは吾妻神社わきの通りで、この町には大屋根の本堂を持つ多聞院、境内にはルンビニ幼稚園がある。その筋向い住宅地の中には、深いみどりにかこまれた千歳寺がある。さらにこの通りにそっては本牧元町公園、多聞院前公園があって、町の人々の憩いの場である。本牧元町公園はコンクリート製の象の遊具があるところから、象の公園とも呼ばれている。また本牧元町郵便局がわき道にある。

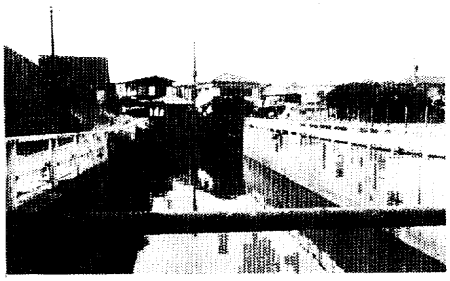
メインの道路には古い商店が並び、その昔の中心部としての名残りが見られる。

本牧元町はもともと海辺の町であった。ここには本牧町四丁目

に見られた、かつての漁業の名残りはないが、もとの漁業関係の人々の住家がつづいている。ただ運河が通っていて、ここにはもとの海岸線を示す防波堤の遺構が残っている。ここの運河のわきの埋立地には第五地区福祉文化センターがあって、地域の集会に多角的に使われている。運河に沿って海上保安庁の本牧元町倉庫、倉庫の隣りは五階建の大光相互銀行の家族寮が、この付近で唯ひとつの高い建物となっている。

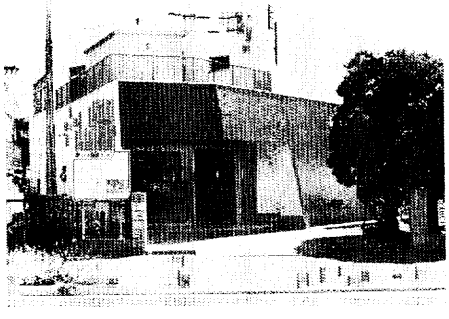
バス停の本牧元町から三渓園入口は、これも旧字名をとって八王子道路といわれているが、通称疎開道路ともいわれている。戦争中、建物の疎開によって造られた道であったからである。

この道には、神奈川県住宅供給公社によって本牧元町分譲共同

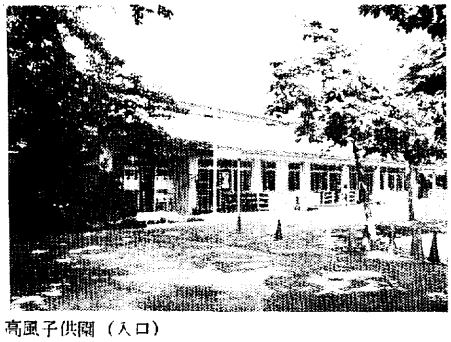

いまに残るもとの海岸の護岸（正面）

もとの海岸線（本牧元町368番地先あたり）

問門小学校


第五地区福祉文化センター

本牧南小学校


高風子供園（入口）

問門町の旧道

住宅(四階建)一棟が昭和四十三年五月に建築されているほかは、木造住宅がつづいている。この住宅の先は丘陵地で、丘には高風子供園、高風保育園、白峰会がある。付近には外国人居住の住宅も八棟ほどある。みどりはこのあたり一帯に濃く、高風子供園の前の坂は、八聖殿郷土資料館に至っている。八角型の建物の青銅がこの辺りにすぐれた景観を与えてくれる。この地一帯は本牧市民公園の地つづきで、本牧臨海公園の一部として園路と樹木が整備され、市民の散策には非常に喜ばれている。

本牧臨海公園は、切り立った丘の上にある。丘はかつての海岸線の境目で、「本牧鼻」といわれた地点である。今も赤い岩肌が老松をしっかりといただいて、自然のままである。

丘の下は生け垣にかこまれ中央に大噴水をもつ本牧市民プールで、夏は市民が多数来場して水泳、水遊びに興じている。プールに隣接してコンテナヤードがあって、そこにはコンテナが積まれている。ここは産業道路のランプにも当り、市交通局自動車部本牧営業所、そして本牧南小学校、本牧元町東公園などがある。これらの敷地はいずれも埋立地で、かつての海岸に近い部分である。

◉地区の町々——本牧大里町は、八王子道路から南へ本牧市民公園にいたる町域で、町の入口は三渓園入口を兼ねた六差路で、この角の林の中の尾崎堂は多聞院の墓地である。その隣りに五階建のヴィラ・マンションが出来、一帯の住宅地の様相を少し変えている。この一帯は、いわゆる庭つきの住宅が整然とした区画のなかに並んでいる。この区画のはずれ、三渓園の地つづきの丘地のふもとには大里団地がある。四階建三棟には七二世帯がここに居住している。団地には大里団地集会所と遊び場がある。

大里団地の南はかつて海に面した丘であったが、そこに横浜入国者収容所、法務総合研究所横浜支所が併設され、となり合わせに法務省宿舎六棟がある。建物の前には切りたった本牧鼻のつづきがある。その下が本牧市民公園となっている。

本牧といえば三渓園だが、この三渓園は本牧三之谷の町域にある。

三之谷は、もとの市電通りの主要地方道を境にして、一部が元接収地であった。主要地方道が大きくカーブする地点から南へ、三渓園に到達する一帯は住宅地である。カーブの地点一帯は商店街で、本牧三之谷商栄会が結成されている。道をはさんで一列が商店、うしろは住宅で典型的な日常買回り商店街であって、いわば本牧南部の中心ともいえる。うしろの住宅地内には三之谷北公園、三之谷公園があるが、この住宅地にも四、五階建のマンションが建てられて、既成住宅地の景観に変化が生じはじめた観がある。春ならば桜、古木の美しい本牧桜道から三渓園入口一帯は、本牧大里とならぶ高級住宅地である。この区域では高層住宅地化はされず、しずかなたたずまいを見せている。真福寺、本牧めぐみ教会、それにめぐみ幼稚園がある。桜道は八王子道路の六差路

で終るが、丘の下には三之谷町内会館があって、町の人々によって大いに利用されている。このなかには老人クラブの三渓クラブがあり、隣りには通称「亀ノ子石」という小祠がある。町内会の人たちの清掃奉仕が行われている。小祠の前は三渓園前のお茶屋で、四軒が営業を行っている。市民の行楽の休憩の場となって繁盛をみせている。

三渓園には四季おりおりに来遊する市民が多い。園の入口から池をへだてて三重の塔を望むのが代表的な風景で、いつも端正な美しさを見せてくれるが、塔の右側に赤と白で塗り別けられた根岸石油コンビナートのフレアー・スタック（排気ガス放出装置）がそれに添って見える。環境破壊であるという人も多いが、新しい景観といえないこともない。

昭和五十七年一月、園内の初音茶屋が再建された。三〇平方メートルの小さいものだが、ここにはかつて夏目漱石、横山大観、前田青邨、下村観山などが来園して、三渓園の風光を楽しんだということである。また室町時代初期の建築という燈明寺本堂が園内に復元されることになっている。この建物は丘の上に立つ三重の塔の本堂で、京都府加茂町にあったもので、昭和二十二年台風によって倒壊、材料がそのまま保存されていたところ、燈明寺から市に寄贈され四億八千万円をもって、五十七年から復元工事が行われている。完成は昭和六十二年の予定。

間門町はほぼ三角型の地域で北側には主要地方道、南側は産業道路、二辺はこれらの道に囲まれている。道路の分流点が根岸町と接している。間門町の町域にはもとの二之谷といわれたところを含み、この二之谷はいまは三渓園の一部になっている。三渓園の丘と県立立野高等学校の丘にかこまれた一帯は住宅地域で、地方道から直線でつき当った所は間門小学校である。豊かなみどりが校庭の東側を覆うだけでなく、昭和五十五年二月に改築された近代的な校舎（普通教室二五、特別教室五）は、あかぬけたたたずまいで間門の新しい景観となっている。小学校わきの丘には、地下軍需工場の跡が樹木に覆われ、この旧跡を発見することは困難でいまや知る人ぞ知る、という存在になってしまっている。丘の上は県立立野高等学校である。校舎、体育館、プールが広く空間をとっている。産業道路はその下を通っている。このあたり、かつての海岸線の部分であったがけ地が見られる。がけ地の上には作家山本周五郎が数々の名作をものした旅館間門園がある。みどりにつつまれたたたずまいには、旧状が偲ばれる。周五郎専用の一室も保存されている。ただし、周五郎が見た海は、石油コンビナートの高い煙突のながめに替っている。

立野高等学校の丘地は、二之谷の先端に当っているが、南側は地方道に樹木を茂らせ、大きく突き出ている。かたわらには間門交友会館、道に跨道橋がかかっているが、この橋で間門町の北側を結ぶ。麦田の隧道から根岸にいたる道で唯一の陸橋だが、この地域には珍しいものの一つである。跨道橋を渡れば右手はもとの

接収二号地である。昭和五十三年六月地方道に沿って七階建のマンションが建設された。隣接して企業が数社進出してきている。

地方道のうしろ住宅地には、旧道が通り、東福院を中心として家並みがつづく。その背後は本牧和田、本牧荒井、本牧満坂、本牧緑ケ丘の各町だが、本牧和田は全町域が旧接収地、現在市民の住宅は一軒もない。本牧荒井も尾根道を中心として旧接収地、わずかに東福院裏山(墓地)につづいて山ふところに住宅がつづく。接収地周辺は未開発で、ここにはみどりが残って自然環境の良好さを加えている。

山の上、本牧緑ケ丘は、県立緑ケ丘高等学校の所在地である。西之谷から上った地点だが、ここには全日空緑ケ丘社宅(五階建)など、三棟のマンションが建設されている。

本牧満坂には、前にも述べたが西武鉄道が開発した住宅群が、きっちりとした区画のなかにある。この住宅群の東側に二つの突出した丘があって、その丘すそや谷間に住宅がかたまっている。住宅地には心身障害者施設の横浜市おおとり園がある。ここは丘をへて本牧町や本郷町へとつづく。

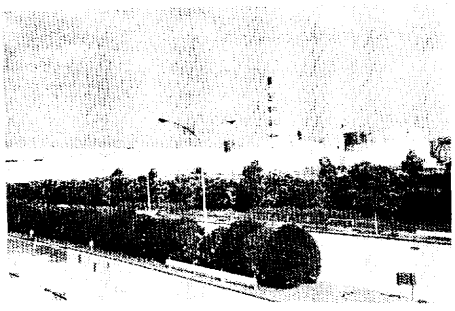
以上、現在の本牧地区は、旧接収地が地区の中央部に当り、それが旧海岸地帯に一号地、二号地として広がっているため、周辺の本牧町、本牧三之谷、間門町をそれぞれ中心とする地域との相互関連が大きくはばまれている状況である。従ってこの中央部が将来区画整理によって、新住宅地帯となってゆけば、当然関連して各地域は変容してゆくことになるのであろう。特に旧接収地の区画整理(再開発)事業にともなう山頂公園の新設によって、本牧満坂や本牧荒井の住宅環境もよりよくなったとはいえ、三之谷の商店街への影響が直接、間接的にどうなるか、今後の問題とされている。

◉**遠い海**――いま、八聖殿のある本牧臨海公園の高台から海を眺めると、海ははるかに遠く、目の前には、かつて海だった埋立地がつづいている。

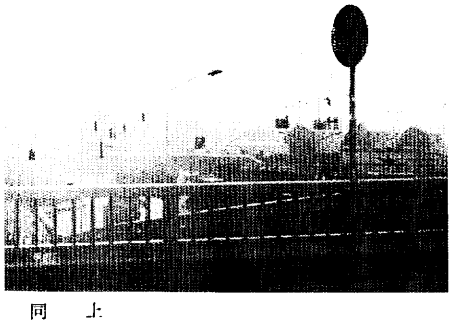
左手に遠く本牧コンテナふ頭、そこから右へ日産自動車専用ふ頭や三菱重工業、三井物産、日本通運、鹿島建設のある錦町、その隣がかもめ町で、中小区画用地として五七社の企業が進出している地域である。さらに、本牧臨海公園の正面が豊浦町で、日本石油精製、住友金属、日本農産工業、国際埠頭、横浜トヨペットがあり、その右隣りは日本石油精製会社の石油タンクが隙なく並ぶ千鳥町となっている。

本牧臨海公園のすぐ前の広い道路は、右は根岸園の所で旧市電通りと合流して、根岸駅前から磯子方面へ続き、左の方は埋立地の臨海工業地の中を通り、本牧十二天から小港町へと通じている。ここは新しい産業道路として交通量が多い。

この産業道路は、かつての本牧の海岸線とほぼ同じ位置を通る。産業道路には、ひっきりなしにコンテナ輸送車をはじめ、あらゆる車が通る。中央分離帯や道路の両側には公害に強い夾竹桃



石油コンビナート



同　上

が植栽され、その花が、殺風景さに潤いを与えている。

道路の手前、本牧元町二九二番地先には水路が残されているが、そこはかつての海岸線、防波堤の名残りである。この間およそ九〇メートル。一見しただけでは、そこが海岸線とは判らない。地域の変貌の痕跡をここに見る。かつての本牧海岸の残影は、このほかには見当らない。